



094380-000-3

特8-568

太平洋

遲塚麗水/著

M30

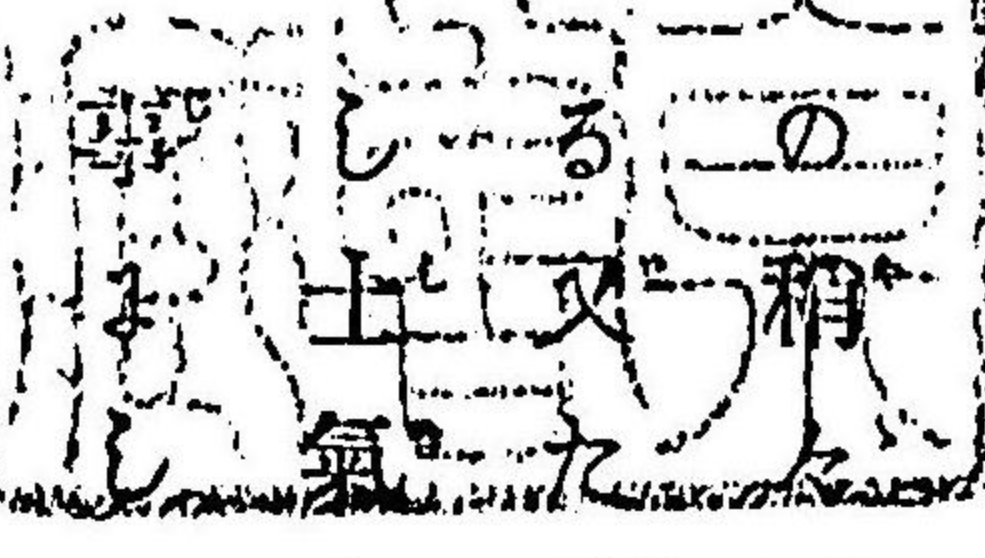
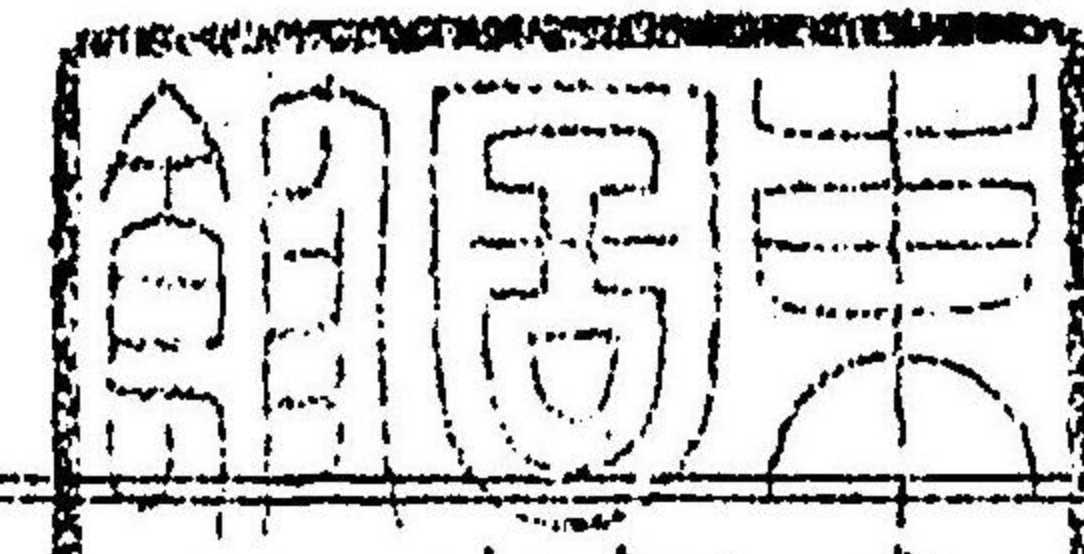
DBQ-1883

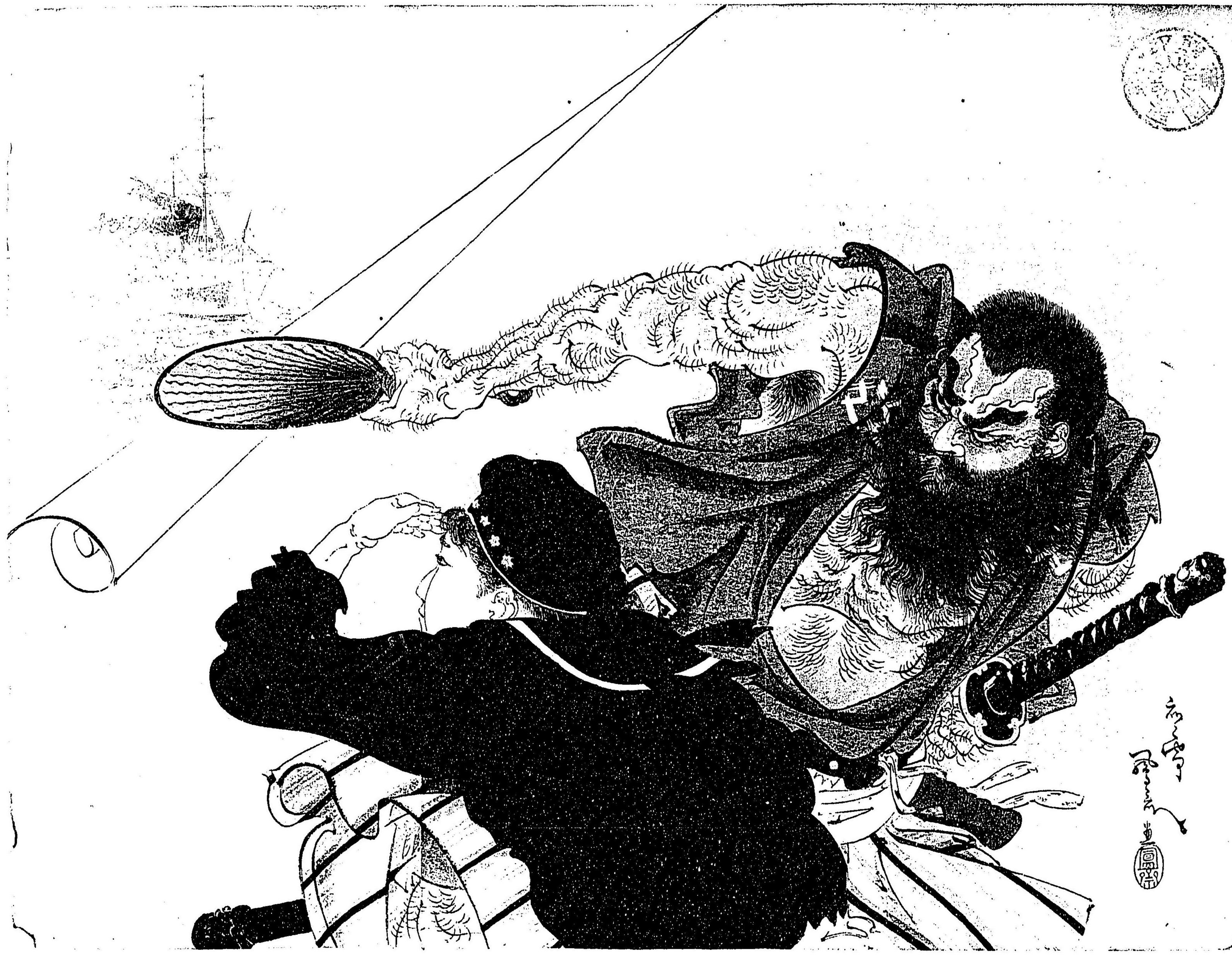




太平洋序

我日本帝國一たび清國と鋒を交へしより世界列國
 の稱を長敬する所とかり隨て彼等の東洋に注目す
 る又前日の比にあらす此の時、當り心神を鼓舞
 し士氣を興振するに實に必須缺くべからざるの要
 事にして而して日本男子たるもの又た宜しく膽を
 練り鋭を養ひ以て千歳の計を畫すべきあり然り而
 して小説其の物の精神の如きも亦た暗々冥裡に我
 帝國固有の俊魂を養成活動せしむるに力を致さず





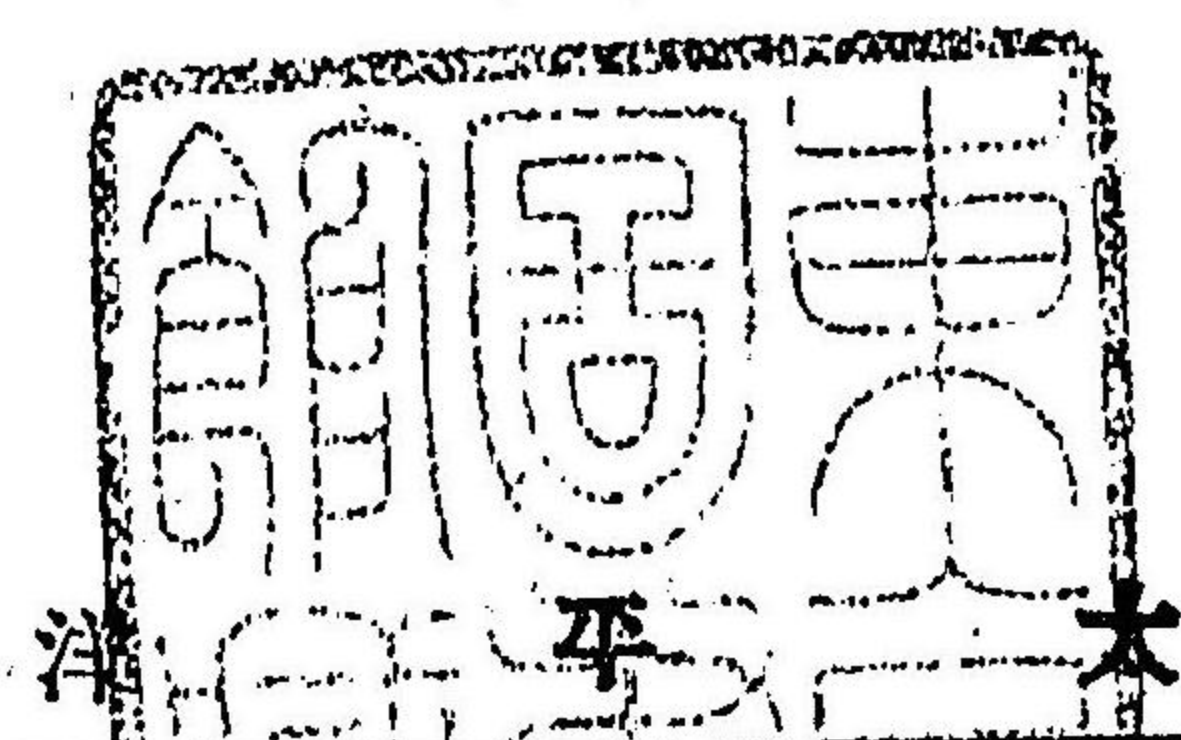
んやあらざるかり會々太平洋上梓成るゝ至りて始
 めて其の精神の編中を徜徉するあるを見る疑はず
 大方愛國の諸士一たび此の編を繰くあらば壯絶快
 絶益々佳境に入りて殆んど巻を捲ふと能はざらん
 を云爾

明治丙申師走

屈伸生

Kawano
 川野

持8
568



太平洋

第一回

麗水生著

眼も鼻も赤い大入道のやうな巨浪が今ひくむくと涌き上つて一散よ
 浪の殿を目がけて馳け来ッて我れと吾が頭顱を打ちつけ凄まじく荒れ
 馳びながら四邊も潮の華の驟雨ふらせて白い装束を曳きつゝさらさら
 と退き却へるその中より一個の少年露はれたり
 少年の復の浪の来ぬ間と躊躇く殿を取りつきて這ひ上り涼しき松の蔭
 の白沙の上を濡れたるまゝの身軀を投げぬ年の十三四と覺しくて潮も身
 軀を真ッ黒々と染め上げ白いところの唯だ足の裏と掌ばかりの確白骨
 違ましく肉肥にて鈴を張つたやうさくりくとした眼涼しく毛蟲を遊せ
 たやうさ眉これも晴々し牡丹餅二個を重ねし二重頤頸の黒牛の頭のやう



まで肩から二の腕にかけて茶碗を覆せたやうな力加自づと書き一文字も結
 びたる唇もつづく片笑の淺からず又た深からぬ愛嬌の濃々しさうちよ
 儼しく宛然黒檀と刻れた坂田金時といふ委あり、
 少年の太の字様も沙の中へ低臥して少焉中符も舞遊ぶ影を餘念なく
 眺め居りしが急も起き上つて腰も結ひつけたる網遊の口を解き倒し倒ま
 る打ち振れば自分の拳よりまだ少なき榮螺幾個か轉がり出しぬ少年の丁
 嚙も沙の上よこれを馴べて「ちう／＼峭芋ぢい」と算えながら何だまた十三
 しきア取れやしねえや如是少許じや仕方がないせめて五十も取らさけり
 やア成らねえが朝からか／＼つて是れッばかりたア驚くさア」と瞬きもせず
 む恨めしさうな榮螺を凝視てやがてまた網袋の口を絞つて腰も結ひつけ
 岩角へ飛び上つて白い瞳を揃えまたも寄せ来る大浪が赫と開いた口を見
 かけて躍り入らんと身排へたるその折しるもれ危険ことよ」といふ優しい
 聲が松の蔭から聞えたり、

身を躍らせて飛び入らんとしたる少年のたぢ／＼と三歩ばかり背後へと
 踏踏音がら關節深く沙のうちを踏み埋めて屹と願へれハ繪のやうなる娘
 二人紫甲斐絹の圓張の蝙蝠傘の蔭も肩揺り合せて松の下へ佇みぬ姉と覺
 しきり十七八妹の十二三今まで氣も注がさしりしが沙も塗れし身淋の見苦
 しさのこの姉妹の端麗さ映り合つて鶴の前の鳥ともいふべき醜さ少年
 の黒澤の顔を露色もして眼ばかりを急瞬かせぬ、
 十二三の可愛き女兒の房々とした髪を海老色のリボンで結びて鳩より優
 しい肩のあたりも振りかけたるを流風も吹かせながら嬌然と打ち笑みて
 『お前何をして居るのソソお大きな浪の中へ飛び込もうとして怖くさい
 の』と馴々しく問ひかけぬ何と怖いことアあるもソカ斯ンお浪が怖くツち
 やア漁夫もやア成れや為さぬと潮音のやうな響きながら蜆貝のやうな眼
 を光らせて仰眼でサロリと二人の顔を見較べたりえらい事ねソソでも
 海の中よハ鮎だの鰈だの章魚だの何か居るでいさいかそんな大きなお

魚も食ひつかれたら何するの 蝸入道きんぞよお猪口よりも大きき疥で吸
 いつかれたら大變よお前もそれでも怖くは無いの』と濱風も打ち顔がへる
 紫箭飛白の長い袂を胸のあたりへ懐きかゝえて少女の二重瞼で睫毛の長
 い黒子がちの涼しき眼を睨れば『怖いことがあるもンか』と少年の頭を掉り
 ぬ『真誠も怖くさいこととしてお前も今何しよ海の中へ飛び込もうとしたの』
 『それを取りよ遁入るンだ』といひながら無作法千萬も足の指先で沙の上
 へ列べ置きし榮螺を示しぬ、
 乙女と童女と始めて吾が脚下の沙の上へ榮螺のあるを心づきぬ童女の
 豊やかある頬を笑は解して『おや可愛い榮螺だこと姉様斯様も可愛い榮螺
 をお雛様へ献げたいことねえ來年のお節句よん老僕も頼んで斯様榮螺を
 捕へて貰ひませうお前はどの榮螺を捕て何するの』『阿嬢の藥代よするの
 だ』といひながら怪しやその涼しき眼の涙ぐみけり、

小娘と少年とのをかしき問答を聴きながら徐かき松風の涼しき蔭も身を
 寄せたりし姉のこの時妹の肩も手を置き言葉優しう『可哀さうよお前の
 母様の病氣あの』と問ひかけられて少年の悲しさを眼を氣り少焉に松風
 浪の音の中へ無言ありしがやがて唯だ軽く打ち鎖きぬ一文字も結んだ唇
 を見る間へ『への字』様として臉を洩れて頬も傳へる涙の痕淋しげあり
 『先刻の大層えらかつたが泣くあんで弱いことねえ泣すよお話しお前も感
 心さ小兒だねえ毎日海へ遁入て榮螺を拾つてそれを賣て母様も藥を買て
 上るのかえお前も父様のあるかえ』といや優しき言葉も悲しさを傳
 へしな小き胸も充ち滿ちぬ尙更濱の觀音堂の壁の繪の天人のやうな美
 しい女の桃の蒼のやうな唇からの優しい言葉も五臓六腑も浸み渡りて覺
 えすツツとして戰慄せり
 少年も唯だ頭を掉りぬそれの可哀さうも父様の居あいのかね不連の身の
 上だねえお前の家の何處だえ矢張この村も棲んで居るのかえ』少年のやう

やうな口を開きぬ己の家はこの千本松原の盡頭大木横の樹があるその下だ』さうかえお前の名は何といふにぞして幾歳もあるえ』己の名かへ己の名ね鮫太郎といふんだけれども村の小兒達ア己が游泳が巧いもんだから河童の太郎と言つて居るよ年の十四だ』といへば姉妹のホ、ハ、と打ち笑ふて昔の唇を綻ばせり、

『河童の太郎喜んでをかしい名だことねへ姉様鮫太郎といふ方が餘つ程佳い名だこと』小女の笑は頬を歪めて下より姉の顔を仰見れば乙女の幾度か點頭てさうともく鮫太郎の方が幾層佳い名だか知れやしさい立派の名前だことお前の親孝行だから末來よへえらい人よあるよ屹度えらい人よあるよ』といふ聲に鮫太郎の身の底は浸み渡りぬ、

この間よ少女の姉の袂の下を潜りて岩の邊りにはけ寄せり寄せては返す浪よ揺れし小螺紅螺小安貝小人島の猫の飯でも盛りさうさ鮑貝紅き白き黄き青きくさくさの貝どもが波の波よからまゝりて活きて走れるおもしろ

姉様は驚わをさせ奇麗な貝が如彼深山ありますこと取りたいことねえ取つて頂戴するわんさ奇麗な貝を波が攫つて行きますよ鮫太郎さんお前請留だから取つてお呉さ後で伊夜美を上げますよ』いはれて鮫太郎は願ひ伊夜美さんさアいるもんか欲しけりや膽斗拾つて遣らう』と私語ながら波打際よ進み行きて潮の花を身よ浴びつゝやがて兩掌よ盛りあげたる小々貝を少女の前の沙の上よ置さけり、

少女は他愛もさく打ち笑みながら袂より紅き手巾を取り出し潮よ濡れし小々貝を包み初めぬ姉の鮫太郎の前よ進み寄り鮫太郎さん飛んだ邪魔を爲ましたねその代りよお前の捕たその榮螺を悉皆妾が買て上げませう』と鳳凰の刺繍麗しき細珍の帯の間より閑し明して手づから編し紫絲の延命袋そのうちより幾枚の銀貨を摘みて鮫太郎の掌よ載せやれば鮫太郎は味を圓くして氣味悪さうよ指の頭よて打ち返し』こんさよ多分貰つては阿娘よ叱られらアその榮螺の二錢位しか無え代物己ア二錢しか貰います

まいこんきよ貫ふことア無之といひながら掌と並べた儘の銀貨を乙女の鼻の先よつさつけぬ怒のさいことア取て置きあさいさア麗子さん歸りませうお前もちつと遊びよおいでと言ひ捨て、妹が手を拉き白砂青松のその邊を歩み行く後姿上布の衣を透き徹してほやりく、と緋縮緬の長襦袢の燃れたつさま霞の衣も包まれたる天津乙女宛然たり、
恍然として後姿を見送りたる鮎太郎やがて我も返りて松の枝も懸けたる襦袢衣を手快く取りて身も纏る鞆も緊乎と銀貨を攫つたま、紫甲斐絹の蝙蝠傘の後から見に隠れつ躡り行きけり

第三回

千重八千重の太平洋の波を渡りて風の萬斛の涼しさを遠邊の千本松原も吹きつくれば松の「おう涼しいく」を鳴つて枝を揺つて宛然針と南京球を穿したやう奇葉毎の露を砂路の上も蹴しかくれ露の珠のころく、と沙のうへを駆け廻る紫甲斐絹の蝙蝠が青松の間からちらく見ゆるその後

より鮎太郎の見え隠れも隠け行きたり姉妹の姿のやがて流の觀音の林の中へと消に去りぬ鮎太郎の一散り沙路を走つて續いて林の中へと潜り入りしが姉妹の早や何地行きけん疾い歩だかアといひながら鮎太郎の肩で息を刻んで傍の赤松の幹も身を寄せぬ到頭見失つた流の觀音堂の壁も描いてある天人のやう奇美しい女子だと思ふたら何だか不思議なことよつたら其天人が壁から脱け出して来たのかしら何も見慣ねね女子だもの狐じやアねねかえ、をかしき心地も成つて来たといひながら眉の毛も腫を塗つてさてつくく、と掌の上も銀貨を安排て躡りもせず祝つめたり、
「観貝でもあんでもさい矢張立派な二十錢銀貨都合五枚だ一枚一圓といふお金を愛い顔もせず吳るたア寒氣な女子だ」と獨語をいひながらまだ心の底の何處やら疑懼晴れず銀貨を眺めながら歩むと、あしよ我知らず松の下路をたどり行けば運のやがて杜絶て真柴垣まで打ち圓ひたる酒酒とした家の門の前も出でたり、

門の扉の半ば開きて迂餘の運の澤ある小石の珠とも見にて黄金毬杉の二
列もすらりと肩揺りあらへ玄關前の老松の枝より面白く波の鼓風の笙を
れも和して舞ふやうあり門の白磁の名標も黒々と「春海別荘」と書れたり
鮎太郎の獨り「點頭解つた彼の二人の娘御の家」此處だらう此の春だつた
ッけ驛の蓬々ど生えた海軍の軍人が眞符のやう赤金で房を両方の肩よつ
けて有平細工のやうな綺麗な勳章とかいふものを胸へ垂下げ薬研を見た
やうな帽子の上へ白い毛の生にて居る奴を被つて長い劔を曳すりながら
出て来たのこの家だ後で龜藏爺も聞いて見たら其の驛武者の海軍大佐
で一昨年の露士亞と日本の戦争よいらい功勳を現はした人だといふたが
彼の姉妹の其の驛武者の娘かしらさう思やア眼つきあんざア背て似るや
うだ確かよ愛の家よ遠ひさい駒下駄の痕があらア狐か狸かあんどゝ悪い
ことを言つたさア」と鮎太郎の沙路の上へ印されたる可愛き駒下駄の痕を
視つめ居たり、

折しも開ゆる琴の香も和せる歌の節面白き繪の鳥の一曲鮎太郎の籠の
より中を窺けり弾くもの姉妹歌ふもの妹娘鮎太郎の妙ある爪音歌の
節も聴きとれて恍然として少時籠の外へ佇み居たりしが俄かよ眼を回
して「ヤア全然忘却して仕舞た賣た紫螺の渡さずは銭ばかり貰つちやア濟ね
えやさうだ」と獨語ながら故に來し路を一散り散りへと走せ戻つて離
れ松の其の蔭の沙の上へ並べ置きたる紫螺の許も腕づき大事よかけて握
つた銀貨を袂よと入れかけしが先頭大福餅の食缺を入れ忘れて鼠も食ひ
破られし其の痕の紫の通るほぞの大孔ありさて懐も仕舞はんか翻れ落し
て失はん帯の間へ捻り込まんよ細より細き細帯の役立たず鮎太郎困
果て、銀貨を丁嚙り沙の上へ置き打捨てたりし網袋も紫螺を拾ひ入るゝ
後より突如の濁聲「鮎貴様ハ紫螺を拾ひて何ぞやア」
拾ひかけし紫螺を擲て鮎太郎の銀貨の上へ身軀を覆せて吃と願ひ「龜藏
爺紫螺を事があるもンか如時少許じやア仕方があらア」といひながら復も紫

螺を拾ひかゝれば龜藏の初麻搦頭を打掉りて「うんやとぼけるさ」といふその口氣の酒の香高くて大蛇の息そのまゝあり

第四回

龜藏の枯葉のやうな唇を紫色の苔の生た舌の先でペロ〜と舐め廻しとぼけるさこの龜藏様が黒い眼で睨んだのも昔ツから外れツこまじよといひながら酔ひぬ時の猿眼酔ての後の峭斗眼の陶然とした流盼を呉れたる負の氣の鮫太郎が十分の弱味あるらしく柳も受けて阿叔また何處かで飲で来たねンン事と言さいで遊寝でも爲つせえよこの松の蔭が一番涼しいとばや紫螺の拾ひ終れと起ちも上らず酒を飲むが飲ひまいが乃公の錢で乃公が飲ひよ不思議のあるめえ餘計なことを放言しやアがる唇の邊を至痛といふ程捻り上げて紫色の極印を打つて呉るアケえぶケえぶ大枚十兩といふ大金を借り倒して到頭返さず困死た貴様の老父の借

錢の何時返して呉るのだ親の負債を返すのの子の役は何して呉ると言つたところが耳を揃けて返せと言ちやア出来ねへ相談をア其の一兩を渡して仕舞へとづか〜と進み寄りて襦袢の領を鷲攫んで引き立たり釣し懸りし章魚のやうな鮫太郎の身体を宙も吊されしが立たせぬせじと四肢を苦争きて醫の下の銀貨を砂のうちへと挽和ぬ襟の中へ頭を埋めて涙持つ眼を下より光らせ「そんな無理なことを言たつて己ア知らねえ知らねえ知らねえツてい知ねえよ」まだ剛情を張るか春海様のお嬢様から貰つた金を隠して居るさ其れツばく持掛けて春海のお嬢様から銀貨で一兩確か買つたを見て居た子それでも知らぬといふか眼から煙火の出るやうな痛い思ひをせぬ前々溫柔な其の金を出して仕舞さア可かこれだぞこれだぞと紫螺のやうな銀拳の頭を唾吹きかけ鮫太郎が眉間の邊を衝きつけてぐり〜と

鮫太郎の無念の切齒をさして龜藏が爲すがまゝと身を委せ居たりしがや

十四
 がて海豚の鳴るがごとく一と聲高く號ながら身を震はせて雨の塵と沙を
 蹴り上り驚ろく龜藏手を放すその筒袖の下を潜りて手快くも小磯交
 りの砂を擲つて浴せかくれば思ひがけなき眼潰もわつと號びて兩手を顔
 と推し當てつたぢくど却退りするその隙に沙もろども銀貨を擲つ
 て緊乎と握り觀音寺の山門から搖ぎ出した仁王そのまゝの龜藏が俄盲の
 とかしき態に三寸紅蓮の舌を吐きつゝまた下臉を指推し當てゝ紅螺その
 まゝと臉を翻し逸足さして雲を霞
 突き立ちたるまゝ少時一寸の身揺もせずやがて絲より細く眼を推し明
 けて流るゝ涙を掌で横み拭ひ龜藏の五歩六歩走け出せしが眼中に砂まだ
 残りて酒に蒸されし眼も涙るその痛の村の東方寺々傳の眼薬さした時よ
 りも劇しくて唐辛水で洗はれるやうさその心地己れ鮎の奴め覺えて居ろ
 と煙草の脂で染め上げた亂杭齒を刺き出だし思切て眼を開らけり家鬼の
 眼よりもまだ紅し、

小鯛二三枚の腮より腮と葉合せしを片手も提げて黄昏の兒持川邊を沿
 津の方より小走り歸り來るのそれ知らるゝ鮎太郎やがて小磯防の村
 盡頭の一本樹その樹の蔭の吾が家へと立ち歸りて扉の邊に身を寄せあが
 ら様子を窺ひやがて徐かゝ扉を推し明くれと歪みし闕に扉の脚の邊りが
 ちがたびしと響くを中より咎めて燈火もなき昏のうちより消えさうさ女
 の嗚聲「誰れだえ」と聞えたり、
 「阿母晚くあつて濟あかつた今歸つたよ病氣は何だえ彼の正覺坊の龜藏爺
 の來りしあかつたかえ來やしあかつた今日ね思ひも寄らぬお錢が取
 れたよお藥も買て來たよ淡泊いお魚も買て來たよ、燈火を點けてから緩
 座話さうよお、暗えさア」といひながら魚を櫃の端に置いて手探りよ進み
 寄り昏のうちよ小洋燈探りて耳の邊に揺り動かし「やア失策た油がさいぞ
 それで阿母ちよくら油を買て來るから少しの間の辛抱だ」といひながら

十六
ら復も走け出せりその機會も額を柱と打ちつけて眼から出でたる瞬く間の電光看るくうち馬鈴薯は世の大瘤の湧て出たるを撫ながら門邊を出づる脚下より飛び上つたる一怪物墨より黒き齧端の昏も二個の星と眼を光らせざるやア／＼えこの鳥猫め喫驚したる

第五回

其も紛れし鳥猫を逐ひ退けて危く爲てやられんとした小鯛を拾ひ鮫太郎の壁を傳ふて爐畔の脚すを靡りてカンタラも火を點しつ
鴈の出し疊の上は綱目も分らぬ煎餅滑圓を淋しく布て骨立たる身軀を横へ故新聞よて張り留めし壁の肉の至たく落ちて木舞の骨の荒れ出でたる
此の邊は顔を向て鳩の爪のやうな亂れ髪に枯枝そのまゝの手を推し當てたる母の臥姿哀れぬ寂びたる家の中鮫太郎の霞のやうな飛び來る群蚊を
鮫太郎よて拂ひながら「あゝ今宵は何て之熱い晩だらう阿母病氣の何だ
之些たア佳いやうか之今日はね意ひもよらぬえ人からお錢を勝手貰つた

よ見させえ斯んかゝ閃々光つて空塵ンも手紙の附かれえ銀貨を貰つたよ
しかも大枚一圓だよこのうちでお藥が十二錢魚が三錢後より二十錢の奴
が四枚と他も銅貨が五錢あるよ當分の藥代も米代も困りアしさい
い蚊だねえ蚊遣を焚いてそれからお粥も魚添えて進やうよといひながら
泥足を宙も浮せて母の傍へと滯伏寄り私と其の横顔を覗き込みて覺えず
知らず洩れ出づる太息を周章て呑み込みぬ

「今日のお底で餘程心地が佳いやうだよ」と母の反側をうちぬそれ佳い
梅だ」鮫太郎の白い齒を微かゝ露はして手も握みし銀貨を母の枕邊へと
排列たり母の凹みたる眼をや、光らせて芋殼のやうな細い腕をつと張つ
つ身を掻きお、澤山もお金だねえ」といひしまゝ重き頭を支えかねてやが
て枕も瘦せさらばひし頬を埋めぬ鮫太郎の膝行さがつて土間も在りし柴
一握を爐のうちに投げ込み燐寸の火をふきつけて濁まく煙のうちも頭さ
し入れ涙もろとも酒を掌も拭ひさして怪しげある木箱の庭まがり／＼と音

立て缺椀も搦ひ出でたる糶米を土鍋に移し片手も小鯛と出刃と缺血とを
 持ち添へて背戸の井戸畔その桔槔の竿も廻りて手快くも水を汲みあげ米
 を精ぎ魚を割きて復た小走りも馳せ戻つて爐の自在竹も粥煮る鍋を懸け
 たり、
 粥の煎にて蟹の眼球もさも似たる泡沫ふき翻れ魚も熱にて香り高くし
 ア阿母ヤツと出来たよお、忘れた飯の前もお薬だ』と鮫太郎の買薬の封を
 解いて缺土瓶も投入してやがてこれさへ煎し上れば母の傍へと膝行寄り
 て『ア阿母薬が出来たよ』と窺き込み母の何の應へもさく唯だ身を起し
 て疑乎と吾が見の顔を視めて『お前このお金を誰様から貰いて来たのか
 え』と問ひかけぬ回みし眼の底に光れり、
 『このお金かえこれね彼の濱の観音堂の傍の春海さまのお嬢様から貰つ
 たのだ』母の蒼い顔を愁も陰らせ見す識らずのお前も如斯く下サツたのそ
 うしてお前のその額に何したのだえ』といはれて嘆息鮫太郎の掌で額を押

ゆれば眉間の撲刺肉破れて紫も紅葉のやうある血潮の痕これかこれア
 唯だ今門口の柱へふつけたのだといひつゝ血潮を袖で拭へば母の度せた
 る頬も体はる涙細く飯匙のやうに尖り出たる額をヤ、顔はして『誠正よ
 左様かえ萬一貧苦も迫つて不圖した出来心から他人様のものへでも手
 出して……妾アもうお薬も傍飯も傍魚も食たくさいから請願お前の正直
 よしてお呉れよ好いかね若しそんな卑下了簡をお前が出すと今までのお
 前の孝行の水の泡萎の固より亡あつた父様が黄泉の下から何か心配あ
 るるか知れぬよ第一この荒磯の家の傍先祖さまも何と申譯があらうか
 え』といひながら薬茶碗を擡げたる吾が見の手をつき退けて淋しい頬の缺
 を深めぬ時あらぬ時雨の枕紙の上へばらく、
 茶碗のうち湯薬の波の立ち騒ぎてあはや翻れんとするを鮫太郎の辛く
 も鎮り己ア他人様の物さんさア塵塵んも取つた事アさいよこのお金の全
 く春海のお嬢様も戴いたのだ怨しいことを阿母の言ふさア若虚言だと思

ふから龜藏爺も聞いてお見と眼を圓くして怒しげな母の顔を見れば母の些かよ得心の色を浮べて「左様かねさうあらば安心したよ言はう」と思ふて終佳の機會がなかたつが今宵の好い機會お前も話して聞かすところがあつた身も浸りて聴いてお呉」と言つて後の言葉を呑み込み細き手を差し伸べて鮎太郎の手を握り「善くお聴きお前尋常の漁師の兒でなさいよ」夜に波の聲松風の音のうちよ聞け初めたり、

第六回

「これ鮎太郎この母が云ふことを膽も膨りつけて忘れてあるまい」と先刻までの遺詔をかき言葉も打て變りし都言葉握られし手の頭より母の心臓に浸み入りて身軀の自と戦き頭へ血を切りて奔り出でし勇みの春駒その蹄の音よりも劇しき胸の動悸、

鮎太郎の破笠と雙膝を埋めて眼を丸くし「阿母只の漁師の兒でな方公の無いか夫ぢやア乃公の誰の兒だへ」と問へば母の大意を吐きて「其方が親父

徳川家の麾下其方が祖父の荒磯の波右衛門といふて國館五稜廓の戦ひの折に討死さされ其方の父の義平公の慶喜公もお伴申してこの小諏訪の村に棲でからさて次第に落魄果たその末が漁師と成つてさて其方が知つて居る通り去年の二月は悲しいことと成られた後この母と其方が廣い世間の鬼のうちよ取り殘され辛い苦しいその中で一年越え病氣よてこの母も其方の成人を見ずよこの世を去るも間があるまい鮎太郎善くお聴きよこの母が亡かつた其後の其方の天下に唯だ一人の孤兒辛いこと悲しいと山ほどあらうが海ほどあらうが彼の鮎太郎尋常の漁師の兒でなさいと言はれるほどよ立身してお呉れ好いか鮎太郎天が下よ一人の母が其の臨終の際とありて天が下よ一人の兒も頼みませ何卒好い男兒にあつてお呉家名を掲げてお呉立派な者も成つてお呉えらい人も成つてお呉に好いかえ善く聴いて呉たかえ」といひつゝ一入緊しく鮎太郎の手を握りて座も堪えかねし身軀の帯のやうよへたくと倒れて枕よと絶りつゝ

夢の廻りし心地の鮫太郎長き睫毛よつらぬき留めし涙の珠を眺らせて眼
 光鋭く「それで阿母乃公の親父の徳川の麾下で乃公の麾下の子息か」と
 と襦袢の衣捲ひかねたる膝小僧を兩掌に抑へ小さい肩をひと揺り揺りて
 膝行す母の兩掌を庭天に組て啼く音淋しく點頭乃公の今まで只の漁師
 の子かと思ふて居たが嬉しいか嬉しいか武士の兒だ麾下の子だ阿母何故
 早く話して呉さかつたぞ喜びの色夕暁の波を染むるやうな微笑の漣滴
 頬より鮫太郎の黄金の鈴の鳴るやうな聲亮朗に「阿母乃公ア屹度ねらい
 人は成て見せるよ出世して立派な男よ成つて見せるよ安心して早く病氣
 を癒してお呉さアお薬を喫んでお呉お粥も柔かよ出來て居るよ」母の儘か
 ん點頭つゝ快よく進むまゝのものを食べてやがて母子の昏のうちと枕
 駢べぬ心許で眠られぬ母の過越し方の忍び思ひされぬ見の勞れよ小
 舟立て何をか夢むやいゝ乃公只の漁師の兒ぢやアあいな鮫太さんて呼
 び捨てされて居るものか懼れながら麾下の子息だぞ」大の字様は悪臥た

りし鮫太郎夏といへ曉の輕寒に醒め明したる病苦の母の己が打ち被さ
 たる襦袢を剥きて私と吾が兒の上を被せしがやがて鴉の啼音の松風波の
 聲のうちと擾れて破窓のはがらと明るくある頃鮫太郎も飛び起きぬ
 昨日まで只の漁師の子昨宵からの麾下の子の鮫太郎の先づ母の容跡尋
 ねて少しの快いといふ元氣善く爐火を燃して湯粥の淋しき朝食をこ
 そこにこれを濟せやがて例の網袋を腰にして阿母それで「濱へ行って來よ
 午發前よ」復た還るお薬の枕邊に置いてあるそれで「行って來よ」と言ひ
 遣して千本松原の下を潜りて濱邊へと砂路を歩めり、
 やがて觀音堂の壁の畫の天女のやうな春海の姉妹と逢し昨日のどころよ
 來りぬ非道の龜藏その腕を襟攫されて沙を打ち浴せたるその邊より大小
 の足痕踏み亂れて投げ捨て置きたし繁螺をも半ハ沙より面を出しまだ波よ
 掃はれず鮫太郎の岩の角に腰うちかけつゝ「龜藏爺何したか今宵からの
 麾下の兒だ平生のやうな負て居るぞ」

太平洋

浪の観音堂その本堂の片隅に天神机を推し並べたる碗白者十五六人孰れも稚子筆を墨よくまかせて師の坊の留守の間の樂書や打ち興じ草紙の上よ山水天狗さてのまムシ坊主の戯れ書また様様の遊みの童女の子守せるが三四人姉弟を米苞のやうな背よりつりて睡れよ好い兒と歌ふ守唄坊や好い兒よ安眠しよこの兒の可愛き限りさい山での木の數芽の數天よ昇れば星の數沼津へ下れば千本松千本松原小松原松葉の數よりまだ可愛と昔の兒の夢搖がせぬ

日のハヤ本堂の前の大松その一番目の枝も懸つて午後の時とありぬ手習小兒の癖の窩も石投げつけしやうな睡き立ちて長刀草履突掛けながら吾が家の遺囑もと馳出す子守の大方も背の兒も母の乳房を啣せんと立ち歸る途中寺の門の此方の木陰その木の根を枕として胸毛を風も暖がせつ

太平洋

墨黒々と顔を染めし一人の童子の立ち留まつてその塚さく睡様を眺めしが急も龜の子のやうな頭を襟のうちに埋めて少なき肩を歪め足音窺ひて立ち歸りて後より走せ来る同儕を驚ねさ「やいやい睡いじやアいけあい徐かよ来て見ろ正覺坊の龜藏爺が睡て居るぞ悪戯をして遣らうじやあいか」といへば五六人の碗白者それア面白い龜藏爺何處も居る彼の助平爺の泥酔爺痛目も逢してやらうをかしい事を爲てやらうさア皆来い〜」

と雀躍して皆を惡臥たる龜藏爺が身邊も環り立ちぬ

龜藏爺の昨日鮫太郎に不覺を取りて脱け残りたる齒の根の搖ぐまでも切齒せしがさて酔も蒸れし眼一面の沙子一寸先の昏も彷彿ひ辛くも村も立ち歸りて路傍の井の畔も眼を洗ふ折りからの酒の香今宵この家も降り

の間角村から花婿来るぞと祝儀の燕その支度もて人々の群れ集ふを只さ

ら夏も小袖況して酒でん痛の龜藏爺太郎の家へ吐鳴込むを後よ廻してそ

の家へと遁入こみしたゝかよ飲み食しての宿酔また迎ひ酒と自分勝手

名をつけて今朝も飲みしその酒も浮々ど浮れ出してこの寺の門の蔭の涼しさも陶然と睡ろみしが運の末孰れ負らぬ悪戯者がクルリと夫を取り巻いて「やアこの醜態を見る獅子ッ鼻から提燈が垂下つたはら消えたはらまた見えた」蟪蛄のやうなその涎垂れるく流れるくをかしいかアと私語ながら先頭も立ちたる碗白兒の手も押し推賢筆その先も唾啣ませて振き足さし足忍び足して爺が額も墨太々どへの字眉を書きつけたり、夢のうちにも輕痒たかりし龜藏爺ひまやくと紅螺唇歪めて反側うちぬをかしさも小童等のハフ、と吹き出せしが口を挿へて二歩三歩またも徐徐手を伸して唇の邊も奴髭を描き添ゆれば睡れる龜藏の背も皺を盛みて眼を細く明たるがまたひまやくといひながら反側うちぬ、をかしさも堪へかねて小兒等の音を忍びて笑つゝ涙を出しぬ「さアもう喚起してやるべいや」と一人の童子が發言せ「まだく悪戯してやらう」と年齒の童子の頭を掉り清書草紙の紙を割きて墨黒々と筆太よ「このおやぢ大

まけまけて文久三ツと書きたるを龜藏爺の帯の結目等のやうあるその先へと結びつけて「さアこれで可い可い起してやらう」といひながら鼻の孔をバ稚子筆でせ、クリぬ三ツ四ツ五ツ續さまを噎しつゝ龜藏のわゝあど力なき欠伸をあし返す筆を鼻の先へと持て來つゝ提燈を揉み消しつゝ「オイ老爺お前の股へ辨慶燈が這い込んだせ」といはれて龜藏無き立てたあればこの小兒の一人殘らず消えて失せけり、龜藏まだ睡眼を指つて五月蠅飯鬼だかアといひながらのさりとて原さして歩み行く後よりクスくと優しき笑ひ聲願むけにこれ春海の姉妹あり、

第八回

「あら姉様傍覽あそませ前途も行く老爺の背中よをかしかことを書た紙片が垂下つて居ますこのおやぢ大まけまけて文久三ツおんて屹度村の悪戯ッ兒の仕業でせうねだが昨日の鮎太郎といふ小兒の親孝行の子供だから

如彼悪戯の爲ますまいね呼び留めて教へてやりませうかねえ姉様と妹の
 艶子の許微の花の澤うつくしきその顔と被せて指さす邊りを姉ある君
 子の打ち眺めて「ほんとうよをかしいねえ如彼悪戯をされても気が付か
 い除程魯か人に見れるお艶さん早く行つて教えてお遣其の序は鮎太郎
 の所在を聞いて御覽といえへ艶子の塗履は沙を踏たて衣の袖を背は振り
 かけし髪もろども吹き靡かせ走りあがらホ、と打ち笑ふ、
 背後は美人の笑聲轟轟かして願ひむけは是れやこれ四五日前東京から
 春海の別荘へ来りしお嬢様龍藏の紫色の襦を刺し出し掌を天庭も當て、
 路を譲け「エへ、これの春海さまのお嬢様濱邊へお出あさりますか」と
 いふ其の顔の何事ぞ墨黒々との字眉の天庭も並びて唇の邊の奴隷これ
 の片類の眼を描けり艶子の一瞥見るより長き袂を面も當て、眼から涙の
 出る苦しき忍び笑姉ある君子もをかしさ堪すありけんその身を松の木
 蔭へと藏し「お嬢様濱邊へお伴をいたしませう岩の傍の一本松彼處が一

番涼しう傍座いする岩陰の小さき茶螺が傍座いする紅螺も傍座りま
 す不安貝小豆螺雲母貝に小鮎貝お怪貝さきも御座りますこの老爺が腹
 斗拾ふてさし上げませうと追従の舌を敲いて米搗碓斯のまゝのお辭儀
 醜しども醜しやこれや昨日の鮎太の眞似をさして幾枚の銀貨を博取んと
 の心あるべし、
 『いや老爺だこと』と艶子の抱ねし長き袂を投げて「い、よ貝あんを拾つて
 貰ひさいでも澤山よお前村の小兒も悪戯をされたことを氣が注さいの
 背へ手を廻して御覽をかしことを書てある紙が垂つて居るよ」といわれ
 て龍藏の仕いで背後へ手を伸し帯際の際片それを撥んで袖を伸しつゝ讀
 み下して「この野郎太い奴だ乃公の癖で居る隙は如斯悪戯を爲やアがつて
 お嬢様何奴がこんな悪戯を爲ましたか教えて下さいあの鮎の野郎でい
 座いませんか』とどうだか知らさいよだがね鮎太郎の親孝行だからンか
 悪戯の爲さい筈まだお前の顔も悪戯が爲てあるよへの字眉も奴隷早く顔

と洗つてお仕舞他も見られると笑われるよ」といわれて龜藏の脂の汚しで顔を撫で、一面の墨の痕を視つめたる顔のをかしさへの字眉奴提も半解けて唯だ眼ばかり光らせたなり。

姉も妹も覺えず噴飯たり、籠子の腹面をく遠慮なく「オヤ、お前の顔の大變ね消炭盛へ飛び込んだ銅鑼猫も善く背てよッ、善く撫回して顔の筋や頬の皺へ浸込んで宛然翁の古面も善く似てよ」と評し去てまた氣を換え「それの左様として置いてお前、鮎太郎の居るところを知らぬか知つて居るから鳥渡呼んで来てお呉れ、鮎太郎を」といへば龜藏眼を丸くし「アノ鮎の飯鬼ですか、彼奴ア讀み居ませうよ、だがお嬢様彼奴ア善く善い野郎です、からお氣を注げ、善い油斷の善い飯鬼ですから」

「飯鬼だ、善くて親孝行の人を悪く言て、善い人の顔で分るよ、眼が朝明として唇が締つて天庭が廣くつて些しの陰りがある彼の鮎太郎が、善い人さんて、ねにお姉様可哀さう、眼が腫乎として白子が凄く光つて居るお前こそ

悪い人のやうに見えるよ、ねえお姉様早く鮎太郎を捜して連れて来てお呉れ、いんれて龜藏唯だ何となく恥しくそれで、鮎太郎を連れて来ませう」と濱邊の方へと走せ行きたり。

彼の一本松の岩角よ、来かれ、鮎太郎の例のどとく大波小波よ、身を揉れつゝ、腰ある網袋のうちよ、幾個かの榮螺も盛り、ア鮎太郎と聲かけられて願ひきたる鮎太郎、さて昨日の復讐かと思ひながら波の退く間、岩よ手をかけ、壁と踵のみ胡粉を塗し、よりまだ白き眞ッ黒々の其身、身を隠らせて岩の上、屹と立ち、乃公を尋常の人の兒と思ふか、憚りながら麾下の子息、武士の子だぞ、ア名乗てかゝつて来い、遊よこの跡を見つけたる春海姉妹、あれ鮎さん、珍覽鮎太郎が岩の上へ飛び上つて、臂を張て何だか大層威張て居ること」

春海の姉妹、鮎太郎と龜藏とを伴て觀音堂後の別荘へと歸り来れり、妹の

三十二
鮎子の小走の刻み歩みて姉より先立ち門入りて小石逕を左に折れ黄
金毬杉の下を潜りて庭の柴折戸その掛環を外し小招きして言葉優しうさ
ア鮎太郎やお前の妹からか道入さア早くお道入さ遠慮さんて爲てをか
いことよ姉さん其の老爺の来さいうちよ早く鮎太郎を入れて下さいお前
の嫌よもう是で善いからお歸り玉を展たる腕を伸べて龜藏を推し隔て
姉と鮎太郎を内に入れて身殿の楯もあるやがて柴折戸撲地と鎖して呆れ
て立ちし龜藏の啓をも呉さア鮎太郎洗足の水を持ッて来させるから
足を洗ッて堂へお上り久作や鹽水水を汲でお出呼べバ應と答へて僕
久作腰さりの黄麻の無袖衣被ッたまの毛胸露はもうんどこしよといひ
ながら鹽水盛れる水翻さじと蛙股の脚下危く様の香脱石の上と載せてお
娘さん何處から如斯小兒を連れて伊座ッた荒布のやうさこの兒の衣の
魚の鱗が光つて居ますぞコンお腰さえ襦ねえ身装でお座敷へ通され
ましねえと團栗服を穿りながら鮎太郎と君子と鮎子の顔をかはりくは視

つめ居る、
「あゝ久作様はさかいよコンお腰さい襦ねえ衣服でもコレは漁師の仕事者で
些しも耻かしいことなさいのよ軍人が金筋で刺繍をした美しい軍服を着
て腰の軍刀胸の種々の勳章を懸けて居たりまた巡査が驚のやうさ白
い制服を着て剣を下げて靴を穿て居るこれの身分は應じての仕事者です
ねに姉様さうでせう鮎太郎の着て居る腰さい衣服の刺繍のある軍
人の衣服と同じ事でお魚の鱗のピカピカして居る勳章と些しも異な
りません靴を穿て居る代り草履を穿き剣を下て居る代り網袋を
腰に垂て居るのですねに鮎太郎さうだねえ」と鮎子の連は鮎太郎の肩を持
て早く足を洗へと促しぬ、
鮎太郎はまだ見たことのない綺麗な庭園の内へ誘ひ入れられ鏡のやうさ
椽側へ腰をかけしが夢でいかに訝かりつゝ唯だ恍惚として居るのみ
「いん早く足をお洗ひ眼ばかりバナー／＼させてをかしいことね」と鮎子のま

たも促しぬ乃公ハ尋常の獵師の子で、いから何も臆することない
と氣を屬ませせ何やら骨の髄より戰慄出るを幸くも抑けて鹽のうち又泥
足を突き込みハ絲絛衫の銅鑪木の香の水も傳るかと思はるゝその冷たさ
飯櫃としてさへまだ立派過るこの鹽でこの泥足を洗つたら脚屈り
せまいかと鮫太郎の思ひぬ、

「足を洗つたら堂へお上り併し鮫さんお魚の鱗の動意ハ懸けて居ても善
ければ腰又佩した網袋の洋劔だけ撒してお呉ボク／＼滴が落ちるから」
姉の君子ハ笑ながらその網袋を解しゆぬ「ア鮫太郎や遠慮を爲さいで
二階へおいで」姉妹ハ先立て案内すれば夢路をたどる心地の鮫太郎高
麗緑の青墨の上を危び又咬つて毎毎の襖繪屏風の美さ又眼を驚かし
つやがて二階へと登り去れハ筥高く欄干長く青簾捲き上げたその下
築まり来る百里の雲物東南ハ伊豆の山々西ハ田子の浦曲の白波北の窓よ
り仰ぎ見れば太古の雪ハ残る富士の高根雲の淵を曳きながら氣高く立ち

たる其の景色の晴々しさ、
圓窓を楯と取つて其處ハ二個の机を駈べ壁ハ世界地圖の一幅を懸け楯
間ハ黄海戦争と威海衛攻撃の油繪をかけ彼方の壁ハ大理石の緑どり
たるトランプアルガアの大海戦の額一面を懸けたりけり姉ある君子ハ机の
上なる呼鈴又指をかけたゆ／＼と鳴り渡る鈴の音ハ鮫太郎ハ眼を
丸くしぬ、

少年ハまだ呼鈴といふものを見たことなし乙女の織さ指の先が小さき
覆鐘の頭ハ觸るや松蟲よりも高く涼しき音を立てたる又遊さぬ、
階子を傳ふ楚音のズシリ／＼と響き渡りてやがて襖の蔭ハ掃き出でたる
緒面の若い女ハ白鷺をドツカと仰して太く肥たる兩手を鬨の上に排列へお
やく／＼この見ハ誰家の子で珍座ります眞正ハ行儀の悪い穢さい子
供ですことお巧食からお刺錢を取りさうさお嬢様早く外方へお遣りあそ

バせ今も東京からお兄様が被入しやるとまたお叱られ遊ばしますよ真正
はお座敷が汚れます今朝アンナも清潔にお酒掃をしたお椽側も足痕が附
て居ると思つたらこの見だよお前早く外方へ行つてお呉い頼むらするを
艶子の腕ひ真似をして「春や何だえッソナ失禮かことを言つてこの見のこの
村の孝行子息で今日の妾のお客様ですよ早くお菓子とお茶を持って出」
吩咐たり、

下女の不精く、身を起し口の裡まで何やらふつ／＼いふて下り退りし
がやがて清水焼の急須茶碗に銀の湯瓶を黒檀の茶盆の上へ取揃へたるを
左手に持ち右手より練羊肝と花形のカステイラを盛りし七寶焼の菓子皿
を持ち出で君子嬢と艶子嬢との前に置きさるも好奇といふ意味の流眼で
兩人の顔を一寸見てその眼を鮎太郎の後姿に滑らしつ、やがて襖の蔭に
せぬ君子の急須を執つて茶を澀ぎて鮎太郎の前へ置き艶子の机の上の
紙を取て斜に折り善きはせぬ菓子を取せ小楊枝さへ取添えて「さア鮎太郎

お喫りよ」と主人顔に進めたり、

鮎太郎の甘さうあるお菓子を見て覺えず固唾を呑みぬ立派あるお座敷も
座りて兩人の美人と對し唯だ譯もかく恐縮して身軀を石のやうに堅くお
し叩額をしつゝ退却しつゝ椽の隅の上まで膝行來たるを君子の笑うて「可
笑いことねは鮎太郎のソナも遠慮ばかりしてサ、さア一個お喫り」と羊肝を
箸で摘んで差しつくれ後の柱前のお菓子の挾撃も手を差出して手快く
ひしやくと武者ぶり食うて餘りの美味さよ二ツ三ツ舌鼓を打ち鳴しその
掌を膝小僧も塗りつけぬ君子と艶子との顔見合せてうち笑めり「美味かえ
その羊肝の美味けれハ膽斗お喫り今度このカステイラを上げやうか」と
差し出すを掌へ受けて一口は噛みながら「如此美味お菓子に始めては阿母も
贈りてはさア乃公一人で喫りやア附が中らア」といひながら怖く手を伸
べて茶碗を取りおびぬお前の親孝行だねえ歸る時よハ膽斗お菓子を上げ
るから阿母のお土産もお為美味けれハ深山お喫り」といひながら鮎太郎の

しさま眼や、潤む折しもあれ門の邊も勇ましき車の音姉妹のツラといひ
 さま坐を起ちて下へと行きぬ鮎太郎も我知す起ち上りしが先刻よりの危
 坐よて初坐又慣れし脚の麻痺れよろくと踏めくを辛くも柱と縋りて踏
 まりつゝ手快くも燈の華を撃り取つて額と貼りぬ、
 やがて階子を昇り来る燈音這回ハ四人ばかりあり貴郎阿母も伊同伴だと
 思ひましたは何故お出さされませんか」と問ふハ正しく姉の君子「うむ阿母
 ハ伊都合でもう二三日ハ東京又被居しやる」と答ふる聲の涼々しきハ抑も
 誰れか鮎太郎ハ柱の下ハ身を縮めて屹と襖の外を見上れば鮎子を先立て
 君子を後よして飾の章の帽子を冠りて胸ハ金釦子腕ハ金筋小さき釦
 を腰ハ佩げたる立派で温和さうき軍人あり、

第十一回

雨が引き續いて岐阜や富山や方々ハ大水が出たがこの驟の暴さハ何だい
 昨日の夜汽車で横須賀から東京の家へ歸つて今朝の二番でやつて来たオ
 オ善い風が来るオ善い風が来るのハ善いハ潮風ハ吹かれて鮎さん大分黒
 く成つたねえ阿母が被入しやらんで不好ぬえか乳が飲みたく成つたでせ
 う今日ハ阿母の代りハ僕が抱て寝をさせよう」と快よく打笑へハ「知りませ
 んよ」と鮎子の長き袂を揚げて撲つ真似する、
 軍人ハ短剣の革帯を外して鮎子ハ渡し上衣を解き袴を脱ぎ北の窓を背よ
 して革溜圓の上ハ座れば君子ハ傍より團扇を取て簾ぐその顔前ハも増し
 て麗し、この人年ハ二十五六短かく剪りし髪ハ毛ハ天鵝絨のごとく肩凝
 く眼涼しく髪ハ赤くて顔温和しければ何處やらハ威光あり「あ、やツと蘇
 生ッた」といひ赤がら始めて鮎太郎の方を見て別ハ怪しむとも思はぬ様子「や
 ア活潑らしい小兒だね鮎さん近所の漁夫の子かえ」と言はれて鮎太郎ハ
 口の中尋常の漁夫の子でないや「鮎子の耳聴くも聞きつけて」お尋常の

漁夫の子でいふおんてお兄様この見ねこの村で評判の孝行者ですよ
 毎日く漬へ出て榮螺を採つてソレで病氣の母を養つて居るのですよ
 れの感心お小兒だね佳い林格だ軍人よ成つたら立派お人よあれるだら
 う年の幾歳十四だとうむさうか歳よしちやア大きいぞ學校へ入つて居る
 か去年まで上つて居たうむさうか」と澄泊あるその言葉邊幅を飾らぬその
 林度軍人といふもの怖いもののみ思ひ居たりし鮎太郎の胸の一物こ
 の春風よ吹き解け去りて痕もあし欣然として其の傍よ冊き居たる君子嬢
 の團扇の風もろとも情けを送る片頬の笑燭然と「艶さん全然忘れて居た
 ことねえ兄様がお好だどて今朝珈琲を瓶よ盛て井戸よ浸けて冷却してあ
 ることを春に附けて持て来さして頂戴さ」といはれて艶子の點頭おがら
 やがて下婢の春を喚びて珈琲を進めさせぬ七寶の皿よ同じ茶碗小さき銀
 の匙の上よ角砂糖が載せられたり軍人の一口飲みて舌を鼓し「甘いおア
 氷のやうよ冷却して居てさア鮎太郎お前も一碗飲で後覽と差出す怖々おが

ら匙を執て角砂糖を掬ひ込み小さい泡沫の湧き出で、自づと廻るを見つ
 めしが無作法よがふりと飲んで「これ何だ乃公ア煎出した番茶だと思つ
 た」といへば軍人も君子も艶子も笑ひ出し「それ珈琲といふものだよお前
 まだ知らないの」「珈琲毛唐人の飲む物おんかア知るもンか」「さう毛唐人の
 飲むものさ珈琲といふものね小赤豆のやうお豆を熬つてそれを器械で
 粉よ碎いて煎じて斯ういふ飲料よあるものさこの珈琲豆の出来る國は
 覽よ、よ在る印度それから馬來群島ヒリッピン群島この邊から産出のだ
 よ」と軍人の座を起ちて壁よ掛けたる世界地圖を指さしぬ、
 「ソノお事を言たつて解らねえやその掛物の何といふものかね眼鏡の畫
 よしちやアをかしいし羅算の畫でもあるめえ黄色いのだの紅いのだの青
 いのだの紫だの種々お色で描てあるの何の畫かえ」軍人も君子も艶子も
 噴飯せり「お前はまだ知らないのこの掛物の世界地圖さよ、が亞細亞で
 コ、が歐羅巴連華のやうおの北亞米利加で煙草の葉のやうおのが南亞

米利加洲千鳥の横に成って居る様々のが亞非利加で法馬のやうなのが大洋洲といふ國さ解つたかに鮎太郎さん、が支那人の棲で居る國、が露士人の居る國善くお聴き、が露士人の國だ、歐羅巴の本洲から島拉の山を踰て柴比利亞から滿州から何だえ大さな國じやアあいかだ、が國が大きいと云つて怖いこと、いよ先年の戦争を傍覽佛蘭西と獨逸の仲裁が無つたから日本十分の勝利であつたよ口惜いことよ日本はまだ露士亞と佛蘭西と獨逸を相手として戦争するだけの軍艦があい爲め、到頭軍隊を引揚げたのだよ、だからドシ、軍艦を製造して前方面にやうか、格の佳い人を軍人として今から十年の後の大戦争よ、支那露士亞佛蘭西獨逸の艦隊を打破つて大日本國を世界の大帝國にするのさ、と君子娘の地圖を指さして慷慨したり、鮎太郎は熱々と地圖を眺めて、うむ解つた夫れじやア日本の何處ですか、『日本かえ日本ね、傍覽よこの紅い細長い島がさうだよ、鮎太郎は打眺めて、『宛然小赤豆のやうだ、さア』と語るうち、沖の

波次第は黒くきり來りて尋常から海の様、荒浪の漁小屋よりの竹法螺の音鳴り渡る。

第十二回

竹法螺の音を聞きつけたる鮎太郎耳ひき、欬て、願さながら、『ヤア附が眞黒と集つて來たお嬢様、あれ彼の通り沖の波の色が凄く變つた』と會話の中の言葉を外せば、雅心はだ、亡せやらぬ、鮎子娘の『オヤ、ア何時の間にか大層お船が出たことよ、お兄様、一處よ看よ行きませう』と立ち上る熱心ある君子娘の發の聲、似もやらす泉のごとく涌きて、盡ざる雄辯の鮎太郎と鮎子の膝小僧を膠で懸、密貼し、ごとき起たせもやらす、『鮎太郎や善くお聴き成程日本のお前の言ふ通り、小赤豆のやうな小さい國で今があるが、お前や鮎さんが大人よ成る時代よ、萬里大さな國よ爲たいものだね、この荒浪の岸を洗ふて居る波、太平洋の水の一片で、此から三千里の大海原よ、珊瑚珠のある海や、眞珠のある淵、金銀五穀の豊か、と種る島々、數の知れぬ程ある

よこの島々を日本の領分としたら日本の世界第二の大帝國この世界地圖
を見てもし知れやうが世界のうちと陸が一分で海が三分海の世界の大道だ
よ板子一枚下の地獄あんで夫の弱蟲の言ふ言葉だよ日本の四方と海を環
らして居る國だから日本國中残らずが船乗よあつた決心であくてもから
さいといへば飽子の然と笑ひあがらそれだから姉様の海軍が好きあ
よ海軍が好きだから五島の兄様が好きあの一昨日から精々と絹ハンケ
チと錦の模様束縛をして今日の五島の兄様が入被しやるから間と合ふ
様とと晴宵夜闇まで精を出して被居つたのも海軍が好きだからよさうです
ねえ姉様と妹が無心のその言葉よ君子のサツと顔を紅めその座と勝はす
後の外へと逃げ行きけり
無邪氣の飽子のまだ覺らず姉の後より追かけながら階子の邊よ小走の歩
みを停めて小招きしア兄様もいらッしやい鮫太郎もお出早く看み行き
ませうといひ捨てました姉様お俵あそばせと追ひ行きつゝ座敷の隅々積

の隈を尋ね回れと君子は何處も嬌羞の顔の熱氣を冷却し居るらんこの間
よ鮫太郎の挨拶もせず走り出で庭の沓脱その石の陰と脱ぎ捨て置きし
履穿け柴折戸の掛鐘拾つて黄金鉈杉の石道を門へとかけ脱け千本松原を
斜に縫ひつゝ濱邊へと行く後より飽子の馬蹄履の齒と踏み込んで
跌けおんどして踏みきつゝ少し俵てお呉よ一處と連れて行てお呉と金切
聲を揚げて呼びぬ
房のうちよ取り残されし海軍少尉の優しき居よ笑を含みてやがて起ち上
りぬ欄干より打ち眺むれば數十人の漁夫ども今大網一杯の鮪を濱へと曳
きつけ大魚の波と躍りて汀一面の水煙のうちよ馬り叫ぶ景色の面白くも
凄まじきと飽子の後より行き看んと階子を下れば様の邊と撲地と行き逢
つたるの君子ありやア君子さん貴嬢はまだ家よおいでかさア一處と看よ
行きませうといひあがら様の端より脚を伸て庭下駄を穿きかけぬまだ消
えやらぬ顔の紅差よ復た一入の紅葉を散して青熊の陰よ消えて行くを無

四十六
理やり又喚び出してやがて門より松原の下を潜り濱邊の方へ行く途中海軍少尉の後からある君子嬢を顧みて『君子さん大層この涼しいねに濱邊の沙の上は熱いからこの松の陰で少し涼んで行きませう』といひながら傍の石に腰を掛んとするを君子の手快く袂より紅手帕を取り出して石の上の松釵を拂へば生憎くや真白の糸で刺繍したる鋪模様のいと美しきが露はれたり君子の周章て袂のうちへと揉み入れぬ君子さん大層綺麗刺繍ですぬえ』

第十三回

『ア君子さん貴嬢こそ茲へお掛けなさう』と五島少尉の手を持ちし繪團扇よて石の上ある松釵を掃ふて座を譲り己れの傍の松の幹に身軀を靠せぬ濱の方へ今しも漁師どもが鮪の手擲ふ波浪と雄たけびの音を和すれど此處の四邊も人のあくて松風の音静かきり、
紅蓋しよと勝へやらぬ君子の風情の日中の合歡の花そのまゝの姿よて垂

首がらよ近く寄りす君子さん可笑ねえ遠慮をしないので此石へお掛かさい實に涼しい早く貴嬢の阿母がお参り佳いが、けれども貴嬢の阿父の春海大佐殿が今日此頃の遠洋航海さぞお悪い事でせう僕ア幼少の時から貴嬢の父様よ可愛がられて到頭軍人の断片よ成りましたが實に僕ア實際貴嬢の父様や母様を眞正の父母と思つて居たのです休暇もあると貴嬢の家を吾家のやうよして遊びよ来て我儘の事ばかり言ふて實に勿体ないと思ふが僕ア早く親よ分れて孤兒だから亡き親の戀しい代りよ貴嬢の親を僕に親と思ふのですだが軍人といふものゝ孤兒は限りませず何れ五年か十年のうちよ復た大戦争がありませすから名譽の戦をするよと思ふ跡よ残らんでねえ君子さんさうでせう』と凛乎たるその言葉天庭に一點の翳もあくて眼麗かよ沖の方ある雲を視つめり、
吾が父母が疾くより許せし許嫁の夫どの或夜ひそか襖の陰に竊聴して胸を躍らせそれより後の物思意中の人よ逢は蓋かしく逢はねば憂くて怪

しきまで床し慕しと思ひ居しその人に思ひの届かぬことやあるべき届いたればこそ通じたればこそ他處赤がらの少尉の言葉軍人の孤兒に限るといふの姿も無用といふことあり斯程まで慕ふ心を振り退けて可愛も不便とも思ひぬ無情さよと君子の我を忘れて少尉が傍に進み寄りしが胸裡の恨の千々々碎けて唯だ一言もいふ由なく桃の唇の唇の些か又綻らひて復も結びつ少尉の衣の襟を推し披きて思ふさま又濱風を懐中よ吹き入れさせ君子さん僕ア寒いほど涼しくありましたさア激邊へ行て鮪漁を看て來ませうと立ち上りぬ

る鮪の中へ排て入り手よ任せて釣を懸よひつ掛けて沙の上へと曳き出す鮪の雄雌を揮つて波を敲き波の響と飛び散り舞ふて人か鮪か波か岩か揉みつ揉れつするはさよやがて波の色は朱を流して風塵さし、鬼のやうある漁師のうちよ交りし鮪太郎斯る折よ人後よ落ちぬ晴捷しる手釣を口よ咬へたるまゝ網の底よ潜り入り鮪のうちの大鮪その腹よひき掛けて岩の窟へと這上る血と膏とよ打ち塗れて凄しどもまた勇ましき身軀を捻りて鮪を沙の上へと曳あげ大石小石を跳ね飛ばすそのうちよ隻脚あげて魚の頭を踏へながら丸太を諸手よ揮り上げぬ

第十四回

鮪の血と膏とよ塗れたるその身軀よ波の水珠溜らす走るその邊よ肉瘤の盡々と揺るぎ出したる鮪太郎水に離れて跳ね狂ふ大鮪の四邊の大石小石を突き飛ばして面をも向けがたき小雨よ面を打たせるやうよ平氣とありて隻脚の関節を沙よ埋めて隻脚を鮪の頭よ加へ手頃の丸太を揮り上げて打

大好物よて都の兒が口淋しどて母も貰ひし菓子を食べんと同じことあり吾
が捉しだけの鮪の腸を抜き取りて樽に盛りわけこれだけが骨折の餘祿と鮪
太郎が一心不乱もうち働く落暈の今三保の松原の彼方へ春の初て田子の
浦より伊豆沖かけて七重八重の波を流し赤松林の端の翠を黄と染め
代へぬ鮪の骸の横にれる白き沙と血潮の痕鮪の漁の後の妻の戦の後と
思ひる、ばかり鮪太郎ト心づきて願けり鮪子のハヤ家へと歸りけん一
本松の蔭より彼方へ駒下駄の痕消え行きぬ沙の上よ、

餘祿の腸を市に賣りて今日も少くからぬ錢を獲け勇み立ちて吾が家へと
立ち歸れり今日昨日増して心地よしどて母の手づから爐の畔よて粥
を煮居たり、鮪太郎今日の大漁でお前も草勢たであらう今が春
海さまのお使ひで先刻のお約束とかで結構お菓子をお嬢さまから頂戴
したよと奉書の紙を包みたる菓子を鮪太郎の前へ置きて「お前また春海さ

まのお別墅へ上つたのかえお錢を貰いたりお菓子を戴きたいバツかりよ
費が爲する卑しい所業明日からの断然と春海さまのお邸へ行くのにお止
まさいわ、ア貧といふもの、斯か又小兒を卑下くするものか」

第十五回

卑しき心の微塵もあければ病める母より抗らはぬ孝行子息明日からの断
然と春海さまのお邸へ行くのあらぬといはれし言葉と素直に守りて十日
ばかりの濱の観音堂の方へ一歩も向けざりしがさて怪しくも眼の前より
復する、春海姉妹の美しき面影あり中にも妹の鮪子が房々としたその髪
を黄のソボンと結び留めて優しき肩を揺り下げて笑まじげの顔より傾げ
箭飛白の輕羅その袖口より翻れかゝる紺縮緬の裾袂の袖より玉を展たる
手を露はよ小招して「鮪太郎さんお前何故遊びよ来さいの」といふ聲さへも
聞ゆるやうあり「阿母があんかことを言ふけれども乃公ア産屋もお錢やお
菓子を買ふといふ了簡のさい唯だ春海さまのお嬢さんが乃公を可愛がつ

て呉るからつひ遊びに行きたくある今頃お嬢さま何をして居るか琴でも
弾いて居るだらう歌でも歌って居るだらう彼の濠泊して豪傑さうで温和
しい海軍士官もまだ宿って居るかしら彼の世界の地圖を見て後た面白い
話をお嬢さんから聴きたいさア彼の二階に種々各艦の額が掛って居
たッけその職の話も彼の軍人から聴きたいさア」或日の午下鮎太郎の例
の一本松の陰の沙の上又假臥りながら海の底から拾ひ上げたる榮螺を致
へて居たりしがやがて起き上って網袋に榮螺を盛りあげそれを右手に提
げながら二歩三歩し親音堂の方へと行きかけしが又た降り復た三歩し四
歩と進みて踏踏ひしが這回ひ思ひ切つてスッ／＼と千本松原の下道を
潜りて春海の別荘その門の邊へと來かゝりしが鬼の棲む家の前を通るや
うに鮎太郎の音聲を窺みつゝ生垣のその間から怖く内の様子を眺めぬ
青藤高く捲き揚げたる椽の邊より間毎の障子襖を開放して万斗の涼風吹
き通したる家のそのうちより床しき姉妹の影もあしさて何處へか行た

のかと思ひしが紫天鷲絨の鼻緒をたてし駒下駄が香脱石の上と並べりそ
れで二階かど仰見けり今しも欄干に長き袂を打ち重ねて結びしリボン
を髪もろとも風吹かせ五十と幾き老夫人と沖の景色を眺め居たるの
鮎子嬢あり、
鮎子の目敏くもそれを見て「イヤッ鮎太郎何故此頃遊び來かッたの
垣根の陰に隠れたッて分明と見えるよ母様アレが噂昔お話し申しました
鮎太郎といふ親孝行の小供ですよ遁げるかえ居るから洗足の水を上げるよ今行
明けて家へか入り足が汚れて居るかえ居るから洗足の水を上げるよ今行
くから俵ておいで」といひ捨て、妻の疾く隠れしが間もなく柴折戸の掛鎖
外して馳け出し餘り久しく來かつたからお前の阿母が悪いのかと思つ
たよ何故久しく來かつたの昨日東京から母様か被入しッたからお前の
ことを話したら大層感心遊ばして來たら逢はうと被仰つたよさアお入り」
と鮎太郎を無理無恥に推し入れて椽の邊に腰かけさせぬ優雅に立ち出で

たる老夫人「伶俐さうな兒だこねえ艶さんこの兒の好きさ羊肝でも持つた来てお遣りさお前の阿母の幾歳もあるえ四十七さうかえもう病氣の癒あつたかえ大分快いつてそれ何よりだね」と優しき言葉鮎太郎心嬉しく「今日のもう一人のお嬢様を留守ですか」と問へば艶子の打ち巻かれて「え姉様の先日から珍病氣を」と答ふる聲もうら淋し。

第十六回

親切に吹いて来る涼風を無情も障子の外に堪いて獨り吾が部屋に屏居たる君子嬢青梧の葉越の夕暁の窓の風鈴その風の影を小籠の上で寫して二三頭の蒼蠅どもが夕暁に紅く染りし障子とトントンと頭を打ちつけて低く唸つて居る外に一縷の息も無さうな部屋に淋しき、君子は今机の上の毛糸の脱着圓を脱せてさも力あげ身投げかけたり瞠り稍や陰つて二重障子の平生より實際立て見えたるが眉を掠めて後毛の纏れかゝるを徐かよかき上げて何を見るときも少しも疑乎と瞠を定て

見のゆゑが折々周章しく瞬きする毎に睫毛も宿りし涙見のホロリとと限らぬあゝ軍人といふものアンナは無情いものかしら男といふものアンナも薄情いものかしら秀夫さんばかりがアンナ無情人かしらと思はずも獨言して手帕を眼に推し當て少時して復たその手帕を机の上へ披げながら鏡の刺繍それを熱々と眺め入りしが復た團めつゝ捻りつゝ口を啣てヒリヒリと引き裂きぬ。

折しも背後の襖の徐か開りて四十七八の品よき夫人を現はしぬ「オヤ何處に居るかと思つたらこの暑いのよヒョ〜」と飲つて切つてお頭も木の子が生えますよまだ神氣が悪いかえ神氣が悪いから東京へ歸つてお醫者も掛つた方が可いでないかいかまアお二階へ来て涼しい風の中へ海山の景色でも診察ささい神氣も爽快とさつて大抵お病氣の癒つて仕舞よ襖を飲つて切つて折々暑いお部屋の中へ凝座して居て健康な人でも乾度病氣も成て仕舞よ」と心配相お八の字を眉間の邊へ母の描てやがて復故とらしい笑

顔を作て早く来ては、艶面白く事を飽さんか爲居よ、颯々お客様も来て居よ、其お客様の誰だか暗射ては、艶面白く沈し吾子をひき立てんとする母の苦心、君子の憐げ願さあがら、拵せし身軀を机よりまだ離さず、母様知ッて居りますよ、鮎太郎が来て居るのでせう、母様今日の昨日よりも神氣が悪くッて何よも爲るのが嫌で、唯だ静かよ爲て居たう、彦座います、母の淋しく打ち笑みて、當然さ昨日よりも神氣が悪く成る筈じやア、あいか鎖て切ッた部屋の中、艶々として居て、ア、輕快おしかアさんが折角東京から来たッてお前がソッナ、艶いで居て、面白くも何とも、あいつ二階へ来て艶さんと一處よか遊び夕日の海の景色を見ると、氣が晴々として来るよ、といひつゝ、無理よ手を執りて二階へと連れ来りぬ、艶子の盡頭より君子の顔の露のれしを、嫣然と笑ふて目迎あがら、姉様まだ、艶氣分が悪くッては、姉様久振りで、鮎太郎が来ましたよ、姉様よ外國のお話が聴きたいッて、お話を爲て聴かせてやつて下さい、いさね姉様アノ兄様のかしあ人ね、たつた一日

ざりて急な横須賀へ歸つて仕舞て、母様が東京から被入しやるまでの久作と春と四人ざりて夜あんなア怖かつたことねえ、淋しいものだから、姉様があんなに悪くあつたのよ、眞正よ五島の兄様の意地の悪い人ねえ、と無心の妹の物思ひしげの姉の顔色見て取りて、機嫌を取らんと利敏くも笑みかかる君子の母よ、覺られじと顔を背けて、ほんども秀夫さんの意地の悪い人ねえ、と口よいのへと胸と顔との裏表の笑と涙折しも、下婢の春が、ハイ郵便が参りましたと持ち来るを、母の受け取て封筒を眺め、噂をすれハ影とやら君さんその意地の悪い人からのお手紙だよ、

第十七回

「おや君さんその意地の悪い人から手紙が来ました」といひながら母の流眄よ君子の顔を視たり、笑顔よ光る喜びの、涙流し射られて、君子のさあがら朝日の前よ對ひしやうよ、顔さへ擧げ得ず、頬の色ハ火よりも紅し、君さんア讀んで聴かせてお呉、といひて母のその手紙を、軽く君子の膝の上へと載

せやうたり、
 君子の無言とその手紙を取り上げて氣を鎮めて郵筒の宛名を見れば沼津
 在小師筋村春海別荘にて春海令夫人と讀まれたりこれにて漸と安心して
 郵筒の裏書を見れば駿州清水港にて五島秀夫とありけり大昨明大急ぎ
 て横須賀へ歸られたる秀夫の、何時の間にか晴れたる日よりのこの濱邊
 より善く見ゆ清水港に在しますかと君子の不思議と思ひながら母様秀夫
 さんの清水港よ來て被居しやいますよと傍覽あそばせ清水港よりと書いて
 あります「オヤ」然かえそれで復た急軍艦のお職務もあつたのか
 ねえ真正に海軍の軍人の今日陸に居るかと思へば明日の直ぐ波の上當人
 みの面白いかの知らぬ家が人の心配だねえ何あことを言て來たか早
 く聴かせてお呉いよ何事を言ひ來せしかと氣遣ひながら君子の封推し
 切りてさらりと打ち抜けひき裂きたる寸箋と秀筆の走り書十行の
 足りぬ文章あり君子の急ぎて眼を滑らせてやがて徐か母様それでお

聴きあそばせ前文修免小生儀一昨日水雷艇乗組とあり母艦と共よこ
 の駿河の沖を走せ遙か小師筋村の方を望みて清水港まで唯今到來是
 から何處へ行くのやら自分も知らず明日も波の上明後日も波の上何れ何
 處かの波の上から又々手紙を差し上げべく母様文章の唯だ是ッ
 りで傍座いますといひ終りて力あげ復た巻き收めて軽く膝の邊へと投
 げ出す母の手紙をまた取り上げて「はんとは男といふもの氣樂だねえ冗
 談ばかり書いて郵送して些しの眞面目な手紙でもお前のところへ寄し
 うあものだねえ」と笑顔淋しく復た君子の顔を見る見られて君子の顔を背
 けて海の景色を空と眺めり夕日の下は紫の霞渡るの三保の松原その松原
 の此方こそ清水の港無情さ秀夫が今宵の月と楫枕の夢白まする所あるべ
 し。

面白からず日を君子の兎角して九月の初旬まで小師筋の濱の別荘に送り

しが寒蟬の聲秋を告げて柔らかなりし潮風の今日此頃の朝夕の骨あるらしく身も浸み渡り秋水魚の世とありたり春海夫人の僕の久作をこれ別荘の留守に残して君子鮎子外も下婢の春もろども車を運ねて或朝この別荘を見捨てたり耳も慣れし松風波の音も分れ伊豆の山腹河の海さても富士の高根の雪の昨日も較べて復た數峯の白を増せし景色も夫人の別れを惜み君子のこの夏の初より住慣れたる別荘の唯だ口惜しきことの記念とありしを悲しみて車の上より折く濱邊の松の邊を願き妹の鮎子の鮎子の面白かりしこと鮎太郎の勇ましき小兒あること落潮の汀を漁りて種々の貝も拾ひし樂しきこと赤も回憶してさてその鮎太郎も來年の夏からで復た逢ふことの出來ぬ今日何して居るか迷いたいと思ひながら四邊を回看して行く後より支那靴と合乘したる下婢のお春の頓狂ある聲はり揚げて「お嬢さま〜一寸御覽あそばせあの松の木の下は鮎太郎が居りますよ」と呼ばれし聲も鮎子の何處もと眼を睨れ「情乎立ちし鮎太郎

も急よ小走りよ走せ來るその顔色の平生の如く元氣善からず唇は澤々く眼のみ異しく光りたるの臉も溢る涙あるべしお嬢様何處へと言ひおがら鮎子の車を目かけて横より走れば勢づきし車の過りて十文字の途も残されし鮎太郎恨を引ける車塵の影を見送りて唯だ呆然と立ち盡せし車の上の鮎子嬢の願ひきつ「鮎太郎今日妾の東京へ歸るのよ」といへど車輪の音高けれは附えがたし「春海のお嬢様達ア朝から何處へ行くのだらう困ったか」といひおがら路傍の草のうへも身を投げ出しぬさて仔細のあるらしや、

第十八回

車の上の鮎子嬢の鮎太郎の容子を怪しみつゝ願望り復た願望り並木の松の下蔭も悄然と立ちたるその面影の眼の底も留まりぬ「平生元氣のよい彼の鮎太郎が暗顔をして悄然として而して妾の顔を見て急よ快歩も追ひかけて來て物言たさうも其の様子お陰で全然癒つたと言つた阿母が復た大

病までも成つたかしら妾まう今日東京へ歸るのよと言つた言葉が聞けた
 かしら彼の松の陰に悄然と立って怨めしう此方を眺めて雨聲で面を
 掩したその可哀さうな姿が眼の前を彷彿と居るやうで何だか妾も悲しく
 成つて来たど鈍子の思ひをついで沼津の停車場に着くはに發車を報す
 る鈴鐺の音の胸の思ひを少時散せり、
 怨めしげな鈍子の後を見送りて力あげ身を松蔭の草に投げたる鮎太郎
 いやがて復た力あげ身を起し手を又みて首垂れつ、捲ぞらぬ歩みの我
 れ知らず迂餘委蛇の松の下路をたどりて樹も衝き當らず石も墮つか
 ず自づと春海別荘の門邊へ出で、始めて首を擡げぬおや門が鎖つて居ら
 ん二階の雨戸も明けずあちら屹度お嬢様達の東京へ歸つたのだ來年の
 夏でなければ復た來まいわ、あつ仕方が無い阿母の廻國巡禮乃公の船乗
 乃公の船乗の構へ無いが阿母を巡禮に出す事ア何あつても出來ない彼の
 温和つて慈悲深さうな春海のお奥さんお願ひ申して見やうと思つて此

の始末口惜いさア龜藏爺の家を奪れて仕舞ふか』と獨語哀れげな疎き離の
 間より人や在ると窺へば下座敷の眞たゝ中留守居の久作今日から乃
 公の天下と花奥座の上に大の字の臥態を書いて紅草の蒲團を四畳畳みて
 の枕あり、
 鮎太郎の頭さつゝ垣を一回りして裏口の木戸を推し明け勝手口より拵
 棹の下を潜りて庭の飛石傳ひながら椽へ近づき久作さん鮎が来たよオイ
 起きねえか』と聲を掛れば久作驚き飛び起きつゝえ、喚驚させやがる誰れ
 又斷つて此處へ來た盜賊根性があるらしい其醜面ぶつ敵いて呉れやうか
 いくら精々と通つて來たつてもう銀一文の錢を呉る人も居ないしお菓子
 を呉る人も居ないぞと亡せろ』と團栗眼で睨みつける鮎太郎の勃然と
 せしが氣を抑へて『夫じやアお嬢様達の東京へ歸つて仕舞たのか』うむさ
 うよ今年の冬は來年の夏でなければ復た來ない留守の間は小皿一枚無さ
 ったと言はれて乃公の過失だ物騒か人相をして居る貴様達も來て貰

ひますまいよさア早く行ッて吳行がけよ何か攫ッてツちやア困るゾ」と罵られたる鮎太郎の拳を握ッて「何日乃公が他の物を盗んだ懼りながら尋常の漁師の子でなさいこの鮎太郎泥棒根性のあるといふか貴様の事だ其の布いて居る花呉座の貴様のか其の枕として居る草蒲團も貴様のか主人が居きいと思ッて座敷の真中へ倒臥て居るたア何てい事だ陰明のある奴こそ泥棒根性のある奴だもう一遍言て見る鋪打の丸太でもッてぶッ敲いて遣るから見る」腕めつけながら半白の簪と一句の音も出させず大手を揮りて復も浪邊の方へと行きしが驚のやうある肩の再び鳩と低けて昂げし面はまた垂れたり十兩の抵當に吾が家を取られるたア何考へても活智がねえ阿母よの氣の毒だし乃公ア又た口惜しい事を龜藏爺をぶッ敲いて仕舞ふか口を聞く彼の証文を奪て裂いて仕舞ふか東京ぢやア一本五兩の巻煙草を喫てる奴があるといふが二三服の煙草の煙のその金で母子が明日からの無宿たア情けなさいと獨りつくつく思ひながら思はず知らず吾が家

の門も来たりけり内より洩る高き濁煙」嫌だといふから十兩の金の取を捕えて返して仕舞」一人の息子の細腕で微かよ暮す母子のものええ有りさへ為ますれば粹狂は厭き思ひの爲ませんと聲凛々しければ稍や顔にて聞はし母の聲あり、

第十九回

朽たる鬨のうち一脚踏み入れしがやがて雨戸の蔭も身を側めて差し窺きたる眼光するどく敬だてし耳の敏し流石の武士の血系を享けてより五十年の今日の漁夫の妻と落魄れし女ながら病も賣められて病も勝ち遂せ今日此頃の貧といふ非道の者と朝夕の戦もまだ輪ぬ鮎太郎の母のお山美亡き夫が背も腹の代へられぬ急場の前後の分別もかく龜藏より借たる十兩の母金の鼠の子の殖えるよりも夥しき子を二年の間産み通して今とありての驚ろくばかりの金高酒と女とよの眼の赤い龜藏五人目の女房も去年愛想を盡されて孫のあるべき年でありて夜るの膝小僧を

抱て寝る淋しさを酒といふ頓狂を相手と埒をわけて隣近所を指弾する、馬鹿者お由美の何處となく垢脱し姿も多年より思ひをかけて俄寐婦といふも乗り貸した金を掘り出して誰かせんと狼の心を羊の皮に包みしやうあ親切攻め棒弓の後家を通すと誓ひし由美の心を響き返へしがたく可愛さうき狼其眼さへ金色にして疾から言はうくと思ふたが病氣だといふからまア耐忍して道て居た何日まで俟たッて番餅ださうペンくといふか馬鹿があるものか魚心があれア水心といふことがあるが奇う高く停つて居て有りさへすれア斯か厭き思ひを爲ねねと誰か誰様といふ言だ金か還せねえさらさア今日から此の家乃公の物だ破鍋缺茶碗爐の中の灰までか梁の上の煤や鼠の糞までが皆お乃公の物ださア唯今から立退て貰ひませうと大胡坐の膝を搦つて破器と涙を打たせぬ、豫後のお由美をみたるその顔を稍や紅くして皆を些し釣り上げ成程金の

確か又吾が夫が貴方からお借申したを承知して居りますそのか金が還れねば此の家を差し上げるといふ事が証文と書てあるのを先日見ましたけれども借主の黄泉の人せめての鮎太郎が十五も成つた曉の働いて還されませうが耳を揃はて即時と言つての無理無射と言ひも終らず龜藏の喉佛を躍せて七面鳥の啼く音も似たる嘲笑ひ何が無理何が無射借りた金の還しもせず又証文の上で載つた家主人顔して棲で居る厚皮女愛の家乃公の物だ若て居る醜態だけ呉てやるさア亡せて行けと復た膝行寄つて簀床を搦かせたり、到底逃れぬ運と豫てよりの覺悟武士の家又生れしものが運拙くして瀧村の茅屋又墮ち夫を先だて一人兒の瘦腕を楯とも矛ともして貧苦と戦ふ今日此頭先頭よりの病氣も死ねば善い身を助かりての定業の程未怖るしいざや老の身を杖と支は諸國の靈場靈地を巡禮して吾兒の行末の幸福を隣らんと先頭よりの思案を決めしお由美の屹と居直り涙がわれり啼て

も呉やう鬼の眼も涙とていへお前さんよ何をしていふても解らぬいまア
 明日まで俟て下され』また明日までか明日までも聞き飽た何でも今日だ
 今日中だといふもの、お由美さん其處がソレ品よよつて一年でも二年
 でも俟ぬといふ趣意のさいコレお由美さん乃公の眼色が讀めさうもの
 だといひながら突如手を執つて引き寄せられ背後より飛び入り来りし鮎
 太郎物をもいはず突退けて辛くも外へと逐ひ出しぬ、
 母と子との手を執りて雲時の涙を洗みぬされと到底もこの家よ長くは棲
 みがたし力あげぬ兩人の衣服調度を取り集むるその折しも戸棚の隅より
 怪しの桐箱いと煤びたるが露はれぬ兩人の膝の間よ置きて蓋を開れ内
 よ一巻の書物それ又添はて一口の短刀出けり鮎太郎手快く執つて抜き
 放ち善く斬れさうだ阿母龜の爺をと思ひよッ』……

第二十回

怪しき函の其中より露のれ出たる一口の短刀の由美よ亡き夫鮎太よ

の亡き父の遺物濃紫の欄縹色褪て室の漆の剥げ落し祖父の腰の物か會
 祖父の差料か何れ古くより我が家よ傳りし武士の魂魄抜き放て氷を打
 割しやうよと一盞の騎さく舞渡りし秋の空よ銀河の流るゝやうさ句ひ何
 ともいひがたしすばらしく研さうだ憎いアノ龜藏を……』と血相變えし鮎
 太郎を母の押して室に放させこれ鮎太郎滅想事いふて呉るさ憎い奴よ
 い違ひなきいが結局その無慈悲人からお金を借りたが此方の不覺昨日
 お前よ隠して妾の沼津の魚問屋唐津屋の親方よ譯を話して其方が身の上
 を頼んで来た母子合せて三十圓足すのその金を非道の龜藏その前而も敵
 きつけて呉ようど親方の怒られたが先頭の病氣で死なねばならぬ命冥加
 のあるこの母其方の後の出世も勝り先祖父代々の追善回向其方の代
 りよこの母が諸國の靈地靈場を巡禮して今までの罪障消滅是から後の家
 の榮を禱らうと豫てからの覺悟されば柔順よこの破家を憎い奴よ渡して
 明日のこの母が旅の首途其方も出世の首途満三年経つたから母の屹度こ

の故郷へ戻つて来やうそれまでよの立派な若い者も成つて居てお呉この母の一心で立派な者も成さずよの置くまい來年の十五一人前の男の其方の遺物が今日も限つて出て來るといふも黄泉の下から母子の身の上を心配して居られる報知か系圖の妾が肌身離さず持つて居るこの短刀の其方よ預ける若い時よの兎角血氣が先へ立つ構へて振くお封印して渡して置くよ涙も溜みし聲顔のせて明日の分袂の今日一日胸はあはるだけの事を語り盡し眼もあはるだけの涙を流して母の説きつ屬まじつ、

點頭く毎よ涙を落して鮎太の兩掌を破盪も埋めしがやがて俄か又頭を掉りいやだく阿母と乃公に分かれることゝ厭だ豫後の阿母を旅よ出して乃公獨り唐津屋の親方の家よ居て面白からうか悲しいことを母さんい言ふかアこの鮎太郎が骨を舍利しても手脚を小竹箒のやうよしても屹度働いで母様を樂よさせる阿母が旅へ出て万一又た先頭のやうよ病氣よでもあつたきら如何しやう阿母と分かれるの乃公の厭だと瞬る眼の紅くさ

れりその様も氣弱の事で立派なものも成れるかに晩かれ早かれ死ぬる身の人命をそんなことを苦み病でえらい事が出来るかえ残される身が哀しけれハ残して行く身も哀しい筈其方も厭さらこの母も厭さて振り切つて行くこの母の心地の話しして解つた筈であるまだ解らぬかアこの刀を其方よ渡した尋常の漁夫の兒でいさい其方の懐へ今日からの武士の魂魄が宿つた予武士といふもの悲しいとて辛いとて終つて嗜ぬの魂魄じや若しまた死さねハあらぬことあらハ驚かす周章す笑ふて潔よう死ぬが魂魄もう啼くまいを明日が分袂の今日一日さア笑はう笑うて分れやう三年経ちて母が戻つてその樂しい日が來れば其方の十七歳の若者罷が青々と美しく成るであらう身幹も亡き父よ似て清修とあるであらう毛脱合せの衣服を着て腰の先頭へ八端の平ぐけを結び白足袋よ淺草履生意氣な風をするお白粉臭いものを傍へも寄せるお酒を飲むお賭博を打つお酒の胸を腐らすお遊戯博の身体を肉を殺ぐ刀えらい者よ成つて吳逢ふて嬉しいと

の時の妾も白髪婆も成るであらう先日脱けた齒の跡へ昨日今日の秋風澄
るこの齒も皆赤脱け落つるであらう見る影もさい婆も成つて歸らうが其
方の見上げるほどの立派な男も成つて逢てお呉さア善く顔を見せてお呉そ
の時の嬉しさが今から想ひれて身軀が震える』と兩眼の涙片頬の笑
聖朝母の泣き顔を菅笠の下に隠して旅立てば子の涙呑みて見送りぬ唐津
屋の勘八の男で御座る孝行息子を三年の後までよの確かよ立派な奴も爲
て遣へすわ、

七十四

第二十一回

こんき雪で阿母の何處の山寺慈悲深い坊様の煎て呉れた豆粥でも暖て寒
さを凌いで居らるゝかど雪の降る夜を思ひ明しこんき風が吹いて來て
は何處の野末も笠吹き奪れて岐路の石地蔵その影も竹すみて阿母の居ら
るかど風の朝も眼を雲の外も離せて念々忘れがたき母の身の上されど
吾が身の唐津屋の勘八その男と歌はるゝ人の袖も浮世の風を掩はれて波

の上の業も憂を紛らせ毎日／＼船の中で櫂を操つて魚を漁て歌を歌うて
其年も何時か過ぎ行き鮫太郎爰に門松潜りて天晴十五の男兒とありたり
金の抵當とて龜藏も奪られたる吾が家の前の一年過し通りしことさく見
れハ想の種眼の冥つて居るがらも耳も戸が鎖てられず噂さよ聞けバそ
の龜藏の吾が家を奪つて居るの事酒の場を腐かす毒薬と阿母が言ひ置てッ
相變らず酒も浸つて居るとの事酒の場を腐かす毒薬と阿母が言ひ置てッ
たが今も血嘔を吐いて死ぬであらうと鮫太郎自ら慰さめぬさて三箇日
の雜煮餅阿母の何處で何いふ年を越れたかと思ひつゝも我から慈かるゝ
までと數の二十も餅を夷げ一人前の若者もやと成つたと喜びて俵男の
勘八それよ肯た女房が眼尺もて仕立呉た春の仕着せのユキも短かく裾も
腰の半ばどりの常勝れし身軀去年の秋までハ八文三分の足袋が今の九
文と半あらでハ鈕子の口も綻ぶるに鮫太郎の我ながら慈ろさぬ、
春も梅と咲き櫻と散り或夜ひそかよ啼き渡る杜宇青葉の時節初経やがて

七十五

七十六
 黄梅雨の低雲の雷公のかき裂きて次の朝の露たる富士雪の残り少く解けて夏の一度は南風に乗って人間を訪ひたり今日も沖へ陸釣とて鮎太郎はまだ日の出ぬ先は同夥の者二人を連れ濱の観音堂の背後は昨日乗り捨てたる漁舟へと乗らんと彼の春海別荘の前を通りぬ日毎は通ふ路ながら二人の姉妹その美しくしい姿と優しい言葉と憶ひ出さぬことはいかに鮎太郎懐かしげと眺むれば平生鎖りし門の扉今朝の一文字は推し披かれて水を蹴れし小石運の玉と潤ひ朝風は肩揺り合せて私語くやうき黄金髪を去年の様は變らず世界地圖を見て珍らしい話を聴きし二階の雨戸も明け放たれて例の久作の元頭その禿を去年よりの痛く光からせ手に竹箒を持ながら精々いふて庭の掃除をせし居たり

「おや來年の夏でなければもう來さいと久作爺が言つたけかお嬢様たちア何時しらもう來たのかと鮎太郎心躍らせぬやア久作さん久濁ださア」と先頭恥かしめられしことも忘れて生垣の間より窺きながら言葉を掛けぬ久

作の屈めし腰を伸して拳で三つ四つ敲きながら誰だえつぬと見ねえ人だがおアお前の誰だに鮎太郎おは鮎太郎だうむさうか大きく成つたおソナ大きき身幹も成ちやアもう菓子あんざア強請れめえと眼を丸くして熱々と鮎太郎の顔を視つめぬ朝早くから斯やツて掃除を爲て居ることを見りやア春海さまのお嬢さん遠ア何時の間にかもう此壁へ來て居るのかえ來て居りやア翠の音ぐれに聞さうさものだか今年に痛く淋しいさア「あゝあゝ今朝の一番の汽車で來るのよ今までの樂を爲たが復た今日から忙がし」云ひながら復た箒を執つて掃きかけるさて年の故で去年よりの懐かしい角が減りたり

鮎太郎は雀躍せしが我ながら知らねども心の急な勇みて歩の快しお嬢さん遠の去年のやうき優しからうか去年のやうき美しからうか左思右想鮎太郎は漁舟に乗って櫂を探りぬ風きたる海を真一文字は漕ぎ行きて懐しき春海別荘の二階が望のやうき松林の中から將葉の駒より少く見ゆ

るまで願へりくやがてそれも見えすありたる沖の海伊豆の端を斜に眺
んで海上四五里と成りたりけり今日から明日へ掛ての懸瀧明日の亭午よ
にお嬢様と逢れるかア逢ふたら何と言つてやらうか何と言われやうと樂
しき竿又魚の上ること多くしてまだ黄昏さらぬよ平生よあの大漁あり、
半日さらぬよ三十本の鯉を獲て鮫太郎も同夥も面白がりぬさて給を投げ
入れて夕餐の割籠を取り出しつゝ空を仰げばこゝ何れ今までの紺地も呉
粉の富士うつくしき空ありしが乾の方よ拳のこどき雲湧き出でぬ鮫太郎
の覺えず知らず躍り上つて「やア悪い雲だぞ〜」

第二十一回

雲の拳の見るく開け巨魔の掌の中より多くも雲の子八方よ飛び散り
て空の愁ひ海に怒りぬ、
用意ふためける同夥のものを叱り飛ばして鮫太郎の割籠の中の團飯を武者
より食ひぬ荒天だ〜 肚が破れて居て腕が萎る腹を作へてから掛れ」と呼

びつゝやがて最後の團飯を大口開いて敵さ込み槍を握りて仁王立又立
ち上れば同夥の二人も副槍よ手を掛け真一文字よ陸地を差して漕ぎ出せ
しが微温き風の雲と水との間を吹き渡りて波間に漂ふ海月の酔へるが如
く三人が八萬四千の毛孔より渾身の膏の珠と成てたら〜と流れ落るは
どの氣味悪き鬱蒸さ咄嗟といふ間よ一陣の狂風波を籠りて幾千條の白羽
の箭の飛ぶよ似たる大雨降りて天地忽ち漆のやう赤闇とありたり闇の
うちよ三人の聲聞かして呼び交しつゝ必死とありて槍を操したるが精も
魂も盡き果て皆船の中よ蒲伏たるその後唯だ冥よ吼る波の聲のみい
と凄まじし、

夜の荒浪よ揉み砕かれてやがて空や、白みたるの曉と覺し雨はまだ降り
しきれぬも風の力に僅かよ衰え波のや、静かあり夜一夜板子一枚下の地
獄の上よ漂よひたる鮫太郎の徐かよ身を起しながら回看せば同夥二人の
影だよあし可愛さうき事をした時昔のうちよ荒浪よ引ッ摺はれたかきま

いだしといふもの、何やら己も同じ遊の末那遊か陸が見えさうある
 のといひあがり起ち上りて回看ども四方の唯だ水と空間の銅鏡のその中
 ん唯だ一點の塵を落したかど見ゆる我が船格も流され船の折れ閉の船
 板の下に充ちてはや沈むも雲時の間鮫太郎の弱りたる氣を勵まし閉
 をかき波を握きて唯だ運を天に信せて没々たる波の上は漂ふ心細さあ
 め同夥の奴と晴昔のうち巨浪は撥はれて一と思ひ死またかッた去年
 の九月分れた阿母の今頃何處も何様して居るか三年経て歸つて来た時
 一昨年七月の荒天の日鮫太郎の沖釣から行方が知れなくさつたと聞
 いて何如か歎かれやうさう思ふと何しても死またくさい假令無人島へ漂
 ひ着いても命さへありやア又た還られることも出来る彼の春海のお嬢さ
 んも昨日の亭午ごろの屹度彼のお別墅へ着いたらう久作が屹度乃公の
 話を爲たであらう唐津屋の勘八親分これも大層心配だらうわ、何して
 も死されぬ」と鮫太郎の思ひつゞけて行くほど夜に再び海を掩ひて鬼

のやうある雲の彼方下弦の月影牙のやうに湛く光れり、
 「今宵一夜は何處かの島へ着きけりやア乃公もう飢死する破船のうへ乃
 公の骸骨が載かつて何處かの浦へ着いた時ア卒塔婆一本眼の人へ回向
 されるが身の結局夜明まで島が見ねば底も知れぬこの海の墓場よ
 して乃公の魚を食れやう」と覺悟を極めて八方を眼を配れど夢より淡き月
 の下への何物も見えざりけり斯て到底も望みおしと鮫太郎の唯だ眼を
 冥りて船底に偃臥りしが勞れ果たる身のやがて夢とも現とも覺ねがたき
 折しもあれ船の忽ち何物もかゝ衛當りて劇しく揺れぬ、
 踏めさながら起さぬがたる鮫太郎締し見れば巨人が袒褌ぬぎしよさも
 似たる大岩ありけり鮫太郎覺えず雀躍りしつゝ其の岩へと攀ぢ上りぬ岩
 ん續ける蒼崖蒼崖は續ける砂礫目も憤れぬ大木の生ひ茂りて何さ日本
 國の領内と見えぬ景色あり安心したる鮫太郎のハヤ一歩も歩かれず日
 本の領内でさうも鬼の棲處であるまゝ夜の明けまで此處に居つて

第二十三回

夜が明たらば何より先へ食物の穿鑿して黎明とありし頃遺うやうよし
て四邊を漁れば唯ある岩の陰より何物を鬼かどばかり怪しき人の露はれ
出たり、

鬼かど見れば頭は大黒帽子を戴き排々か大猿かど見れば身をかきしき洋
服を着けたり二人とも眼の青葡萄のやうな碧くて髪は毛も眉も髭も玉鬚
黍の毛のやうな朱くちいれ身の丈は六尺ゆたかよて手は各鐵砲を携
へたり、
怪しき二人は今岩陰の鮫太郎を見つけて碧い眼を降り白い歯を露出して
鼻の暗くやうな聲を出し三步四歩後へ退つて又大きな吐き波を打たせ
て驢馬の鳴くやうな笑ひ聲を刻みながら近よりて一人は鮫太郎の肩を打
をかけた鮫太郎は今突如と逢ひし時より鬼かど怪しみがやがて外
國水兵と見定めての恐ろしからぬと氣味悪く肩を打たせて其の手を滑らせ

「此處は何てえどころです乃公日本國の駿州沼津の小磯防村の鮫太郎とい
ふものだ一昨日から天荒と逢つて今朝この島へ漂着いた人の居るところ
へ連れて行て下さい」と頼むと言葉解らぬ外國水兵唯だ碧い眼を揺かしなが
ら顔見合せて何やら通り又語りたりしがやがて一人は釣のやうな鼻の頭
を指さし復願きて彼方を指さし點頭こと再び三たびさして言葉の通ぜぬ
を意の解りて自己等が居るところへと我を伴はんといふありと鮫太郎は
嬉しくて方なき身を起せば二人の身を並べ脚を揃へて先立ちぬ、
無人島と思ひしと端なく二人の水兵は逢ひて生たる心地と鮫太郎の成り
しもの、この先如何と成り行くらん思へば、仲々に心細しと思ふよつ
けて胸は浮ぶ母の事ありまだ見たこともない大木の間を潜りて草を排
けつゝ水兵二人は袂歩みやがて白沙平かある溪邊へと出づれば此處彼處
は船板の細片沈の刺げたる茶碗の缺けたるさて帆綱の真白な朽ち果て
た蛇のやうなるが波を打ち上げられし藻屑のうちに蜿蜒たるその光景さ

てい我獨りの哀れあらず別けて四邊の岩蔭又人の白骨雨又打たれ露も梧ちて淋しげ又横たられる何處如何ある人の果か鳥も通ぬ荒島の土どありて潮黒さ雨の夜又鬼燐を燃して故郷の空を眺むる悲しさを流石の鮫太郎も懐ひやりて身を震わせ若しこの二人の水兵又逢ねば乃公もこの態にあるどころ將來何事憂き目も逢ふか知らねども命だけ取り留めたりと踏みさく二人の後へど躡き行けば二人の路に散けし白骨を避けんとせせ石でも蹴るやうな枝でも踏むやうな亂釘打た靴の先は踏み折れ散し汀を傳ふて三町ばかりも進みしと覺しき處又大いある岩ありこの岩の裾を廻ればそこよ小さき輕艇あり二人の鮫太郎が手を執つて輕艇のうちよ坐らせつやがて柁を握りて波を截ればその船の向どころよ二本橋の黒船浮び居たり、
やがてその黒船の下へ二人の輕艇を漕ぎ着くれれば船邊より二十ばかりの大黒帽子が重り合ひて釣鼻捕へ下取して何やらいひ罵しれば二人も下

より仰面て應へかへし兎角する間大綱の船邊よりスル〜と滑り垂れり一人の水兵その端を握ひや否や躊躇しさい狙そのまゝ又綱を傳ふて中程より手を差し伸べぬ鮫太郎の心得て其の手を握れば船又残りし一人の水兵の下より肩を差し入れて推し上げぬ何の苦もさく鮫太郎船へど上ればドヤ〜と鮫太郎が身邊を環立たる碧眼球いづれも雲衝く大男四邊よ小銃懸けさらべ度五尺もあらんかと思はるゝ大庖丁が月のやうな船邊よ横はりて何處ともさく煙さし、

第二十四回

朱鷺の大男又環圍まれて鮫太郎の七分の怯氣の胸は湧きしが残る三分の勇氣を唇邊の笑み解せて黒子を上臉よひき付けながら仰見ると二十餘人の碧眼球の紫色の異しき光を五尺も足らぬ鮫太郎の身軀を浴せ煙草の脂よて黄染まりし亂杭を踏の間から露りして何やら笑ひ私語きたり人の肉をも喰ひかねまじき面魂のその中よ鐵線束ねたやうな疎弱男臉の

底から碧眼球を一際凄く光らせたるが物をもいはず傾を撮んで牛蒡でも
 扱くやうな立ちたるまゝの鮫太郎を其儘宙へと掲げたり
 鮫太郎苦争せも敵しがたしこの先如何あることか心細くも身を任せて
 率かれ行く血か膏か船板怪しく滑りて腰さき其の邊に鐵の櫓子の船底の
 冥の中へと通ひたりさて率るゝまゝ櫓子を降りて洋燈の光凄く黄々昏
 を照せるところを潜り唯ある扉の前立ちて徐かきそれを推し開けハ夜
 の復た船の上の朝返りて眩しさ鮫太郎の眼を急附きぬ大の男の鮫太
 郎を昇き卸して帽子の屑子と手を鳥渡かけつかつかと快歩五歩ばかり
 刻み進めハ臥床の上の白き蒲團と身軀埋めし禿頭の朱髯の反側ハ臥床を
 揺せて蒲團の波を推し退けつゝ牛の吼るやうな欠伸もろとも額ハ川の宇
 の鹹を深め毛蟲のやうな肩の下から爛乎と凄い眼を光らせて睨みながら
 身を起せりこの男の船長あるべし房のうち華美を極めて三個の丸窓厚さ
 玻璃を透て千里の海を見渡し紅の邊の邊の美しき盆裁を飾り床の牡丹の花

の模様綺麗さ敷物を敷きつめて壁ハ巾着の額あり卓の上ハ七寶の花瓶
 そのうち盛りあげたる薔薇の花の眼と浸るばかりの香を吐きぬこの房
 と續きて又た小さき房ありて今この男の入り來るとたんと扉の聲もかく
 自づと閉りぬ
 大男の船長も何やら高聲と打ち語れば船長も亦た高聲と答へつゝチロリ
 と鮫太郎の顔を睨めて二歩三歩ふみ出しぬ人間らしい人相有し者もさき
 朱髯男のうちと攫われ來し上ハ孰れ免れぬ運の末ハ悲しいこと極つた
 身軀と覺悟したる鮫太郎ハ怯れず撓めず臂突き張りて立ちたるまゝあり
 後よりドヤ／＼と踵を来りし水夫ども房の入口と突ひ興じて頭の上に頭を
 重ねし其うちと船長屹と眼を注ぎて其の一人を小招きすれば人難し分け
 て進み出でたるハ青葡萄の眼球のうちと此奴一人ハ漆のやうな黒眼球を
 を刺し痕の美しく青くして小兵の身と適かねし水夫服の背ハ大鏡を作へ
 たるが小走り又走り出で、鮫太郎が顔を覗めぬさてこそ我より先この

朱鞆船は彷彿ひ來たりし不運の男懐かしやと鮎太の思へバ小兵の男も亦た懐かしやと思ひたりけん臉は涙を湛へたり船長この小男は何やらいへバ小男の點頭つゝお前何して彼の島へ來たのかへ一昨日からの荒天で難船をしたのだらう』うむさうだお前も見れば日本の人だと思ふが乃公の是から何あるのだえ』この船の奴も攫まつたが運の末終焉まで虐使われ死ねバ海の中へ投り込まれて仕舞のさお前の流れ付たこの島は日本の小笠原島の南に在る無人島でこの船は露士亞の密獵船さ乃公も去年の秋北海道の千島沖でこの船の奴も攫まつてから毎日泣いて暮して居るよ此の船の奴等皆鬼だこの島天狗のやうな朱鞆が船長よ今船長が乃公も通辯をして呉るといふから故郷と年と家業とを話して呉れだん／＼日本人が殖て來るの嬉しいぞ』船長と水夫とを前も置きて言葉の解らぬを幸ひは罵りぬ若その言葉の一節もても朱鞆の解らぬを即座に鯨尾丁の鋪とあるべし。

第二十五回

この日本水夫の言葉より船長はじめ水夫どもが皆人間の皮膚を被りし振あることを知りぬされバ多少日この船も身を置きてやがて好き機会を見て故郷へ還ることの出来がたきを覺りて一刻もこの船も停まりがたしと鮎太郎のこの身を再び彼の島の荒磯に捨て置いて下されといふことを船長も話して呉ると日本水夫も頼みぬ斯くて水夫の鮎太郎が身を歎きて船長の慈悲を仰げバ船長の帽子を振り落さんまで頭を掉つて小癩さことをいふ小童無人島へ流れ着いて頓て死ぬ身を救つてやつた恩人の恩を即座に忘れて自分勝手の手を放すからぬ／＼この小童を島へ捨て置て行くこといあらぬと言へ言はば乃公が拾つたものな身体から魂魄から乃公の物だ』箒のやうな其箒を左手に握つて水夫を睨みぬ水夫の顔色變えて鮎太郎も斯くと語れば鮎太郎聲断せて『それで乃公の身軀を何するのだ何日日本へ還して呉る』さうよ汝が斃死までこの船を家として

働らくのよ若し斃死れば毛布を包んで鉛錘と石を背へ負はせて大洋の底の墓場へ沈めてやるのよ貴様の同じ國の奴じや一通り此奴も船の中の作業を教えてやれ」といひつゝ、寝臺の縁に腰うち掛けて葉巻煙草を口よ啣するを一人の水夫の心得て隣すを摩り怖く、と其火を移しやりぬ、

さて鮫太郎の鬼をものの中より交りて虐使はるゝ身とありぬ唯だ獨り願とするの星山といふ水夫これも我と同じ運の男去年千島の沖よこの獵船より勝どかりて一年の月日を波の上で泣いて暮せる薄倅兒語りつ語られつやがて亭午よとあり鬼と肩推し並らべて卓子の片隅よ身を寄すれば朱髯も木片と思はるゝものを食ひ左手よ肉又右手よ庖丁執りながら皿の中ある血潮の滴るゝ肉を食ふその姿は鮫太郎驚いて傍の星山を見ればこれも肉又よ肉塊貫ぬきて楽しく食ふさま扱て此奴も口でこそ優しく乃公を安慰もすれ何やら鬼をもの同儕かと怖ろしく唯だ饑たれば木片のやうなものをも噛みて鱈子に三杯まで水を簞りさて三杯目と瓶子よ掛けたる

其の手を拂つて傍の朱髯の眼も核立て星山を睨つけて何やら罵しる罵られたる星山周章で鮫太郎が手の鱈子を奪り飛でもあいこと爲て呉る波の上へ浮て居ながら船で水が第一の重寶一食よ一杯よりか飲むことが出来ぬもう飲むか飲めば乃公が罰を食ふといはれて鮫太郎の悲しくあれり水も満足よ飲りぬかさて是からが想ひやらるゝ、さアあと獨り歎息せしが後よて星山よ聴けば水一杯の其のお蔭で辛くも二時間の棒縛よ過んとしたるところとぞ木片のやうな食物のビスケットといふものよて血潮の滴れし皿の肉の昨日乾豚の股を餌として釣り上げたる大鮫の肉を牛の膏で蒸めしものとか、

午後の三時と覺しき頃西南の風をよくと吹き起りぬ舟の水夫ども罵り騒ぎて帆を揚げぬ船のやがてこの荒島を跡よして漫々たる蒼海へと乗り出したり日の上は燃き度りて曇きこと言ん方よし鮫太郎の汗と膏とを浴さがる終日の働さやがて夜よ入りて開を得たり月の今千里の波

を照して銀波を起す鮎太郎の疲れたる身を舷の欄干へと靠せかけて涼風
又懐中吹かせつ夢とも現とも分きがたきその折しも背後より艶めきし女
の聲しかも小聲の日本語にて「其處よさうして居ると風邪をひくよ鴉天狗
のブランデーは泥酔つて他愛もさく眠て仕舞たよ」

第二十六回

月の今帆の影を欄干の上へ投げかけてその陰に身を靠せし鮎太郎疲れし
夢より喚び覺されし懐しの故郷の音而も艶めく女子の聲又驚きて願わ
船房の扉を半分推けて其處より半面を露わしたる年の頃二十四五日の
本婦人月又映りし顔の青く生際の薄き髪を捻つて手づくねの束髪眉も女
らしうのあく稍や行書の一字といふ様にて磨き過ぎた顔は白粉焼のあ
るらしく青いうちも何處やら陰つて身は更紗の洋服ゆけるものを被か
け扉は隻手をかけて一歩二歩前へ進んで復た猶豫つゝ聲を潜めいくら暑
いと言つたつて夜の風は涼し過る風邪が因で瘧でも成てはいけさとい

寝惚て海へ落ちては這處この邊の海は名高い沙魚の居るところだよ星山さ
ん何したの其處に居るの星山さんぢやあいか」と呼びかけられぬ、
この船の中の日本人の自分と星山唯二人と思ひしが荆棘の中は花籃一本
さても怪しき女かおと思ひつゝ「乃公ア星山ぢやあいか今朝から此船へ来て
居る鮎太郎と云者だぞ云々女は驚きて二歩三歩後へ退つて扉の陰に身を
寄つゝ「あゝさうかえ今朝無人島から連れて来たのにお前かえお前の
阿縣の沼津の者だと言つたけねえこの船へ来てはもう日本へ歸ることの
難事いよ可哀さうだねえだがね時よると日本近くの島へ寄泊こともあ
るから米糶の眼を窺んで命がけで海へ飛び込め懐かしい故郷へ歸られ
る事もあらうがねそれい男の爲ることで女といふものいソナ危いこ
とい出来さしい此船へ居れば最後は殺される事よこの海へ身を投げて
沙魚も食ひれて仕舞は舞を樂々するだらうと思ふがねさア死さうとある
と未練が残つて死ねさいよまア前世の約束事と歸らめて居るより仕方が

あゝ見ればお前はまた若年こんな地獄船へ拘引られて来て愛目を見ると
の羨ばかりが薄命でいかに仕方があいなと歸らめて何でも唯々ど抗はず
温和くして爲てお居妾も小い時又親又分れて扱客と身を賣られ臺灣廈門
それから大濠洲布哇と渡り歩いた末がこの船一と昔も日本の土を踏んだ
ことがあゝ悲しい身の上これからの兄弟のやうな成つてお呉よ陰よあり
陽よあつて及ばずあがら世話として上るから』といはれて鯨太郎の嬉しく
『昨日からトロロとも眠らぬから乃公アもう身体が癒けるやうな睡く
ッて〜堪らぬあゝあアお幾多考へたッて仕方があゝいせうせこの船の中で
死ぬから極はあゝ米俵あんど又辟易して居るものか今又見あゝいお前の仇
も取ッてやるよ』と臂を張りて空ある月を睨み上げたり
女の四邊を回看して進み寄りつゝ聲を潜め『お前星山さんの何處も居るか
知らぬいか知ッて居るから喚んで来てお呉さ』といふその口氣の何事を酒
の香高し知ッて居るよ船の方先刻まで居たッけが乃公ア草勢で歩行者

い歩行たよしたとところが喚んで來ること否だお前自分で喚んで來さ』と
欄干よ兜せたる身を離さず意地の悪いことを言ふものぢやアあゝ一寸行
て喚んで来てお呉さ』といひも終らず憂々ど響き渡りたる靴音の彼方より
近づきぬ女の身を扉の陰よ退いて撲地と閉たり後よ鯨太郎とその影法師
師と二人のみ残されたり、

第二十七回

鯨太郎復も欄干よ身を離せつゝく〜と月を仰ぎて越方行末を思ふ背後よ
靴音停りて響く肩を敲かれし又慵うげの斜視を呉れば是れや彼の星山水
夫あり微笑を呷める白き齒を露はして『やゝ先刻から何處へ行たか尋ね
て居たぞ、コンナ處よ現寢として居て明日の渾身の骨が脱けるやうな倦
怠ッて仕事も何も出来ぬ予熱帯地方の夜に蚊と雲泥の涼味だが夜間ま
で納涼んで居てハ風邪が元で瘧を震ふことがある病氣に成たッて赤痢と
もハ構ッてハ呉さいよさアお前の寝る場所を教へてやらう一處よ來さ』と

いひつゝ、遊きぬ、
 鮫太郎はその親切を喜びつゝ、眼あき月の下、影法師駢べて船の方へ行き
 やがて階子を下れ、銀網洋燈の睡さうあ淡光の下、幾個とさく釣り懸け
 たる釣床のうち、眠れる朱髯ども、遠雷のやうな舂聲水を噛むやうな切齒
 と何の事だか解らぬ寝言くさくさの夢くさくさの寝態を揺すその傍の虚
 釣床を星山の指さして、『今宵からお前この釣床へ寝のだよ初めの何だか
 寝工合が悪く思ふが慣ると至極寝心の佳いものさ、ア可しかこの綱へ攫
 まつて脚を掛けてヒョイヒョイと飛び上る千好万好衣服を疊んで枕として好し
 好しさうよし少し身軀を揺つて見よ阿母の懐へ抱れて催眠歌を歌はれるや
 うに住心地、睡氣が潮さアと慣ぬ鮫太郎を扶け上げぬ鮫太郎の袋のやう
 な釣床、身軀をスツボリと容れて笑ひながら何だか氣味が悪い、ア反側
 をするとも出来ぬ』寝惚て墮落る、乃公も慣ぬ、うち、時々墮落ちて
 痛い目と逢つたことがある、十二時まで常番だから乃公の行くよ明日が早

いから愁思え、あいで寐たがよいよ』難有う、わア忘れて居たア、洋服を着
 て居る女かへ先刻甲板でお前を尋ねて居たよ、彼女一跡、何いふ女だえ』と
 はれて星山の少し驚き、『うむ彼女か、蒼蠅、ア彼女この船長の洋妾よ』
 疲れ果てたる鮫太郎のやがて小さき舂聲を立て、眠り入りぬ星山の何を
 想ひ出しけん、鮫太郎の眠れる釣床を見て俄か身震るはせ急いでソコ
 を飛び退いて靴音低く階子を登りまた甲板へど歩み出で船の方へ小走の
 歩を刻みて見張の當直、又就んど急ぐその背後より星山さんお前、今まで
 何處も居たの散々妾、氣を揉せて、『甘たるく言ひ寄りぬ星山の肩を歪
 めて願ひながら』オ、お灘さんです、何か私に用があるの用があれ、明日
 寛々と廻させうと低聲、又言ひ捨て、身を避くれぬ、お前も男の様じゃア
 無いね、ソツナ、又戦々して、命を奪ふと、言やアし、今夜ばかりの放さ
 さいよ、少しお前、話したいことがある、といひながら星山の肩、手をかけ
 て、樹の陰、月を避けぬ星山の眼、恐怖の色、光らせて身を縮め、何の用か、

知らぬが若船長は如是とてその見つかると彼の鮭吉のやうなツドンと一發短銃で殺されるよ千島の沖で鮭吉と乃公と二人この船を捕へられ悲しいうち兄弟のやうな庇ひ庇はれて来たところが憶ひ出す毎に戦粟とすらすら此の春の三月の十日の宵冥お前と鮭吉と何か話を爲て居たところを嫉妬深い船長が碧い眼で睨んだ真夜半釣床は眠て居た鮭吉を下から唯だ一發の短銃で打ち殺した其の凄まじい聲を聞て居て其の有様を見た乃公が……オ、怖い戦粟とすらすら其の時船長の乃公を曳すり下して死骸を毛布に裹んで海へ投げ込ませ其の翌日釣床の血を洗はせられたが今も血の痕が残つて居るその釣床は今宵から鮭太郎が寐て居る釣床だわ、怖いお漣さん許してお呉れ放してお呉れと齒の根も合す震るを冷やかにお漣の笑ふて船長の鴉天狗のブランナーは泥酔つて寐て居るよ男らしくもさい殺然して妾の言ふことを聴いてお呉頭日から妾の姿を見ると逃げてばかり居て意氣地のさい男だねえといふ折しも波の上ある船の影を見て集ま

第二十八回

りし沙魚の群そのうちの大沙魚この時船の方の波を躍りて潮を飛せバ潮の華を身も浴びて女を捉えし手を放せば男は二歩三步踏みかきながら帆綱を脚を掬はれて仰面を打倒れぬお漣の濡れし装束を絞りて「文、喫驚した戀の邪魔をする憎い沙魚今も塩豚の股の餌で釣り上げられて何の船かの血の上に乗るだらう何だえ沙魚は潮を蹴かされたとして其の態ア不忍見よソナ事だ戀が出来るかえしッかりお爲よ」といひかきながら身を寄せて扶け起せば顔く唇も聲を刻みて震はせて「喫驚したわ、驚嘆した誰か来さいうちよ行きませうお漣さん左様あらわ、喫驚した」といひ捨て、行かんとするをお漣の追ひ廻つて臂を捉え妾を散々口を叩せて置きながら馬が念佛聴くやうな空囀いて居るおんて卑怯な程があるよ今宵は何しても返辭を聴いてお呉さア男らしく厭だとか承知したとか分明とした返辭を聴

百
 かせてお呉女と思つて輕蔑つて貰ひますまい、これでも呂宋のお瀧と稱つて大海を小股にかけて歩くものだよ、言葉も顔も一入の趣味を帯びぬ星山の飛び退きながら女と輕蔑して、ソナ事いさいが、若いふことを聴く日もあると私の命が亡くあるそれが厭だ、請願お瀧さん寛容してお呉女にするうち船長が夢が覺るか他の朱鞆が来ての大變、聞き分けて歸つてお呉女といひつゝ振り放して走り去らんとする折しもあれ橋の蔭よりムツと露のれ出でたる大男飛びかゝつてお瀧が襟をひつ、攫みわつと號びて身を縮まする星山を至痛く蹴倒せり、
 蹴倒されたる星山の脚踏み折れし蛙そのまゝ、滑伏つゝ逃げんとするを追ひ來つて蹴倒しつ、復た蹴倒しつ、星山の合せし掌を額の中て、涙の珠を頬に滑らせ、船長何か容免て下さい、悪いことをする我で、いさい、悪いことを爲た覺にはあゝ、あゝ、痛い、命ばかりの助けて下さい、是から後の幾度喚ばれても話せんぞア爲せんからあゝ、怨めしいさアお瀧さんお前から私の

身の潔白なことを話して詫て呉これだから言ひさい事じゃア、いさい、あ痛た、い、い、い、と伏しつ拜みつ泣き號ぶを眺の裂けんばかりと睨み下したる船長の、船の中より炎のやうな舌を吐いて「千鳥の沖で救われた恩を忘れて不埒のことをする畜生め、貴様の難吉の事を忘れたか」と虎の吼るやうある大聲揚げて罵しりつゝ、復も蹂躪りぬ、
 蹂躪られて起ちも上らず涙と共々聲推し、絞る、悪いことを我の爲さい覺えの、いこの我を何の怨みがあつて蹂躪る怨めしいお瀧何故そこを黙つて居るか、あ痛た、い、い、い、何でも殺されるか我を殺す了簡か殺すから殺して見ろ」と拳を揚げて蹴めさながら起ち上るを船長またも横ざま蹴倒して蹂躪りぬ、物音を聞きて走せ集まりたる水夫どもこの光景を見て打ち騒ぐを船長の、先よて指揮して星山を引繰り船底の虚室へと突き入れさせ己れのお瀧の手を捉えて我が房の扉を撲地と鎖さりぬ、月低く波高し、

鮫太郎が怨恨の血潮まだ消えぬその痕のさながら朝顔の花のやうな布目も
浸みし釣床に鮫太郎の疲れたる身を揺がせて恍惚と眠りしが何とも知れ
ぬ怪物の心元へと押し掛つてその苦しき言はん方なく號ばんとすれば舌
辨れ起んとすれバ身軀瘵えたり怪物の思ふが儘又鮫太郎を押し寄せて咄
嗟や喉へその手を掛けんとするを辛くも突き退けて起上りあゝ苦しき魔さ
れたのよ遠ひさい何だか始めから心地が悪いと思つたがこの寝汗の何だ
宛て潮を浴びたやうだと額の汗を掌で拂つて薄昏き鏡網洋燈を仰見れば
後汗小鬼の鮑貝のやうな凄く青く眼を光らせて鮫太郎の枕邊にムツと立
ちぬ
鮫太郎の悚然として釣床のうちを身を横うれば釣床の揺れと響りて隻眼
小鬼の動き初めその手を伸べて縁を握りぬ鮫太郎堪らず手を懐き差し入
れて父の遺物の匕首その欄を握り若し飛びかゝつて我を啖ひい啖ふと任
せて下より拳も通れど一突も貫かんと眼を怒らせて睨み上れば隻眼小鬼

が看るくうちよ小さくありて鏡網洋燈のみ壁の爪のやうある火穂黄赤
り鮫太郎の懐の手を緩めて氣味が悪いと思やア洋燈まで人を馬鹿にする
だが自分ながら呆れるぞ乃公も如是よ小腰赤男も成たかかア鏡網洋燈が
隻眼小鬼と見えるかんと如是小腰で到底日本へは歸られぬぞと我と
吾が身を嘲笑つて眼を摩りながら復た徐かき起き上り四邊を私と回看せ
バ二列も懸け並べたる釣床も夢を捨てて朱髯も悪風掃きく鯨の商人
の息脚の臭いペンキの香うち交りたる氣の暑を醸して嘔氣と頭痛を催して
堪えがたしこんか鬱蒸い臭い中よ善くも朱髯も眠られるかア彼の星
山の十二時までが水先常番もう還つて寝さうかものだがそれともまだ十
二時前かいや十二時の慥かよ過ぎた既夜明けの問もさういふ光景通風
廊から洩れて来る淡光りの月よしての白すぎるやア黎明又遠いさいあゝ
何んだかこの釣り床の濕氣で居て冷然として氣味が悪い釣床をさよより
煎餅蒲團も柏餅でも疊の上よ寐た方がいくら氣持が善いか知れやしさい

釜の中へ居るやうに痛く鬱蒸かア甲板へ上ツて涼しい風が吹かれて來やう何だか此處へ寐るのが厭な心持だといひながら徐々と下へ降り海冥の廊下をたどりて端りかくも船長部屋の前へ出でたり、

「失路たす此處の今朝乃公が勾引て來られた船長の部屋だ廊下の此處が盡頭甲板へ登る梯子のさいえ、復後へ還るのか今夜の餘程をかしき晩だぜあ、何だか薄ッ氣味が悪くさつた」と獨語しつゝ、踵を回すその折しも船長部屋のうちより開ゆる女の啼聲船太郎の嬰然として歩を停めさて何事かと耳を敏れば其啼き聲の確か先程星山は聞きたりし洋妾は相違あし啼き聲のやがて嘘啼の聲とありて這回り怒氣を帯し濁聲是れ彼の鴉天狗の顔そのまゝの船長あるべし荒々しく靴を踏み鳴らして罵る言葉の解らねども折檻するも極つたるその物音やがて靴音扉の方へと近づきたり船太郎は始めて我身の此處は彷彿ひ來りしことの危険を覺りて閃然と身を縮め廊下の隅へ蹲まるやこの時早く扉の投げ出さるゝやうな撲地と開

けて露はれ出でたるの船長よて聲の怒り變り壁に壁立ち火華の進しるかと思はるゝまで又眼を光らせ右手は短銃の弾機引きて壁のこどく走り出せり女も續いて走せ出せしが扉の邊も歩を停めてその後影を望めつゝ凄く笑つて「嫉妬深いいも程があるいくら言つても没分解決の唐變木復た短銃三味が始まつただが妾も罪を作つて可哀さうな妾と話を爲たばかりで二人までが無残の最期あアこの先妾も何あることやら……」

第三十回

嫉妬の炎は胸を焦して青葡萄のその眼珠を鬼灯のやうに紅くしたる船長の今憎き星山を射殺さんと六連發の短銃の弾機ひきつゝ章陀天走り星山を幽め置ける虚房へと向ひたり、

虚房の扉その白磁の把子に左手を掛けて右手は握れる短銃を背後に隠して徐か又扉を明け、房の真中の柱に縛られし星山に垂れし頭を力あげよ掻き皆を裂き眉を軒げ肩をひと振り振り動かして起ち上りしが復た撲地

と打ち廻りぬ細い蛇のやうな腕の肉を食ひ入りて、容のあたりは
 藍盞を浸せしやうな青くありて唯爪のみを真白なる小腕ある星山のハヤ
 尋常の人よりあらず、哀れや今の狂人と成り終れり、
 星山の倒れながら凄く笑ふて、「船長さん、貴君の何故我を縛つて如是暗い淋
 しい部屋の中へ入ましたか、我の後のお瀧さんと話を爲たばかりです、」とい
 ひながら復た熱く船長の顔を覗めて、「あ、解つた、貴君の我を殺しよ來
 たのでせう、と、その右の手も持て居るの、短銃でせう、あ、怖いその短銃
 の我が友人の鮭吉を撃た短銃六個の弾丸のその一個で鮭吉の命を奪り殘
 る五個のその一個で復た私の命を奪れ、跡に残つた四個の弾丸何れ復た
 三人の人の命を奪つて一番最後の一個の弾丸が何日貴君の眉間へ飛ぶだ
 らう、殺すから殺して呉さア殺せ、」と、文、殺さぬか」と出及庖丁よりまだ青
 凄き眼光で睨んで起き上らんとして復も倒れ、
 船長の靴音高く進み來りて左手は其肩を握みぬ攫まれたる星山の肩を低

して引外し天眼を睨み上げて「ア殺せ、ア殺せ、彼のお瀧と話を爲たばか
 りで殺すからまだ殺すものが澤山ある貴君の部屋に鸚鵡の毎日彼のお瀧
 奴と話しを爲て居るおせ彼の鸚鵡を殺さぬか、風ある時帆を揚れば風と
 帆網の高話し風の不埒か帆網の科か何故孰かを殺さぬか、粹さ仇波身を寄
 せかけて船と日夜の私語波を抱かれ、殺せられて夜闌の月が海との陸言何
 故これも殺さぬか、ヤ、船長何故殺さぬか」と狂ひ號びて身を苦争さぬ船長
 の脚を揚げて肩踏み履さぬ、奴の氣が狂ふた善くも命の親の恩を忘れたお
 好し、今、貴様を鮭吉と逢してやるぞ、といひながら右手の短銃の銃口
 を向けんとしたれど非道の船長も流石少しの哀を覺えて猶豫うを星山の
 身を震はしてばかりと齒を噛み鳴し、「鮭吉と逢せて呉るそれで何でも
 此奴に殺す氣だか人よ怨靈が有るものか無いものか、今、見る我と鮭吉の
 二人が身を受けた苦痛を増た苦痛を爲せて見せう、ア殺せといひながら
 狂ひ號べ、柱と結びし細繩の端と切れたり反さまゝ倒れし星山起ち上つ

て身を躍らせ船長へと投げつけぬ、

端りきく廊下の昏み迷ひたりし鮎太郎の血相變て走り行く船長の尋常からぬ氣色に驚ろきたた彼の怪しき女の獨語を聴きてさへと思ひ當りて胸の高波打ち總身の毛の戰ぎぬ鮎太郎の扉の蔭に身を潜めて尙様子を窺ひしと女の聲音低く船長の後より躡り行き歩みての停り停まりての歩み辛くも十五六歩をたどり行きし折しもわれ滿船の寂寞を破りて高く響き度りし短銃の音女の姿を踏み亂して踏み止まり周章しく部屋へと走せ戻りぬその顔の腫より白し、

第三十一回

扉のうちより吐き出したる硝煙を推し分けて走り出でたる船長が顔と胸と血潮の霞を浴びたる氣色の悪鬼羅刹もその前より避易べき有様ありても哀れある星山の早や短銃の煙とされり、

銃音聞きて驚きし鮎太郎の下に彈機があつて吾身体を弾き上げられしやうと我知らず起ち上り銃音の聞けし邊に走りしが思へば吾が懐の父の遺物の七首あるとも生中よその場に行くの口を身を投げ入るゝより危險ありと復た廻すその後より走せ來し船長昏のうちよ衝き當りて鮎太郎大の男が濁歩の下に鞠めり船長大の字を壓しかつて脚下を見透しつゝ何やら怪しげに罵りて顧きもせず房の扉半ば開きその隙に脚踏み入るれば扉の邊に身を控せて名を聞けば怖ろしき呂宋のお瀧見れば姿のそれはどよよと凄からず朝露の珠装ひし鬼薙の風情の女今白子

がちの眼光するどく船長を迎へ視て、
「貴君の姿の言ふことも聴かず頭星山を殺して仕舞ましたねあれほどまで妾の口を酸して言つたのよ聴かぬかあいで到頭罪を作りましたねさア是からが妾の番だ貴君妾を何ささるの殺すから唯だ今その短銃で殺して下さいさ満二年貴君の傍に居る妾の心が貴君よの解らぬ馬鹿くし

い如是厭赤船の中へ居るといふのも唯だ貴君ばかりが頼りその頼る人も
 無い肚を探られての妾アもう生て居る甲斐がありやしあゝ馬鹿く
 しい筆を其の厭られた人から殺される方が妾ア本望だと思ひます」といひ
 つゝ流盼も船長の顔を視る、
 船長の手も持てる短銃を投げ出して寝臺の角へ腰うちかけ波打つ胸を
 撫でんとして血潮の痕も驚ろきて直さま上衣を脱ぎかくれば装束する
 女の走せ寄り背も廻りて脱せやりつゝ「お、そのお顔の血の氣味が悪い早
 く洗ふて上げませうこれが奉公の最終か」と肩越し嬉けるやう流盼を浴
 せかけぬ、
 お漣へ船長を起たせもやらず小走り彼方へ走りて漣々ど水を盛りたる盥
 鐵その水も波を起せて走せ戻り香水瓶の口を捻りて幾滴の香水の珠を浮
 せて「さア顔を洗ふのです疑立として居て妾が洗つて上る迄お俵ささい」と
 六尺ゆたかの朱髯男その領首を右手に摺んで高い鼻が水を紙るまで推し

つけぬ船長の鼻の背も皺を盛み痛む痛むッンナと劇くして乃公の堪
 らぬ
 「思ふさま痛くしてあげますよとせ厭られた肚癒せよ頭の皮の剥けるま
 でゴシ〜洗つて進びますよ憎がられ序でも臆斗憎がられてそれから貴
 君のお任意」
 怖ろしや呂宋のお漣の舌の頭も鬼も均しき船長の皺られて六尺の大男看
 る看るうち身軀の鞠ほを縮まり柔らかき掌も丸め込まれぬお漣の船
 長を捉て抑ねて顔を洗ひ髪を洗ひやがて姿見の前へ連れ行き背後より櫛
 を捉て髪を櫛きやり香水の霧さへ吹きかけてさて新らしき上衣を被らせ
 鏡も顔を映させて「え、憎らしいッンナ綺麗も顔が善くも〜今まで妾を
 欺してたね」と至痛も二の腕を捻り上げたり、
 捻られて鏡も映る船長の笑顔お漣のこの間へ投げ捨てありたる短銃を拾
 ひあげぬ、

短銃のうちよゝまだ四發の彈丸が殘る、彈掛憂乎とひき下せ、瞬く間の電光に迷しりて六尺の大男の血煙を咽びて反さま、倒れぬべし呂宋のお瀧の短銃を拾ひ上げて彈機をひき上げたり、蠟より白かりし顔の看るく血を濺ぎて鋼鐵色の眼光凄く銃口を差し向けつゝ、睨みつゝ、滿二年の間連れ添ふた妾の心疾うから解つて居さうかもの、この春の佳吉今日、星山貴君の嫉妬から罪も報ひもかく人の命を二人まで奪り而して終るゝ妾までを亡いものゝ為やうといふ薄情者あゝ妾、今まで欺されたが口惜しいく口惜くッてく、妾を妾の貴君を殺して妾もこの場で死なますよといひながら咄嗟彈機をひき卸さんとす、

船長の顔色變へて飛退きつゝ、ままたまア俵て呉れ乃公の決してお前を疑はぬ疑は皆き舞れたもう疑圓の露れた短氣かことをするああア危険と首を縮め背を丸めて身を銃先より外しつゝ、手元の隙より飛び込んで快手く

銃を撃き奪らんと規つて房の真中の柱を楯よ三遍ばかり環り走れり、お瀧の此方の窓を後楯よして屹と立ち描圓機のやうな身を廻して銃口を船長の胸より外さず疑圓の露れましたと口先ばかり甘いことばかり言たつてもう其の手より乗りませんこの春の事だッて妾のアレ程貴君も言て何かことがあらうとも決してお前の疑がぬと言つた舌の根の乾かさいのゝ何しても星山と怪しいあんて日本の諺も變り易い男の心と秋の空と申します妾も幼さい時親と分れ人々欺されて日本の國を離れ辛苦も辛苦を重ねて一昨年廈門で優しい貴君の心うれしく滿二年の夫婦の交情天よも地よも貴君の外よ頼る人のさ哀れき妾今更厭たと言はれても何處へも行かれぬこの妾怨めしいやら憎いやら妾の狂人よありましたよ何せ厭かれて死ぬのさ初めよ可愛と思ふた貴君と一處よ死ねば妾の本望何しても妾の貴君をこの短銃で射殺して而して妾も潔く死なますよア覺悟をなささしとらひつゝ、銃口を向けぬ、

箭を向けられし箇の中の猿そのまゝ船長の身を震はせて隠らせて「ここ
れ短氣奇事を爲て呉るお前も厭いたかんとンナ事留針の先は
どもありやアしさい請願その短銃だけ乃公も渡して呉れ乃公がお前
愛することの決して譲らぬ聖母マリヤの御名の下乃公のその事をお前
よ誓ふ」それで眞正貴君の妻を見捨てせんか妻の心の潔白赤のが解
りましたか」まだ銃口を向たるまゝ、問ひ返せば船長の幾度か點頭つゝ
「眞正だ偽言の吐かぬサアその短銃を乃公も渡して呉れ」いえ、この短銃
は渡されせんこれに妻が殺されたといひながら、扇の邊へツカ〜と
進み寄りて海の中へその短銃を投げ込み、
蘇生りし心地の船長玉赤す額の汗を拭ひもやらす呆然として立ちたる傍
へ今までの憤怒の面相俄か崩れて笑顔美しく「それで貴君の屹度妻を
見捨てせんね妻も貴君の心が解つて嬉しいサア交情を温ませう」といひ
ながら扇の隙の棚の上より取り出したるの短銃二個は葡萄酒一個香燕子

をさへ皿に載せて「一杯お喫りささい妻も一杯飲みませう」と先一杯を
船長も屬して指の先よて香蕉の皮を剥きながら雨降て地固まるほどと
嬉しい」後を顧みて舌を出す窓の畔の手前の鶏鳴「ほんと嬉しい」船長の
始めて微笑りお灘の身を寄せて「星山の亡骸は何あるの」「知れた事よ
他の者の示威も海の中へ投げ込ませるのよ」

第三十三回

哀じべし六尺豊かの髯男の呂宋のお灘の顔の先よて追ひ使ひる、奴隷と
ありたり朝日千里の海の涯ある波排し披きて波よ黄金の網を布きたり
空の瑠璃色雲の瑠璃晴々しき太平洋の景色を眺めてお灘と船長と甲版
の上を散歩せり鮎太郎も今朝より同僚の赤髯より渡されたる身も適ぬ水
夫服を着けて彼方此方に走せ廻りて仕事の手傳をさし居たるが星山確か
又船長も殺されしと思へば怖ろしく今しも兩人が肩を捕へし散歩の様を
見て驚えず濡身の毛を職がせぬ二十餘人の水夫ども、皆恐怖の色も顔

百十六
 黎ませ互ひ目挑せしつゝその仕事を屬み居れりこの船の實は北太平洋
 の中を走りて今の北緯三十度モレル島の邊よりメリッ沙洲の間を行く
 あり夏の最中の日劇しく潮も沸かと思へるばかりの暴風の無風とあ
 り帆の姿へて力なく垂れ下る折しも船を望んで群れ來たりし大沙魚小沙
 魚船長の舷を身を遊せて水夫どもも聲をかけ「暑いといふて避易れて居て
 ん暑さが増すあれ見ろ絶大い大沙魚がやつて來たぞ時又取つての逸興あ
 れ釣り上げて遊ばうと思ふ存分働らいて總身の汗を絞れば己が汗で己が
 行水汗の行水その後の涼しさ心地よさア翠行ろ餌又乃公が好い物を
 吳てやる」といへば水夫ども異議あるべき早速沙魚釣の用意をさしぬ
 船長の水夫の中にて三人の朱髯を喚び出して「今朝貴様達も吩咐て置いた
 彼の星山の死骸われも悉皆始末を付けたか好い餌といふの彼の事よと
 うせ水葬を爲てやらねばならぬ事だから有無のあい此の大沙魚の腹を裏
 腐と葬式をしてやらう可いか解つたか早速その餌を握いで來」と吩咐け

百十七
 ぬ吩咐けられたる三人の顔見合せ傍々聽きし水夫どもも眼を圓くし四人
 を餌に魚を釣る日頃年頃殺生に慣れし白徒ながら流石とこれに猶豫ふ
 と船長疾く「と急がしてやがて擔がせ來りたるの毛布を裏みて其上
 帆網を十重二十重と巻きつけし一物あり三人のさも重たげと運び來りて
 舷の邊に置け残る水夫の面々の帆網の先は大牛の角ほどの釣をつけて
 そこよ囊の日捕りたる沙魚の肉一塊を貫ぬき其の帆網を船の横木其處を
 る滑車と啣ませて六七人並び立ちて踏足し下唇を噛みつゝ俟ちたり
 「好し」と一聲船長の號びしがその顔の鬼かどばかり怪しまれぬ三人の水夫
 の唯だ無言よその手を放しぬその顔の藍より青し毛布を裏みし一物の二
 度ばかり宙を覆りて波の上を落ちかへればそれと見たる沙魚ども皆眞白
 ある肚を返し大腹ほどの口を開き唯だ一と呑と腹ひかゝるその中の一際
 怖ろしき大沙魚ありて雄鬚を振つて波を敲き波の片々さながら白鷺の大
 ささふ亂れて飛びてその勢ひの凄まじく一氣に小沙魚を跳ね除け吐きと

いふ間も彼の一物を呑み込みぬ驚破や今ぞと號びたる船長の聲の下より先頭も立ちたる水夫の帆綱を執て投げ出す大沙魚の復の香餌を見て飛びかゝるやそれと曳けと離れ號ぶともかく物を破りたる掛壁もろとも五七人の大男足踏み張りて曳き上げんとす大沙魚釣又頸を縫ひれて狂ひつ復た狂ひつ笑より大きなその雄鱈を敵かれあべこの船や微塵とあらん波荒れて風塵さし

第三十四回

小山のやうな波を揚げ驚はどの潮を飛べせて大沙魚の今その頸も大牛の角捲め曲げしやうな釣又縫ひれてこの船を雄鱈にかけて微塵も碎かんと狂ふさまの凄まじい

鮫太郎の噂昔より今朝より又た半响先きの怖ろしさを唯だ今まこの凄まじくも勇まじき沙魚釣りの気色も奪られて恍惚として潮はの華の覆れど飛べるその中も立ちたるまへ瞬きもせず見物せり滑車も食ひれし大綱も

諸手をかけて曳き上げんと船身の手を簡めし朱髯もその太い腕より五郎八茶碗を覆せたやうな力瘤を益かし力みし顔より血の潮して夏の一を越した鱈の眼球そのまゝの真紅まきし諸座揃えて走せ出せば綱の端の看るくうち甲版の上に盤踞を巻き大沙魚の波の上より一間ばかりの頭を露にし釣を結けたる綱宛然太き棒かあんとやうな真直とあれり
「やア沙魚が頭を出したぞ射ち留めろ」と船長が號聲の下より一人の朱髯の小銃を懐へ還音刻みて走りながら受然と弾機をひき上げて銃のやうな眼を的も切つて放てば標的の外れて頸の邊に斜に射貫きぬ射貫かれて沙魚の忽ち身も閃めかして鱈を振ふや大綱のフツリと断れて綱も縫れる七八人の朱髯もい將基倒し急躍りて高い鼻を甲版の上へ壓し潰し失策たど通られたまぬけ奴貴様の射撃が悪い爲にわれほどの獲物を通したぞと船長の拳を揚げて打たんとしたるこの折しも負傷の大沙魚今大浪を簸り上げて千尋の底も沈み行くその揺動もて船の俄か傾きて船長も水

夫も船中残らずの人の至痛は臂餅つきの、
 絶大しき獲物の九死の中を出で逃げ去りたり残る沙魚も波の籠り又揺
 られくして遠のさしが少時の後ちの復讐ほどの口を開けて船の四邊に集
 まりぬ船長の水夫をも叱り飛ばして復たの大綱その先の釣は鯨の膏
 肉を縫ひせたるを投げ込ませたり飛びかゝつて呑んだる小沙魚をら曳け
 ツと諸聲は叫びつゝ難なくこれを曳き上ぐれば水を離れし沙魚の最後の
 勇氣を振り起し六尺ばかりのその身軀を甲板へ打ちつけて狂ひ跳る若
 しその一跳り中りあり腰一本ぐらゐの折もしやう肋骨ぐらゐの碎けもし
 やう聲を籠られたら牡丹の花の紫徒ぐらゐかゝ肉醬とあつて消し飛ぶま
 での受合あり水夫のその四邊を環立て次第に弱る魚の勢を見濟し手よく
 鯨尾丁を打ち振りて骨を断り落し肉を殺きて好きどころだけを取り悪い
 どころの海に投げて流血淋漓のうちよこの六尺の魚を幾血の肉とあし殘
 る骸骨それを海へと蹴落してさてその流るゝ血と膏とに啣筒は海の水を

吸ひせて甲板の上へ吐かせ帯の先を洗ひ清めぬこの間も手あきの水夫の
 庖厨の方へ走せ行きて料理の支度も餘念なくやがて沙魚の肉を淪く香り
 の高く匂ひて釜の中は蟹の眼の泡を噴く膏の沸る香驟雨のやうあり、
 やがて料理の出来あがりぬ午餐の卓の上は沙魚の肉の天鉄羅いと香ば
 し水夫の長き腰掛の上は臼骨を推し並べて肉叉を執れど嗜昔まで同じ卓
 の物を食ひし星山が今日の衰れを想ひ出し平生の馬も優りし健啖家あ
 がら唯さびしげな顔見合すその折からあれ／＼遙か彼方へ怪しき船がや
 つて来た予と一人の水夫が起ち上れば船長の手快雙眼鏡を取り出して眺
 めしがその顔色の次第に變れり、

第三十五回

眼の窩に推しつけたる雙眼鏡を船長の手快く退けたれどまだ遙かの怪し
 の船も眼を放さず周章しく袴の衣兜も手をつき入れて取り出したる手帕
 も眼鏡の鏡の翳を拭ふて復た眼へと推し當てしがその顔を見る／＼うち

よ青くありて髯も半分埋もれし枯葉色の唇の顔えたり、
 長腰掛は臂推し揃べし水夫どもも眼の色を變えて起ち上り「船長彼の船の
 何ですか舳を此の船の方へ向けて一直線よやッて来る風を前帆で斜に受
 けて箭を射るやうにやッて来るの衝突でもする氣であらう端倪の分らさ
 い奴だあア船長見なすか彼の船の善く視えますか」と諸聲を耳の四邊よ
 浴びせたれども船長の術擬乎と立ちたるまゝ有無の答もあし氣遣の水夫
 の其一人の横よりつと手を伸べてその眼鏡を急奪らんとするを船長の振
 り拏りて「急驟あ俟て怪しい船がやッて来た水夫どもも巽然として「怪しい
 船がやッて来た」と鷓鴣返へし「うむ怪しい船がやッて来た船体も帆も皆あ
 水淺藍の大船が今その舳を此方へ向けた駛いはく「三本櫓一杯の帆が
 斜に風を孕んでやッて来るその速力の確かよ一時間十哩の速さがある」
 十七八の朱髯面を船邊の欄干そこよスラリと打ち並べ碧い瞳を据えて臉
 より涙の霑れるまで凝視したる水夫どもも怪しい船の次第くよ大きく

あるよ氣を背ちし船長船の中よ何が見えませるか「十六七人の面が見ね
 るやア見慣あ旗を橋の上よ掲げたぞ何國の旅だかまだ見分がつかぬ人
 の面が青豆ほどの大きさま見えて来たやッ舷砲が顔を出した六珊ぐらゐ
 の大砲だ海賊海賊海賊だ」と號びながら手よ持てる雙眼鏡を取り落しぬ海
 賊と聞きたる朱髯どもも川楊の秋風に吹かるゝやう震え出しぬ八分の
 法氣を他よ見せて水夫どもも氣を落させしと辛くも五臟六腑より絞り出
 したる二分の勇氣「海賊とて多寡が知た六珊の大砲あれぬ虚嚇だ衝かけて
 来るをひッ外して視射よよッ放せ少し手剛い鯨を捕るといふ覺悟あら大
 丈夫だ戦闘用意」と號令すれば水夫どもも「ばら〜」と右舷左舷へ散り行き
 て思ひくよ小銃を構へ舵手も舵の輪車その把子も諸手をかけて衝かけ
 来たる海賊船を面舵よ開き外して呉んづと身構へたり、
 橋の下よ身を並せたる船長の海賊船の次第くよ近づき来るよ覺悟の爲
 たれど今更のやうよ驚きの海賊船の橋よ高く翻へりたる旗章の白地よ紅

く櫻の花を染め出し銃と劔を思ひくは提さげたる海賊の袴袖洋袴を身
まの細へを暗も髪も漆と光る日本人帽子の肩袖その下より巨眼の眺を裂
いて睨みつゝ身を随らする勇の姿その中一際勝れし大の男の夕日を嘲
みし雲そのまゝは赤く燦やく顔の色太筆は濃い墨吸はせて力を籠めて握
ね上げしやうお類髯美しく袖短の日本服衣紋のやゝ崩れたるが大袋を垂
げしやうある肚の皮を揉みあけて井戸側又竹輪うち相しやうある兵見帯
の結び態その上を又太絹の小倉の袴の紐ひッからげ腰よの三尺ばかり
の太刀佩き手まの芭蕉の葉を編みて作りし大團扇を提さげたるが油然と
して笑ひつゝ立ちたりけり船長の眼早く認めて聲振り絞り彼奴が海賊の
頭領を視射し射倒せといふ言葉のまだ断れぬ海賊船の二十間ばかりの
處に押寄せたり

第三十六回

橋一面の大帆小帆風孕ませて真一文字を駛せ来りたる海賊船の威のや

うは密獵船へと衝かけ来りぬ船は咄嗟船の太肚を衝き破らんとす船長の
腰ある劔を引抜きつゝ虎の吼るやうに「面船」と號べり舵手諸手諸匠は力
を籠めて輪車の把手を廻し敵の船の吾が船の肚を靡つて吾が船正しく四
十五度の角度を開きぬ海賊船の一貫と思ひ込んだる的外して帆の向方
變る隙もあく駛り行き一町ばかり流るゝ態を小氣味よしといひつゝ船長
の見送りながら縮み上りし膽の行術の何處やら枯葉色の唇頭かして帆を
追手の風に向け船の通脚しをるゝ亂れし状を見て取る海賊船の艦も牡丹
の花のやうお硝煙パツと起つや凄まじき銃音の海を響きて飛び来りたる
弾丸は舵手の胸を射られて血煙のうちよ仆れたり「驚破や射撃たぞ負けず
は弾丸を浴せかけると」船長の橋の蔭よ身を潜めて下知をすれば顔へる脚
を踏みしめて十七八人の朱髯の銃を揃へて射出せど敵の船は少しも當
らず弾丸の雨のうちよ敵の悠々を船を回して復た此方へと進み来る這回
こそは絶体絶命水夫どもも皆甲版の上よ潜伏たり

船手を射倒されて船脚の踏めくを見済したる海賊船ひたと乗りつけて船を船の太肚へと衝き當てたり船の一と揺ゆれて傾むきかゝれば躊躇き日本水夫の皆銃を投げ捨て、手よく日本刀を閃めかして蓋斯のやうな敵の船へと躍り入り抗ふものを斬り捨て、骸を飛び越え、ア朱髯め有りたけの金を出せ有りたけの銃彈薬を出して仕舞小頼が抗敵命がさいぞ尋常の海賊といふ海賊が異ふ大日本帝國の浪人富士山朝彦先生が多年の志を遂げん爲ふ少時海賊を身を拵して太平洋の真た、中、關門据ゑたを知らぬいかこの關門を破つて通る不敵者有りたけの金を出せ有りたけの銃彈薬をさらけ出せさも無く、船もろとも打ち沈めると呼はりつ、刀を眞向に振りかざして敵に進む刀の下を辛くも潜りたる水夫どもはやがて波のうちを身を跳らせて浮きつ沈みつ生死も分かず、其先、進んだる日本水夫今橋の陰に身を潜めたる大兵の朱髯を捉て押へ刀を振り上げて咄嗟所らんとする背より、あゝ嬉しいその朱髯の船長です

早く殺して讎を復て下さい其奴の極々の悪人です日本人二人まで手もかけた悪人です一氣に殺さずに痛いやうに殺して下さい」と意ひがけなき懐かしき我が故郷の言葉と操れる洋服の婦人振りあげし刀を引て願ひながら睨み下せば西洋婦人の衣を着て居るからつて妻ア毛唐人でいゝなりませんよこれでも日本人ですわ、怖いッナ眼を爲て睨んだつて妻ハ眞正の日本人思ひ違へて所られて、堪らぬお金の有るところも銃彈薬のあるところも皆赤妻が知つて居ますア妻が御案内を致しませう船底よ何十程といふ鯨の骨もありますよラカンも鐘詰も澤山あります出来たてのホヤ／＼の沙魚のツライもありますよ何しろ嬉しいやツと妻も蘇生ツた

第三十七回

眼の前よ人の斬るゝを見て氣味悪きまで從容きたるこの婦人大膽不敵の白徒水夫の舌を巻きつゝその船長といふ朱髯少時の命を預けて腕を

背を捻ぢ上げ怪しの婦人を先立たせて船長房へと案内さす女の曳き立てられて情々ど歩みたゆたう船長は輕蔑の一瞥を與て「船長さん誠まはや今までの何とも申様のさい多世話も成りましたが懐かしい故郷の勇みの人達も此處で逢て厭でくくもう如何しやうと思つたお前と分れることが出来るかと思ふと身軀がツクツクするほど嬉れしくつてくく」堪らぬやうせうせう前日本入研られて仕舞ふ運の末涙ぐらひの顔しても上げたいが平生が平生だから佳い氣味であいで無いのさ此春の雄吉さんを手にかける今朝今朝の男振の佳い星山さんを手にかけて毛布を裏んで大沙魚を食せるとい殘酷しいも程がある平生の強がりも似合ふいッノ嗜睡顔の二瞥と見られさいよ日本の鯉といふ魚の組の上も滅せられてからの眼の目も研られても鱗も動かさず鱗をも堅てす從容も研られるが大の男が嗜睡を作つて臉から涙が落ちて玉鬘黎の毛のやうも其の朱髯の先は光つて居る剛態の不忍見よ妾の氣が爽快として百日の溜

飲が一朝も下つたやうな心地だよといひつゝペロリと舌を出しぬ船長の齒をバリくどくひ切りて火の出るような眼光まで睨つけしがさ部下の水夫その半分研り殺されわどの水夫の皆海へと飛び入りて残るの吾が身ばかりの心細さ今までの我が機嫌を取らせる妾は罵しられも身軀の血の燃るばかりに憤れを打懲すべし腕を背に捻られ居て唯奥齒の碎くる程も切齒するのみ女やがて歩を早めて船長室の扉を推し明け「此處が船長の房ですよお金の櫃の中は在りますよ合鍵の確か其の窓の下の小筐の中は在る筈です一萬圓ぐらゐり有りませうよ外は小出の金が三百圓ばかりその鱈皮の靴の中は在りますがッノ中妾が預けて置いた毎月の給金が二百八十圓ありませう差引二十圓の上げますが残金の妾の物ですから頂戴します」さひさながら其の靴も手を掛るを環立たる日本水夫のその手を執つて推し隔て「やい驚しい静かよしる金の残らず取り上げるからさう心得る言ふことがあるから後で富士山先生に申し上げる」

「おや、昔お金を奪って仕舞ふのいくら富士山先生が豪傑だか知らぬ
が同じ日本人の金を奪といふことはいさゝか、その戸棚の中の
魯士亞革の靴を手を付けていけませぬその中より大汗淋漓もあつて妻
が稼ぎ蓄めた命より大切なお金が入つて居るのでそれを奪られて大
變假令死んでもそればかりの上げられませぬと泣聲立て、身を震はし
乎と靴を舞踏つくを有無を言はせず衝き退けて奪ひ返し命が借くは騒ぐ
お泣くおさア今度の銃彈藥の所在を教える貴様が剛情を張るからこの
船へ唯だ一人放棄として行くぞ柔順なすれば先生も申し上げて命だけ
助けてやるがア案内しろ」といひながら一人の鯉口寛げて睨め下しぬ
「請願ソナ事を言はさいでソノお金も下さい而して放棄さんぞ為すよ
下さい銃と彈藥の所在は鮎太郎さんにお聞きおさい鮎太郎さんへ何處
へ隠れて居るのかしら」

第三十八回

波より湧しか天より降りし如怪しき船の此方を差して眞一文字も進み來
しと驚きし鮎太郎さて次第又近よりて見れば俄かしき日本人しかも船で
見た關羽か加藤清正そのまゝの大男が芭蕉團扇を風を優か又襟推し抜い
て容れながらの水夫の指揮船を吾が船の太肚へと衝き入れて勇士雄たけ
び號びつゝ太刀ふりかざして飛び込み來る且驚き且喜び船の方に
盤踞を巻きし碇網の端を解きて彼方の船を目がけて投げかゝれば彼方の
水夫の心得にて受け留めつ、
鮎太郎のその網を廻りつきて海賊船へと乗り移り船の方へ走せ來るを富
士山朝彦の屹と見て笑を含み其處へ來た青年の紛いもさし日本人朱鷺ば
かり乗った船と思ふて一聲又衝き崩して呉たがもう少しで貴様もこの大
洋の魚の餌食とあるところだ危険だッたさア貴様の外より日本人の居る
いか踏捷やい奴らしい伶俐な奴らしい屈強な身軀だ船夫より屈強な身軀
で湖水で産湯を使つた身軀ださ生抜の船乗ださ併し生抜の船乗として

百三十二
 顔が涼々しい身軀も品がある是から乃公の麾下であつて働けと吐の底
 腑の隈まで見透たるその言葉されど其の巨眼の笑は解けて春風のやうな
 柔しの聲音鮫太郎の唯だ嬉しく慕はしく覺えず膝を折りて膝くまれば
 の最中も辭義も會釋も要るものかまア乃公の傍へやつて来て朱髯も
 祈られるのを見て居る「といひつゝ團扇を揮て水夫どもの指揮をせり、
 斯る折しも腕を背に縛られて船長と二瞥と見れば嘘嘘面の呂宋のお
 分捕の金櫃銃銃諸共甲版へ送られ来りぬお瀧の涙漣の眼を圓く
 しておやく／＼と鮫太郎さんお前の敏捷いね何時の間よ、へ来て
 居るの鮫太郎さんこのお方が御海賊さまの御大将さまで御居しやるの
 是れ御海賊様の御大将さま先づ御機嫌よく目出度お喜びを申
 上げます又今日風も凪も波も平でお結構お日和あれこの暑いのよ
 能々おん出下されまして別して御苦勞様で御座ります妻のこれある船長
 と一處も居りますお瀧と申すもの何分この上ともよろしくお願ひ申上げ

百三十三
 ますとニヤ／＼と打ち笑ふて富士山の前へ進み寄る人を人見しども思
 ぬ振舞ふ水夫ども眼を瞋らし湖べらの唇を敲く其處も居られるの離
 様と思ふこの太平洋の真中へ關を据ゆる樫丸の船長富士山先生だぞ賦れ
 静かよと推し隔てゝ座らせぬ富士山朝彦の悠然として安樂椅子に座
 る身軀を據せ怪しの女子それの咎も與す船長を前へ据ゑさせ言葉徐か
 り「我の日本國の浪人富士山朝彦と申すもの今日圖らず其方の船も逢ふた
 が幸ひ船もろとも貨幣彈藥銃も残らず預かり申す船の何國の籍も屬い
 て其方の姓名を名乗れよ」といへば船長の叩頭して魯士亞の獵船もて舟の
 大いさ六百噸船長を承る某の浦鹽斯徳の産もてドライロツツと申し當
 年四十歳と答うる聲音のやゝ頗へぬ富士山の豊かき點頭してさて水夫も
 叩付けて先づ分捕の金櫃の蓋を明けて中へ充たる黄金白銀の數を聞べ次
 り靴を引き寄たるを恨めしげに見居たるお瀧の膝行出で「おん海賊様の
 お大将様をそれの妾が善たお金船長ドライロツツの分り金櫃の二万圓

と蘭革の物のうちが二十圓二百八十圓の妾が給金又たその魯士亞革の
妾が永年の間蓄た命より大事のくお金です請願妾も下さいましお金と
兩人連でなければ不見不識の外國へ居られるものか加之は南部の銚のや
うき曲鼻で早日の田螺そのまゝの雀眼編むやくしやのドライロツの傍
あきよハ片時も居られぬの妾おん海賊様のおん大將さまそのか金ハ
かりの言葉のまだ終らぬうち頭上より閃めきかゝる富士山が眺みの
電光お瀧の言葉ハ半ハより消えて行きぬ

第三十九回

富士山朝彦ハ分捕の金銀銃彈藥の敵を驚と調べて封印を施して水夫を
もを指揮して獵船の中は残れる書類を取調べ死骸を海に投込せ啣筒は海
の水を吸はせて甲板の血潮を洗はせ清潔な酒掃させたる上座下のうちの
隨一の剛者猪谷猛といふ七八人の水夫をつけてさくら丸の後より同じ
く帆を揚げさせ船相啣みて南を指して走りけり

八重波を排し分けて先を進めるハ吾がさくら丸後より續くハ今日捕獲し
たる魯士亞の獵船富士山朝彦太郎安樂椅子を舷の邊に移さしめ悠然
と身を控えて芭蕉の團扇を風を徐か懐く扇ぎ入れて五寸釘を駢べて植
ゑたやうさ胸の荒毛を駢がせながら心地よげ後を顧みさせ船房は幽ゆ
置きたる船長とお瀧を呼び出す船長ドライロツハ六尺の大兵その膽
おれハ荒毛生にたる不敵者と思ひきや己が身も暗きもの多けれハ腕ハ縮
み身ハ膝に酒も酔たる人のやうな歩武も方かくて甲板の釘の頭も靴先ハ
さかけ幾度か踏みきつ總身の毒血ハ皆赤顔へく逆上つて夕日は紅ら
む甘柿のやうさ後より續く呂宋のハ瀧太平洋を小股にかけて銀は銀
えし面の皮割いてもく皮ばかりこれが真正の疎面といふべき顔のこ
の富士山朝彦も逢ふてハ稍や怯氣の顔も出で蒼白し富士山朝彦ハ跪づ
くドライロツを屹と睨めて聞けハ貴様ハ二人の日本人を手まかけしと
かさて何いふ罪があつて二人の人の命を奪た素直も言つて仕舞ドライロ

百三十六

ツツ下ライロツツ力あげ頭を上げて何やらいはんとするをお池の薄片の唇を尖らせ「お大將さま真正ですよこのドライロツツといふ悪黨のね全く二人の日本人を殺しました一人の此の春多分金華山沖で鮭吉といふ北海道の水夫を今朝の又た星山といふ水夫が妾と話を爲たとかで可哀さうな虚房の柱に縛りつけて短銃で射殺しました罪も怨もあいのものを射殺した上殺虐しいも程があるその死骸を餌として沙魚を釣りその魚を料理して午齋を食て居たところへこのお船が見たのでその狼狽周章かた日本刀の氣味よい切味と朱髯もが氣味よい死態早くこのドライロツツも殺して下さういへば富士山の眼を怒らせ「まだ噤舌るか今まで紅臍鮫めいた唇の先で機嫌を取つて居た人を掌を覆すやうに打て殺して悪くいふ不屈の今一度いふて見よその唇を帆縫針で縫ふぞさてドライロツツ貴様此奴の言ふ通り確か罪なき二人の日本人を手まかけたか辯解さくべ貴様の命のこの富士山が太刀の錆さア何じや」と肩揺り動かす、

第四十回

百三十七

覺悟を極しドライロツツ晚かれ早かれ死ぬる命と思へば早や隠せず怯れず膝行進んで首を伸べ「陛下のものを乃公が殺すよ不思議なかい勿論罪も報いもあいのものを殺さぬ殺したが悪ければ思ふ存分よ斫て呉れさア斬て呉」と身を投げかけぬ「應好し斬つてやらうぞ」と朝彦の太刀の柄を握りて立ち上る、

毛蟲のやうな太眉を添かして鯉口寛げし富士山朝彦罪なき人を殺せし罰の眼面ありや船長がちいれ朱髯の頭顱の雪より白い附襟の際より断れて離れて宙へと飛べんと四邊を環立る鮎太郎はじめ水夫の面々皆掌と汗を握りたり呂宋のお池の喫驚して飛び退きつ一本柳の風を揉る、風情も似たる身軀の震戦その葉の色唇の一際青き顔も著し、

富士山朝彦の鋸音高く刀を鞘に收めて打笑ひ「船長ドライロツツ心配するお貴様のやうな奴を乃公が斫れるか諸膝を突き兩の拳を揃えて青い顔の

中より一際碧い眼も涙を光らせて居る貴様の姿を乃公が見て可哀さうだ
祈られさいぞ假令乃公が眼を冥つて貴様の頭を祈ったところが鮭吉星山
の二人が生て還ることも亦い命冥護のある奴だ亦貴様の命の今日から改
めて貴様を預ける随分大事に掛けて呉大酒を爲るお女おんぞも構ふおよ
預けた命を乃公が還して呉るといふまで大切と預かれ還す時の母金バカ
りでよい無利足の無期限だ併し明日も入用お時の猶豫およ柔順と還せ
借る時の地蔵顔還す時の閻魔顔それでお困るやア水夫お此奴兩人を
別々お船房へお連れて行つて飯でも食してやれと吩咐ぬ
喜怒圓らぬ富士山が振舞ドライロツフの意ひがけおくその頭を被られ
て且喜び且つ怪しむ傍より引き留められて僅とされし鮎太郎この人を神
かど畏れ鬼かど怖れぬされお怒る時の聲の獅子吼顔の羅刹の凄きよ似ぬ
平生の笑顔優しの聲さくら九の西南へお船を向けて後より分捕の獵船其處
より猪谷猛と七八人の水夫を分けておせしを曳き連れて夜も入れお船を

御さず其の翌日も終日走り暮れての明け明けての暮れ漫々たる海上に船
脚早めて追風より帆を開き逆風より潮も乗り幾多の荒島の幾夜の船枕さ
て四十日ばかりの後遙かの波の上へ怪しき島の影浮き出でたり水夫ども
の皆お甲板の上へ馳せ集まりて懐かしげの笑顔麗し手を敲きて喜び歌へ
り
この島は北緯二十度の邊に散在れるマリアナ群島のうちの一個バゴンの
島と呼ばれたり富士山朝彦が南海より新日本の國を建て幾年の間太平洋
を横に縦に押し歩いて分捕したる蒸汽船帆船を海を固むる軍艦ともし
大砲小砲を陸を固めて誠と愛たさくらの國あり島の金輪奈落の底より
生に抜きたる大岩より成りて一個の良き港あれ岩山兩方より登りて御を
曳き大壺を括りたるやうに港を包み外より見透がたし
富士山朝彦の港の入口に船を進めて帆を引御させぬ高く聳えたる岩の端
より紅き旗の旗と揚るの船將歸り來りしどの陸の人の信號あるべし見る

見るうち煙を噴いて露れ出でたる蒸汽船の樂隊載せて出迎ひて萬歳の聲轟らかせつゝさくら丸を曳きて進みぬ港へ入れば大小幾個の汽船帆船さて珍らしやこの南洋の波の上へ斯る美しき國のあること富士山の帽子を揮りて答禮しつゝ鮎太郎を顧みて「驚くお鮎太郎、この南洋の日本國だ西洋の奴等がこの島をペゴンの島と名をつけたが乃公の大人の國と名をつけた見ろアノ岩を大岩と指さす方を鮎太郎仰見れば港へ斗出し岩山の自づと人の形を成し高き四五丈右の拳を揮り上げ左手を腰へ加へ天を睨んで立ちたる姿凄まじくも亦た崇高き岩の勢不思議の岩もあるものですお先生故郷の檀那寺の山門は蜘蛛の巣を腕へ懸け唾で捏ちた紙彈を顔胸肚へ乾枯つかして居る仁王様その仁王様も十倍もあるらしいこの岩の立像は何國の好事家が何か丸太で何か高い足場を掛けて何か大いお驚の先で彫上げたものですか」といふ鮎太郎の呆れ顔を朝彦に見て笑つて「天然自然といふ好事家が雨や風や潮の力で今から幾万年だか知れぬ先

から彫り上げられたこの石像また貴様を驚かすものがある、朝彦の鮎太郎もドライロツッお灘を始め猪谷猛等十七八人の水夫を連れて陸へ上りぬ二百人もあらうかと思ひる、日本人の西側へ居並びて恭やしく朝彦の一行を迎へぬやがて一個の岩山の下へと來れば大いお洞孔あり洞孔の邊より黒鬼のやうお怪しき赤裸の男頭と白き鳥の羽を飾り胸は蔓草の花を懸げ鬼鮫の齒を植ゑた戟を執り白子を光らせて身揺ぎもせず立ち居たり「鮎太郎何だそれが乃公の家だ」と富士山の願きぬ、

第四十一回

洞孔の外に百度以上の暑熱まで地も爛れ潮も沸くばかりあるが洞のうちは風冷かあること水のごとし白き鳥の羽を頭へ飾り蔓草の花を胸へ懸け草を編みたる褌をその腰のあたりへ巻きつけし外は素裸の皮膚は鍋墨を塗りしより黒く唇の逆の葉のやうな巻き上りしその下より亂杭齒の露はれて平常生の魚を食ふ故に燧石のやうな白く透明るその怖しい齒を刺さ

百四十二

出して手又鬼飯の戦を執つて洞の入口又警固する夜まじき姿の鬼が警固の黒奴今富士山朝彦が見知らぬ人を引進れて来しを見るより手又執れる戦を大地又伏せて潜伏ばかり恭しく一禮をかしぬ、さて洞のうちへと進めば涼風自から来りて髪を吹き揺らす次第に進めば夢の覺めたるやう又俄か又明るくありて其處又草薺の家あり窓より草を編みて作れる籠を垂れ薔草の花を柱に懸け渡し家の真中より唯だ一個の大椅子あり椅子の鐵にて作り天鵝絨の蒲團を載せたり富士山に徐かよ肩揺動かして家の前の礎に脚を掛れば垂れし籠は左右に揺れ披いて黒奴二人その蔭に蹲まる富士山の鷹揚も歩み寄りて家の真中の鐵椅子に掛れかくれば黒奴またも大きな銅盤の水を湛えて醸さじと小々波捨せつゝ富士山の前より据え手帕取つて面を拭き胸肚兩手を拭きさて兩脚を銅盤の中へ酒して洗ひ清むさて其の後又茶を進め菓物を進め王様のやう又富士山を敬へば富士山も亦た王様のやう又鷹揚振り顔の先よて部下のものを

百四十三

驅使し船長とカ瀧と居るところを異へて棲みせ鮫太郎一人を富士山の傍に置きぬ、大人の國の王富士山朝彦の歸來しを祝ひんと酒も菓物鳥も魚思ひくくの献物して多くの日本人の洞の中のこの宮居も参りて祝ひたり亭午より黄昏黄昏より夜半まで翌日の朝までも其の賑かさ言わん方よし呂宋のお瀧の薄暗い房も投げ込まれて見も慣れず食ひも習ひぬ可異食物それも當座の肚を締めてつくづくと考ふれば考へるほど不思議であらずと、何といふ島だらう眞珠よりも異いこの島加之齒ばかり眞白も黒奴が人でも食ひさうか權藤見も角不思議か所へ連れて來られたものだ見たところでの日本人が二三百人皆鉄砲や刀を持つて軍人と同じ打扮この洞孔の奥の奥の奥の奥の日頃年頃奪つて蓄めた金銀珠玉の數知れぬいほせ藏つてあらう海賊といふものな好い職業だその海賊の大將の富士山朝彦といふ人のこの島で王様何かして洞孔の奥の寶物を見たいものだとお

瀧の思ひまがら不知不識と洞を出でぬ路は逢ふ日本人も門を守る黒奴も何處へ行くかど答ひるものなく斯くて眼も珍らしき島の風物竹の柱も草の屋編扉を懸けて日を避けし静かき市廛の態を見てやがて市廛の盡頭より續く椰子の林その蔭の涼風慕ふて行くともあしよ歩みを運べ人聲四邊は絶えて日西の海の涯は落ちぬ折から傍の椰子の茂生を推し抜いて露のれ出でたる一個の黒奴あり、

第四十二回

椰子の茂生を推し抜いて露のれ出でたる黒奴は凄く光る白歯を刺さ出してニヤ／＼と打笑へばその厚い唇の巻き返りて低い胡座鼻の膝を掩しぬ「え、好さい黒坊だよこの畜生め何をす」とお瀧は靴も紛る装を棄つて故來し路の草も紛る蛇そのまゝ細さをたどりて十歩ばかり馳け退きつゝ私と願望れハ執念き黒坊の髪を飾れる鳥の白羽を揺らせ耳より傾へと垂げたる莖草の花の纏絡をを動かして後より追ひ来る無禮の振舞不敵

のお瀧も流石と怖て身を顛はせこの畜生め何をす馬鹿者め命知らずめ富士山先生に謝告るぞわれ誰れか来て下さい「黒坊がねこの畜生だ誰れか来て下さい」と泣きつ喚びつ逃げ行く後より黒坊の飛び來つて引き倒しぬ、

引き倒されてお瀧の苦争くを黒坊抱きすくめて搦かせず眼と口と眉とを鼻邊に集めし盛み顔の笑ふのか怒るのか嬉しいのか悲しいのか兎も角一和不思議の顔をお瀧の餘り軟かゝらぬ頬へと摩りつくお瀧は絶体絶命の力を絞つて苦争く身を黒坊の容易とまた抱き上げ指の先まで頬をチヨイと突いてハ眺め眺めてハ復たチヨイと突くやがて今度の髪の手を指の先で捻て見て徐々ど手を伸し傾の先より胸又つゞける鈕子を弄玩り復たニヤ／＼と打ち笑うてお瀧の顔を眺めその厚い唇から輪蛤のやうな涎を流して四方を顧の邊へと傳へ其の末が細い銀の縁とあつてホツタリとお瀧の面の上は落ちぬ、

百四十六
お瀧の早や絶体絶命今まで作つた罪が今日唯今報て来てこの黒鬼も喚れ
るか喚はれずとも身を穢されて死ぬるの眼前誰れか来て助けて来れど叫
ばんよも舌凍れて言ふに由さしされど最後の死力を出して跳起さんと種
々争へどいよいよ緊しく抱きすくめて氣も絶えんの苦しき早や是ま
でと覺悟しての魂も力も抜け果て身を黒奴の膝に任せて眼を冥る折から
廻音高く彼方より近づき来たりし人のけはい忽ち黒奴の背を回つて蹴
しつゝやい氣狂奴何をするさア今一度指の先でもこの女を觸つて見る貴様
の脊骨を蹴折つて仕舞ふぞと罵ればあれは強力の黒奴の捉えしその手
を放して願きながら紫いろの舌を出し何やら頻り物言ふありさま投げ
出されしお瀧の口の口を近れし思ひ逸早く身を起して二歩三歩逃脚を構
へながらこの急場を飛んで来りし恩人その何考と願けり身も淺黄の筒袖
を着て白襦袢を穿き青々と刺し頭のその真中より髪編垂れたる支那人
の年の頭四十ばかりあるがその左の背は黒子あり支那人の黒奴を打ち懲

してさてつかくとお瀧の方へ進み寄るお瀧の斜よその身を構へて片手
よボツボツの箸を取つて傾むけて怒やしく禮をあせせ何やら支那人の
嫌ふ様子支那人の辨髪を振りたてゝあゝ貴嬢の昨日富士山先生と連れら
れて来た日本のお方だね實に私の先生のお妾かあんだらうと思つたが
後で聴けば左様かいとか危険だつたねもう少しで辛い目も逢ふところ
ア佳かつたねと皆を垂れてすり寄り寄りお瀧の顔を背けながらお蔭さまで
危険どころを助かつて難有う侈座いませはんどよ貴郎が来あかつたら何
き目も逢つたか知れませせんおやもう日が暮かゝる早く歸りませうと歩み
かゝるを支那人の及び腰もあつて差し窺ひお前のお瀧じやアあいか
え」

第四十三回

お瀧と呼ばれてお瀧のしらしく眉を盛めあんですつて妾のことをお
瀧さんえそれの妾を喚んだ名ですか妾のお瀧さんといふ名でいありませ

ん』といひ捨て、兩歩三歩行さかゝる清客の首を傾むけ「ちよつと俟て下さ
いお流といふも背て居るところか本物宛然の其方の姿顔かたちをうして
も一昨年の春廈門で分れたお流の阿麗は違ひないが成る程髪は毛も薄く
あつたし小鼻の周囲は薄紫を帯つた小さき腫物が出来て居るし往時なら
思ふと下臉が袋のやうに寛んで薄墨を抹いたやうに黒くあつて眉が細く
あつて潮風が吹かれた故か白いと云ふより紫を青かつた顔が黒くあつた
だけ異つて居るが眼が細くつて白子がちで額の廣くさいところ鼻のチ
ヨボ／＼として居るところ耳輪が煎餅よりも薄ッ片で耳朶が情けなしいは
せ小さきところ上唇が薄くつて摘み出したやうな下唇のところ衣紋竹よ
懸つて居る衣服のやうな肩の張つて居る工合猫背の様子お前が何とい
うが一昨年廈門で分れたお流は違ひないが』と清客の眼を指つてお流の顔
を差し窺くお流の顔を背けて聲に少し怒を含ませ「危ないところを助けて
呉れた恩人と思ふから口の酸あるほどお禮をいふてそして先刻から黙つ

て聽いて居りやア好い氣もあつて他の顔の道具の品評やれチヨボ／＼鼻
だの貧乏耳だの生際が薄いのと聞く耳も持ちませんよ止て下さいもう日
が暮れますよお前さんも道草を食て居て叱られませう左様なら妾にお
先へ参ります』と復た刻み歩は五歩六歩走り出す
この時清客の眼を光らせて道るまじと肩を捉へて「歴しか／＼』とさういふ
せぬお流は異いさい證據を見つけたその左の耳朶の黒子の何如じや貴様
の必定お流は異いさいを明々地々言つて仕舞一昨年貴様が乃公を欺してあ
れまで仕上げた店を散々潰して仕舞て逐電したその恨み乃公が生て
居るうちと邂逅つたら嘆ひ殺してやらうと思ふて居たお流は貴様の異い
さからう一時の嘆ひ殺してやらうと思つたが原來欺されるのが乃公
の不覺欺すのが女の手練ど乃公の悟つてからの怨めしいとも思やさい
か流お流じや無いかお流だと言つて呉れ乃公の面を見忘れたか乃公の臺
海の臺北の總輝と大東號といつた茶店の主人陳羅卿といふものだ』と捉え

前今宵の寶庫の當番か當番でまけりやア乃公等と同伴も歸らうお瀧やこの黒奴のナこの島から東五十里ばかりの島に居るマリアナ群島の總王の弟だよ今での富士山先生の宮居の奥の寶庫の番人を勤めて居るのだといひ聞かすお瀧の古池の水のやうな凄く青い白子を光らせながらザロリとハトナの頭を飾る白羽の先から脚の關節をこま箱めたる真鍮の飾環まで目眼を滑らせ「オヤ、この人がマリアナ群島の王様の弟の東京の九段の下立の坊でもコンナ色の黒い下品で怖ろしい奴に居るやいよほんとに厭だねこの人が王様の弟の蒸汽の釜焚でもモット氣の利いて居る男が居るソレでこの人がお寶庫の番人を勤めて居るのそのお寶庫も日頃年頃アノ海賊いやあ富士山先生が分捕を命ぜられた金銀珊瑚ダイヤモンド種々お寶物が蔵つてありませうね願の先で多勢の乾兒を使つて船ぐるみ他の寶財を奪せて自分の寶澤三味と日を暮すといふの富士山先生も氣味あものだねそれのさうと羅卿さん貴郎の何してコンナ島に被居しやるのそ

して貴郎も其のお寶庫の番人あのだと意ありげのお瀧の間羅卿の態度が頭を揮りて「臺北の處を仕舞てお前と一處も厦門も行くの後お前も愛想を盡され散々も困つた末先祖傳來の品物と使ひ残りの八百兩を命と持船の孔明號に就て上海へ歸る途中富士山先生の乾兒で猪谷猛といふ人の船に捕へられ船頭を殺される命と頼む八百兩を奪られ乃公ももう少して斬られるところを泣いて拜んでヤツと首を繼いで貰ひこの南の洋の荒島へ拘引れて来て今での富士山先生の料理番さ命が愛けりやこそコンナ島へ來たもの、今日此頃のやうで命も何れも用さいと思ふほどの苦しさをマリアナ群島の總王が棲で居る五十里先の島へ行けば折々の外國の船も若し潮も穏かで島から島へと渡るも容易いと開いて居るがこの島の荒潮の中にある岩島で四方の屏風のやうな削成て濼の入口其處より大さき珊瑚礁があつて船の通れるところの唯だ二十間ばかり水案内を知つたものでまければ其の岩も乗かけて船の微塵も碎けて仕舞彼の信天翁の

やうな乃公も身も翼が欲しい乃公も亦たお前もこの島の土も成ると覺悟して居なければならぬと陳羅卿の太き留息を吐きぬ、お籠り聴いて少時思案の後それでマリアナの王様の棲で居る島へ渡れば故國へ還れる便船があるといふのしてこのハトナは何してこの島から渡つて来たの泳いで来たのか歩いて来たのか『知れた事よ五十里もある潮路を泳げるか歩けるか船で渡つて来たのさ』お籠り片頬に凄く笑つて『それなら貴郎も妾もこの荒島の土もあるさんで淋しいことを言ひあけても善い筈一生懸命もありや故國へ還れぬこと無きよししてそのお寶庫といふのの餘程嚴重な爲てありませうね』うむアノ洞孔の奥の奥のとの又奥の其の奥さ、

第四十五回

日の今天の真中より高き樹の陰笠より小さく縮まる午過の熱さされと洞の中の宮居の黄昏よりもまだ昏げれど秋も似たる氣の冷々を懐く吹

き入れつ、例の鐵の安樂椅子は椰子の葉を漂白して編みし座を布かせ其の上は六尺の巨軀を横へ腕掛も臂を添へて解の聲もやかみ午睡するの富士山あり、箒を執りて四邊の塵を掃き寄せつゝ次第くは鐵の椅子の傍へと来りし陳羅卿やがて掃く手を徐かみ停めて俯く富士山の匪態差し窺きたるその顔の何やら心は計りしことのあるらしき苦辛の色の湛ひぬ良や久し又たその眼を椅子の傍ある朱檀の張の上の鐵の手固は滑らして眉を揺かす折しも富士山はこの鐵の椅子の傍りて大波のうねりを作るほど身も動かしぬ陳羅卿皇て飛び退けは富士山その兩の手を突き張りて雷のやうな大欠仲驚の籠も波を繪きて柱を飾りし蔓草の花も揺ぎぬわアッ午餐も暑氣拂ひのウキメキが少し過たものだから好い心地もあつて久し振の午睡をした其處も居るのの誰かといひながら縁のやうな細い眼から次第くは寢氣の離れてやがて黄金の大鈴兩個を懸けしやうな巨眼珠

と成りたり羅卿の帯の柄を伏せて肩を鞠め「先生のお腫のその間にと鳥渡
 四邊を箒き清めやうと存じまして静かき上も静かよと致しましたがお
 眼を覺させ申して誠に恐縮で座います請願御辨をして戴きたいわ、全
 然申し上るのを忘れしました先刻お瀧が参りまして先生の衣服の洗濯が
 皆出来ましたと申しました」「誰かと思つたら陳厨夫か羅卿貴様と聞かう
 と思つて居た彼のお瀧のナ貴様の妹だどハトナが先頃喉を爲て居たをナ
 ラリと聞いたが彼女が全うなく貴様の妹か羅卿の額を掌で敲いてへへへ
 先生浮冗談ばかり仰しやつて支那人の兄は日本人の妹といふのハ座り
 ません」「ソナ事ハ言へんでも善いだが貴様の以前彼女散々欺された
 亦全然乃公が觀破て居る氣を注げる口車又載せらるゝ亦額が平つたく廣
 くツて眉頭が飛び離れて皆が峠斗の尾を曳て居るやうな細く垂つて下唇
 の薄い頤の骨の角張て巾着頭顱の奴ハ得て何如き女でも欺され易い者
 である貴様の人相ハ宛然其の通りだ早くて五年晩くて十年のうちハ貴

様は相應赤金を遺つて故國へ還してやるそれまでハ忠義も働らけお瀧も
 んずも構うさ」心の底を看透されしかど驚ろく羅卿ハドギマギしきから
 「ひひひ劇いことを被仰るかア先生のいくら私しだつて可哀さうな私ハ
 酒ハ好で座りまするが女と來たら見掛又寄らぬ堅賊です酒で思ひ出し
 ました今朝彼のハトナが絶好い龜を捕て参りました晩餐ハソレを日本
 料理の輝炙として差し上げませう而して刺肉ハ肉汁は致しませうそれ
 今日ハ珍らしく小鯛が獲れましたこれハソライ致した方が風味が好し
 う座りませう」
 陳羅卿ハ辯髪を頭の上へ桓盤を巻かせて平生より忠實しき働さぶりされ
 何やら氣の騒ぎて皿二枚まで手を滑らせて碎きたりさていよ／＼晩餐
 とあれハ卓の上へ大皿小皿を布き並べて輝炙の香ハソライの香いと高し富
 士山優か又椅子に據れて鍾子を執れば羅卿ハ心得てウホスキ一を波々ど
 遊びたりけり富士山の鍾子を仰みて酒好のハトナハ一杯飲ませて遣りた

いさ今日彼の姿が見えぬが「はい彼奴の明朝まで寶庫の當直で伊座りませ」

第四十六回

静か青藤の袋を握りて露はれ出でたる陳羅卿懐小管を抱え昏を歸して願へり泥坊猫が魚を盗んで走る態の脊を丸め追々として吾が部屋へと潜み入れ洋燈の下思案顔のお瀧の帳幕を捲いて外の様子を見定め欣々として坐返り凄しく笑つて羅卿の顔を凝視し健筆を首尾よく盗て来たか」といふ

叱と羅卿の手を抗げて制しつゝ上首尾くこれこの通り鍵の手錠を盗て来た賊の輝爍と小鬮のフライで散々ウチスキを籠らせて泥酔させてアノ銀の安樂椅子を擔ぎ上げて善く睡て仕舞たところを見すましてやツとの事で盗んで来た」とその大變お骨折だつたねおや〜お前さんの顔は何したの稚子ぐらゐの大汗粒が鈴生も生て居ますよ馬鹿らしいソナ

一生懸命も成らぬいでも盗れさうなものだよ彼人の泥酔つて居て宛然死だ人も同様だのよ兎も角お骨折お骨折してアノ鮫太郎の居ませんでしたか仲々油断のあらぬ奴甘く先生は諷附て今で古参の人を凌ぐ勢敏捷い奴だから感づかれて居やしまいかと心配した「鮫太郎の夕方からアノ猪谷の猛と一處よ吉野丸を乗り込んで明日から非立竇群島の海の上を脅やかしは行く筈じゃ」とそれなア好都合ですぬ彼の猪谷の何だか咽ッばいやうお可厭奴です二人が今夜吉野丸を乗り込んで海賊も出るといふの妾等の運の開ける瑞祥だよ邪魔者奴の向うから行つて仕舞ふし真正に嬉しいね今年中よの故國へ歸れるかしら船の用意も整ふて居るさア徐々と懸りませうといひながら四邊を回看しお瀧の又た思ひ出したるやうに羅卿さん今から念の爲めにお断り申して置よ若し寶庫の中よ先日奪れた魯士亞革の靴が在れば其中のお金ぐるみ妾の物だよ確か三千圓の入つて居る善いかえ今からナンと断つて置よ其場は臨んで不承知を言は

さいと誓てお奥オヤ／＼佳い物を發見たよ其の棚の上の桐の篋に入つて居る一對の銀の高脚盃をお土産に持て行くよといひながら取り下すこれにやられたそれの富士山先生が秘藏よ爲て居る高脚盃だ先刻から星を附て居たところを横奪された仲々お前も抜目があいかその左の戸棚の中にある珊瑚茶碗十人前の茶碗も茶壺も匙も残らず銀地も黄金の櫻の象眼をれを遣つてい堪るものか乃公が持て通るのだと取り出して腰へと結びぬお浦と羅卿とのこの厨のうちの眼欲しさものを立てぬまで身よつけいざと鍵篋を抱えて羅卿の走り出しが後周章しく走せ戻りて富士山より預かりし小出金のまだ十二三圓ありしを取り出して一枚の銅貨をも刺さず巾着の口を裂て無理よ吞せぬ

洞孔の次第は細りてやがて左に折れれば彼方を見ゆる一點の燈火これやハトナ手よせるランプありハトナも耳聴く兩人の聲音聴きつけ目敏く兩人の姿を認けて走り寄る羅卿の手快く鍵篋を取て與へたりハトナの幾度か點頭きつゝ心下を指さしぬこれの我間違なくこの寶の庫を破るべしとの意ありハトナ真先は羅卿の其次はお浦の又た其次へと進みていよく奪まる洞孔はいよく脊を丸めて行く折しも氷室の扉を開きし如き冷たき風の微吹わたりて彼方より何物とも解らぬ怪物あり飛び來つて真先のハトナを打倒し續く羅卿の面を流瀝るはど痛く撲れて反さすまゝ倒れぬ

第四十七回

怪物の復お浦の頭上を掠めて彼方へ飛び行きぬお浦の覺えず聲を揚げて「らら羅卿さん怖いじやあいか今の何だろうお、怖い」と聲をも身をも願はして蒲伏ながら探り寄るハトナが持てる燈火の打ち落ち落されて眞の眞さ

ハトナは怪しく叫びて「悪い奴も出逢たさア羅卿さん燈火を消されて仕舞
た仕方がねへ蒲伏て行くより仕方がねえ羅卿さん何あすつた何を其處で
叫び居るさる活智が無いじやないかさア私の手戟の先を攫まへて徐々
と顔て来させね燈火がきいからもう悪い奴の来やしきい何を遂巡して
居るさる痛くつて動けきいと動けきい筈だ先刻見りやア腰の周囲へ種々
ものを結附けて居るでいあいか餘り欲張すぎるぞ二進も三進もあらい
ことよあるンナ物の放下して仕舞て寶庫の中のものも膽斗負持た方が
善い遂巡して居ると見つかるぞ身輕くして早く行かう」と急ぎ立てぬ羅卿
の悲しい聲を出して「お痛たたたイヤといふほど乃公の顔を撲ッ敲かれた
眼珠が蜘蛛返つて火華が走つて金の龍のやうさ奴が臉のところよ彷徨た
おや顔が麻痺た宛然他の顔を撫で居るやうだハトナ今の何だえ」と昏
おればこそ幸あれホロリ〜と涙を顔して口を歪め鼻の背よ皺を疊みて

狗のやうに蹲居るハトナは舌を鳴して「今の蝙蝠さ大蝙蝠さ」に今のハ
蝙蝠かえ」と二人の驚きぬ蝙蝠にしてハ大層力ださア手掌で力任せに撲
たれたやうさ痛み方屹度顔一面も紫疵が出来たよしてこの島よの素敵さ
蝙蝠が居るのだね」雨の肉翅を擴げるとこの手戟の丈よりも大きい奴が
居る跡ばかりか狗はさる話の寛々と後よ爲やうよ早くその腰に垂げて
居るものを捨て仕舞て快々と行かう洞孔だから聲が籠つてカン〜響
く人よ聞付られてハ大變だ」實にハトナさんの言ふ通り早くその腰の周
圍の物を捨て輕身よお成りささいよ就中一番重さうさ金象箱の珊瑚茶碗
あんな早く打棄つてお仕舞あさい悪いこと言ませんさア早くさア早
くと言あがら羅卿の腰からそれを解放して私と又吾が腰へと結つけぬ羅
卿ハハトナは扶けられて辛くも起ち上り折角コ、まで持て来たものを愛
いさア潰しよ爲ても五百兩が物を鼻緒の切れた古下駄でも棄てるやうよ
捨て行くの勿昧さいこの埋合せよ寶庫の物を動けるだけ奪て行く

ぞと獅踏つゝお瀧を喰べお瀧の隣まりしまゝ起ちも上らす何を巡遊して居るのだ早く起てもう寶庫の眼の前だ」と勵ませバ慾を力よ身を起して後より斷き行きぬ。

三人のやがて寶庫の前より來りぬハトナの手持は鍵孔探してやがて鏡の扉を開けぬお瀧の羅脚を推し退けて進み寄れば羅脚もまたお瀧の肩を引摺みて厭しかゝるお瀧の聲を顔のせて周章たつて仕方がない奪た物の三人で山分よ爲やうじやかいか併ね魯士亞革の靴があつたらそれ誰が奪ても妾の物だよ」蟲の善いことを今よあつて言ふお放言お山分おんどするものか奪たもの勝ださア好きお物を奪つた」と羅脚の一番重さうお籠を抱えぬソナ事と言つて男のソレでも善ければ力の強い女の損だよ腹斗意地の悪いことをお言妾も其の積するよ」といひながら羅脚のよりも尙は重い小籠を抱上げぬハトナも一個の籠を抱えてきて一敵又洞穴をど走り出づ羅脚とお瀧との喘ぎハトナの後より走り行きやがて洞の外へ

と出れば宵よの露れたりし空の今隠りて雨ふり出でたり絶艇の邊よホツと息つきてさてハトナが用意の小舟よと乘らんとす絶壁高きこと二三丈下よの潮いたく荒れたり絶壁の樹の根より垂れ下りし一條の帆綱これが三人の命ありけり

第四十九回

二個の人を載せ得るこの舟へ三人の人と重き手籠を三個まで載せて舟脚の半より返し波も荒立ちて舟を揺りあげ揺下し舟幾度か沈まんとすお瀧と羅脚との顔の生た人よていあらざりけりやがて東の方白み渡りて群雲のうちよ一道の紅霞長く度りしやうある日の光洩れたりしがやがて復雲よ隠て四邊の黒霧よ掩はれたりハトナの帆を揚げて北へ」と舟を駛らせ終日を海の上よ暮して夜よ入れバ波また高く終夜もまれくゝてさて復た其の明朝とされバ空の晴れたれど四邊よ島の影さへ見えす閑廻の舟底の半よ滿ぬハトナの一生命よ擲出しあがち大層閑廻がやんて來た一跡

百六十六

コナ舟へ三人乗るの無理だオマケも重い筐を三人とも抱へて居るから舟が次第沈んで仕舞アこの分での島も若かねえ先船の屹度沈んで仕舞ふよ命が欲けりやア奪て来た其の筐の重い奴から先へ海の中へ擲込ませけりやア舟が沈むと云へバ羅卿の潮の色よりまだ蒼い顔を盛めて何しても舟の沈むか舟が沈めバ乃公等の餌食も成るのだホッ見たことかお龍貴様が餘り怒張過ぎたもんだから舟が次第沈んで来るぞ早くその重い筐を海の中へ擲り込めばすくして居れば命が幸いアやア貴様の不持お奴だ乃公も珈琲茶碗を捨てさせて置いて知らぬ顔してソレを腰に結びつけて持て居るおさア早くその茶碗の筐と一處にその重い筐を擲つて仕舞へ」それで舟が沈んで仕舞ふから重いものを捨てろと言ふの妾ア嫌です命懸けでやつとコ、まで持つて来た物を捨て、仕舞ふの嫌です、假令舟が沈んでも放しませんお前さんこそ怒つてソナ大きな筐を奪て来てソレを他へ捨てろといふの、豪然だ舟の沈むのにお前さん

百六十七

の故だ他の世話を焼かいで自分のから先へお捨させ」おんだこの怒張婆アめ舟の沈むの貴様の故だ腰の周囲も結び付けて居るもの勿論その筐を快く擲げ込め、ア貴様の力で擲られおけりや乃公の力を借してやらう、うんとこしよ馬鹿も重い素敵も重いこの筐が善く貴様も持てたお中よ珊瑚か金剛石か黄金白金ソナ事よやア構つて居られおけりお込むぞ、いひおがら起ち上るをお灘の泣き聲もあつて引き留めて、後生お願だからソ、筐だけの堪忍して下さい命懸けで奪て来て何お寶が内に隠つて居るか見もしおけりうちも投り込まれてハトナの聲も上げて「次第閣下が這入つて来る早く爲さやと船が沈むソ、筐一個位でハ六ヶ敷舟中のもので残らず投げてお替餅らしい斯うありやア仕方がおけり三人で閣下を引いて貧乏閣下中つた人から海の中へ飛び込むのさ」この一言も陳羅卿の膽を冷して眼窩の即座も窪み頬の俄かお腫けしやうよ周章驚く」ア大變だは早くその筐を投り出せ剛情を張れば貴様の身

林諸共、投げ込ひて、襟ひき摺り、仕方がある、妾がこの籠の身代り、ありませう、妾が海へ這ったから、この船が無難、島へ着かうかね、アそれ、海へ這るよ、いひあがら、帯ひき解きて、吾が身を緊乎と、舷端へ、結びつけぬ、陳羅卿、の怪しみ、て、身軀を、ソコへ、結びつけて、何するのだ、妾、緊乎、舷端へ、脚づいて、身軀だけを、波の上、に、浮して、行くのさ、馬鹿め、ソコ、事、を、爲たつて、舟が、浮く、カッ、レ、見る、舟が、傾いで、来た、早く、籠を、投り、込め、この、籠、け、の、助けて、下さい、ハ、ト、ナ、さん、お、前、の、泳ぎ、が、達者、と、聞いた、情願、妾、と、この、籠、を、助けて、下さい、若し、無難、島へ、着いた、から、膽斗、お、禮、の、致、します、何、あり、と、言ふ、ことを、聞き、ます、欲、い、と思、ふ、もの、を、進、げ、ます、

第四十九回

帆綱を、臂、に、巻、き、つ、けて、黒奴、ハ、ト、ナ、の、身、を、潮、の、中、に、隠、ら、せ、て、泳、ぎ、出、し、て、青波、白、波、八、重、の、波、も、寄、せ、て、来、よ、この、女、の、爲、め、から、は、黒、潮、も、身、の、爛、る、とも、厭ひ、い、せ、じ、無、難、島、へ、着、か、で、や、い、と、果、敢、あ、き、戀、心、ふ、り、起、す、會、々、追、手、の、風、さ、へ、吹、き、て、舟、の、輕、び、と、駛、り、た、り、ハ、ト、ナ、波、を、揉、ま、れ、て、疲、れ、し、身、軀、を、舷、端、へ、寄、せ、か、け、て、の、息、を、續、き、息、を、續、ぎ、て、復、た、泳、ぐ、斯、く、て、其、日、も、暮、れ、て、通、夜、の、ハ、ト、ナ、の、働、き、こ、も、二、日、と、二、夜、の、波、推、し、披、き、て、その、翌、朝、マ、リ、ア、ナ、群、島、の、總、王、ガ、ル、レ、ン、の、棲、む、荒、島、へ、と、閑、伽、と、浸、り、て、沈、む、ば、か、り、の、舟、の、辛、く、も、若、き、ぬ、

百七十
 し態を見つけ開きつけて荒磯の邊に群がり集まるハトナの人を推し分けて棲捨てたりし椰子林の蔭の草の屋、お瀧を扶け來たりて背より鼻き卸し芭蕉の葉を細かく裂きて編たる蓆を布き座を掃つてその上へど小篋もろとも座らせて復た小走り又走り出でしが少時して芭蕉の實を醸して作れる濁酒の瓶を抱えて歸り來り隻手より椰子の實を扶つて作りし大碗それゝ濁酒を盛りわけ鼻の鳴くやうな聲を揚げてお瀧が面前に差しつけぬお瀧の儀又堪へがたければ怖く、あがらその大碗を取り上げて氣味悪げ一口吸れば味ひの微しく酸味を帯たれを香ばしき酒の氣あり宛然ラムチよ少しばかりの酒を加味したる飲料ありやがて一氣に飲かけて發汗も刺さずハトナ例の蛤の貝のやうな大きな歯を刺出だして蛞蝓を視め復た一盃飲いでやりぬお瀧のまた飲み乾しぬ、
 舟の中より取り残されし陳羅卿の後より泣聲出して喚び留められたる群集の

人の中よハトナの姿もお瀧の影も隠れて見えず集まり來れる人も人も皆お螺髪厚唇墨より黒き皮膚を飾る蔓草の花白く手よく鬼絞の齒を植ゑたる手載さらすハトナの骨を研ぎ上げたる假月刀大盤の鉄を挿めし槍を提げ明透るヤウな白い齒を紫色の唇より刺出して握みかゝつて啖ひつゝ兼まじき凄まじの姿を見て陳羅卿の怖さ恐ろしさは齒の根も合すやがて一人の大男のづかゝと進み來りて羅卿の襟を握み上げ左手は小篋をひつ抱いて濁歩は群集の間を行けば生きたる心地せぬ羅卿の頭より垂りたる辨髪を頭から尻尾が生て居る人かど怪しく珍らしく思ふ黒奴數十本の手に彼方より此方より群がりて捻り回すその蒼蠅さ果に力に任せて曳く者もありて眉毛も皆も倒しまし引き釣らるゝその痛さ斯くて羅卿の命だけの助かりてハトナが家へと連れ來られぬ
 ハトナの家は四邊より人の山を築きぬや久潤いあわハトナさんその顔色の乳より白い唇の色は血より紅かい女の其方の細君か美しい女を此

方ハバコンの島から連れて来た者」そこへ頭えて居る頭から尻尾の生えた奴の何だ絶佳しく肥つて居る人間だかア股の邊を炙て食たら美味からうと口々々聞ひかくるをハトナハ王弟の威光を笠に立ち上つて手を振りつゝ彼方へと逐ひ退けてさて羅卿も西燕酒を進めぬお流のやゝ元氣づけり羅卿さんハトナのお蔭で辛くも命を拾つたよさア奪て来た儘を披けて檢分しやう羅卿さんお前さんから披けて伊覽昔譚ある舌切雀の重い寫籠でハ隻目小僧や大入道が出るけれどその重い籠の中ハ屹度多量寶物が藏つて居るよ

第五十回

一碗の芭蕉酒を羅卿の腹つて小籠の前に置きその上ハ兩手を載せて叩額きつゝ上海の慈眼寺に在します南無大慈大悲の觀世音菩薩様萬望この籠の中ハ金銀珠玉の充ち満ちて居りますやう願ひます假令今この籠の中ハ在る物が泥土か鉛であるとも其を大自在のおん通力で金銀珠玉と變ら

せたまへ金銀珠玉とて多きハ望ます金からハ牡丹餅ほどの大きさのもの百枚ばかり銀されハ切餅位のもの百か二千個さてまた珠であるからハ成らう事あらマイヤモンドそれも腰斗の望みませぬ糶子ぐらゐの大きさは二三粒蜜柑か林檎ぐらゐの大きさは七個八個で澤山若し又た梨子か橙子ぐらゐのマイヤモンドあらもう唯た一個で宜しう御座ります若しこの中のものが珊瑚であるなら豊後梅ほどの珠が二三百枝珊瑚でも宜しう御座りますが根本一尺ばかりのものが七八本大自在のおん通力で成ることあら中ぐらゐのマイヤモンドが二三粒ハ枝珊瑚が二三本八分珠ぐらゐのものが四五十金の棒が七八十本御座りますれハ結構です銀の展板ハ有つても無くても思召し次第南無大慈大悲の觀世音菩薩様のおん誓を垂れ給ふてこの願を叶へて下されハ毛頭僞言の申し上げませぬ恙なく故郷上海へ歸着の上ハ屹度慈眼寺のおん本堂の前へ黄金の燈籠一基を獻納しなすると「心不亂」願ひ立つ。

百七十四

聞き居たるお瀧の吹き出しぬ「おやく」大層お慾張だこと、それだけ有れば世界の豪商、ロスマチャイルドでも跣足で通るよ、橙子のダイヤモンドを賣たあら六七十の黄金の燈籠ぐらゐの造作、あく出来、一個献納する、あんで香盤じやア、あいか、而も蟋蟀籠や、盆籠位の燈籠で、お前さんの胡麻化す了簡でせう、さア早くお開けささい、ドレ鳥渡お見せ、おやく、大層重いことね、この重量で、金の棒や銀の展板が一杯、飛ッて居るらしい、おやく、受々、音がしま、すよ、珠、あらハ、ダイヤモンドか、珊瑚です、すよ、ダイヤモンドと珊瑚とが、この籠一杯、飛ッて居て、大變です、ねえ、若しさうであつたら、あら萬更故、他人でも、あゝ、委、ま、ダイヤモンドを七個、八個と、珊瑚を十二三、頂戴、お善い、か、ね、羅卿さん、「蟲のいゝことを、言て居る、さア、乃公のハ、ダイヤモンドと珊瑚と、極て、置いて、お前の籠から、開て見せ、おれ見せ、あ、コレ、重い、あ、此、奴も、受々、音がする、而も、ソノ、受々、が、大きい、ぞ、お前の、金の棒、だ、金の棒、よ、遠ひ、あゝ、如是、しやう、お瀧さん、お前の、金の棒、であつて、私の、が、金剛石と、珊瑚、であつたら、棒、十本と、小

百七十五

さあ、金剛石一個、棒一本と、珊瑚の珠五顆と、交易やう、いやく、損だ止、よしやう、開、あゝ、うちが、樂み、だ、え、決心、つて、開ける、ぞ、お瀧、喫驚、して、目を、舞、す、あゝ、い、ひ、あ、が、ら、力、を、極、めて、その、小籠、の、蓋、を、割、せ、バ、こ、ろ、く、と、滾、れ、出、たる、ハ、小銃、の、彈、丸、あ、り、ヤ、ッ、これ、ア、何、した、事、だ、と、陳、羅、卿、の、反、け、さ、ま、ま、倒、れ、て、起、さ、り、上、ら、ず、

お瀧も、痛く、驚ろ、きて、倒、れ、かゝ、り、し、身、を、諸、手、よ、支、え、て、眼、を、丸、く、し、羅、卿、さん、ソ、レ、ア、小銃、の、彈、丸、じや、ア、あゝ、い、か、重、い、筈、だ、鉛、の、丸、だ、も、の、餘、り、お、前、が、慾、の、渴、いた、願、を、掛、た、者、だ、か、ら、元、の、金、の、丸、で、あ、つ、た、も、の、を、觀、音、さ、ま、が、憎、い、奴、と、思、召、して、大、自、在、の、通、力、と、か、で、鉛、の、丸、と、お、變、あ、さ、つ、た、の、だ、よ、た、が、を、か、し、い、ね、え、私、の、も、氣、が、い、り、だ、ド、レ、開、て、見、や、う、か、と、蓋、推、し、開、れ、バ、こ、ろ、く、と、轉、び、出、で、たる、ハ、吐、月、峰、ほ、こ、も、包、み、た、る、金、の、棒、さ、て、こ、を、確、か、金、の、棒、と、快、手、く、一、個、を、拾、ひ、上、げ、て、包、の、紙、を、少、し、剥、せ、バ、を、か、し、や、是、ハ、五、十、錢、の、銅、貨、包、一、箇、の、も、の、を、合、せ、て、二、十、圓、よ、り、足、ざ、り、け、り

「え、口惜しい欺されたぞうしたら善からう」とお瀧の泣きぬ先刻より傍よ
眺めしハトナ自己も奪りしその小篋を打ち破りぬ中より露のれじの幾包
の銀貨ありお瀧も羅脚も起き直りてハトナの顔とその篋の中の金とを眺
め居たり

折から大兵の黒奴一人殿めしく入り来りて「何故歸島たら早く機嫌を聞き
又行かきんだ兄様どのが大の腹立早く頭から尻尾の生えた人間達を連れ
てお詫言行け、

第五十一回

マリアナ群島の王ともいふべきガレン會長先頭弟のハトナの舟に乗
りて隣の島のバゴンへど渡りし後風の便も聞けバこの頃バゴンの島を我
物頭は横領して海よの艦を囀ね山よの砲を聯べ櫻の花を紅く描たる白地
の旗を推し立て、土着の黒奴を狗よりも馬よりも虐く使ふ日本人の僕ど
ありしどの事も快からず思ひ居りし折も折どて今朝また聞けバ不埒の

トナの顔の色の乳より白くて唇の色の血よりも紅い美しい女子の外は頭
から尻尾の生えた不思議の人間を舟に乗せてオメくど歸り来りて棧拾
てし家へと伴おひバゴンの島から持ち来たりし珍玩しい品物を打ち聯べ
て遊び戯むれ今歸つて来たと言も挨拶も来ぬいよく不埒千萬と會
長頼り怒り罵しる折しもあれ帳幕の外へハトナの戦々ど腰を屈めて「ハ
トナが唯今歸りましたバゴンの島から召進ました二人のものもコ、へ伴
ひ参りました」と例の蛤のやうな大きな歯を露はして雨の傘を石塔の上に
突き高麗狗のやうな跡まらぬ、

ハトナか久潤しいぞ俟て居た不埒の奴ど乃公の怒ッて俟て居た先づ退入
れ痛い鐵拳を一個和主の頭へ與つて眼の珠も蜻蛉返りを打たして乃公の
氣を震して爾して詫も聴かう話も聴かう先づ退入れ」といふ聲の宮居のう
ちも震ひ起りぬ羅脚の真蒼とありたりお瀧の雷そのまゝの聲も腹を縮ま
せぬハトナはその言葉を聞きて眼を異しく光せて龜のやうな頭を締め兄

百七十八

哥その和主の鐵拳だけ許して呉謝りも亦く家出をして復た飄然と歸ッて來た乃公が悪い悪いからコレこの通り二人を連れて來た乃公をまだ能言を聴かぬうちから鐵拳どの情けあいなまアその鐵拳だけ免して呉れ先頃濱邊へ舞ひ下つた大鷲が兄哥の鐵拳を嚼つて大鷲の肉腸そのまの眼珠の飛出た其伎倆の鐵拳でこのハトナの頭骨が碎けるそれだけ免して呉その代りよ何ん事でも乃公の聴くといひながら兩掌又頭を抱きながら膝行進んで兄あるガレンの足を蹴りぬ、

ガレンの打たんとしたる拳を控へて腰又加へ立ちたるまハトナを下瞰しが怒りや解けたるらし運て來た女等を先づ此處へ遣入らせろ開けバ其の女子の貴様の女房だとか乳より白い顔又血より紅い唇それのく美しい女と聞いたバゴンの鳥よなまだンナ美しい女が居るか貴様の善い事を爲て來たか先づ其の美しい女を喚び込んで乃公を見せる頭から尻尾の生けた人間もまた不思議じゃそれも早く喚び入れて乃公を見せる

百七十九

といへハトナの點頭きて兩人を内へと喚び入れぬ喚び入れられたる兩人の怖るゝ會長が前へと進み近づき一袖を爲たる後仰ぎ見れば會長年の五十ばかり黒き膚又白さの眼の光り齒の色のみ素肌の上は羅紗の洋服その上衣ばかりを着て輝の芭蕉の葉を細かく裂きて纏し簪頭又頭よの蔓草の花を飾りし骨太く肉荒れたる大漢子あり會長の窪みし眼の光凄くもお瀧を視めて良や少時の無言とあり身を後ある椅子又落して脇掛又腕を蹴せぬ羅卿の真先よお瀧の次又進みつゝ羅卿の先少しばかりの贈物をガレンと捧るをガレンそれを受け取りて會釋もせず唯だ羅卿を少時視めてまた其の眼光をお瀧へと滑らせぬお瀧の戦慄とせり、

ガレンのお瀧の顔を視めて恍惚とあれり弟のハトナの氣色を察して善き機會を見て兩人と會長の宮居を辭し遁ぐるが如く吾が家へと歸り香蕪パイナップル椰子の酒種々の馳走をしてお瀧の機嫌を取る羅卿よ眼も呉れず羅卿の面白からず家の外へと徘徊へバ遙かの沖又白帆の影ありさ

ての外國の船の來しと覺えたり米國か西班牙か但しの獨乙か和蘭か、

第五十二回

不平な態をし羅卿の顔の俄か笑ふ崩れたり欣欣として内に入りて急騒の頓狂聲を張り揚げハトナ沖を見る白帆が見ゆるしかる三本櫓の親船が威勢よくやつて來た旗章の分明と見ねぬがいづれ獨逸か和蘭か米國英國葡萄牙か佛朗西の商船がこの島の港に繫つて水薪の用意すると見えたる時目か約束だぞハトナ乃公の今からアノ船に便乗を頼み行くぞと云ひながら手快く大篋小篋を腰の周圍へ結ひつけて踏みさながら駆け出す、白帆が見えると思きとお前へ喜びつゝ表へ出でんとするその裝をハトナは倉皇と引撥むひき戻されてお瀧の振り拂ひつゝ羅卿さん俟てお呉妻を獨りこゝへ殘して行くとの薄情な少時俟てお呉あれハトナが引き留る衣服が破れる裝が断れる何をするのだえこの黒奴め早くそこを放してお呉

羅卿さんハトナあれ羅卿さんといへど小走の歩みを刻みて腰ある大篋小篋を振り動かして精神の沖の白帆へと飛んで行きたき身を急る金剛力のハトナの腕より引撥まれてお瀧の絶体絶命の聲を絞り妻をこゝへ捨て行く氣かこゝさういふ心と知らぬだこの薄情男善くも〜妻しを欺してこゝまで連れて來て鬼のやうな黒奴の中へ妾を捨て、自分獨り快快と逃げる假令妾も恨があるとも赤子の腕を捨てるやうなこの仕方えハトナ裝を放せ放さぬかと泣きつゝ喚きつ身を苦争けけ流石の羅卿も少しの哀れと思ひたりけんやがて復た踵を回して立ち戻るお瀧の辛くも振り放して急いで例の銀の茶碗瑪瑙の盃種々の小篋を身も結ひつけて駆け出すを今まで無言のハトナの眼を覗らし獅子の吼るがごとき聲を放ちて早くもお瀧と羅卿との間より立ち塞がり髪を飾りし鳥の白羽胸に懸けたる薔草の花を振り落し耳朶の金環揺り鳴しつゝ身を躍らせてやい羅卿貴様乃公を欺した貴様の乃公は何といふたバゴンの島から兩人を小舟に載せて

こへど波したから乃公の望み通りの事叶へるさて復た晴昔の波の上で
小舟が看るく沈む折は何と乃公は貴様の言つた若この兩人を助けたさ
ら貴様のいふこと何さりと聴いてやると放言たのを貴様の忘れか忘れ
のしさい忘れたかバコンの島で乃公の弱いが乃公のこの島王の弟も
貴様を負て居ぬぞさア貴様獨りで行けこの女の乃公の女房指の先でも
觸つて見る直さま攫み殺して啖て仕舞ふぞ先頃海洋の荒れた時流れ着い
た船の中は生残つて居た眼珠の碧くて髪の赤い三人を撲ち殺して爰で他
衆と一處に啖たその味の忘れぬが其後の絶人な啖ぬ貴様の肥大漢を
の股の邊が美味からう潮水で風と洗つて爰で啖たら顔も落やう乃公ア口
又唾が湧て堪らぬぞさアこの女を柔和くコへ残して行けバよし連れて
行くから命がさうさア疾やど亡せろ亡せて行けといひながら力足を踏
み鳴せば因節あたりまで大地に埋みて羅卿の身体に投られし不倒坊師の
やうな三尺ばかり躍り上りて復たへたくと帯を盛みしやうな地は伏し

面を沙の中に埋めぬ、
ハトナハ何々と打ち笑ひその顔を握んで引き立つ羅卿の顔のうち頭を
縮めて兩掌を合せ死して呉ハトナ乃公の命だけ助けて呉決してお澁を
乃公の連て行かぬと詫れハトナハ點頭つゝ手を放す言語の解らぬ此
場の光景を傍より見て容身からざる事と知り震へ上れるお澁を羅卿の見
て『お澁お前を乃公の口へ残して置ねばならぬ泣くも怨むも皆お前の
口から出た災ひ船の沈みさうお前の時はお前がハトナは何ありと言ふこ
と聴くと言ふたばかりで愚かきハトナハ早やお前を女房と心得て放さぬ
を力づくで乃公の輪る智慧を絞れど智慧も出さぬ角乃公の一步先
へ船へ行つて船長も事情を話し何してもお前を喚ぶ泣かず候て』といひ
あがらどつかいと走り去る、
羅卿の泣き號ぶお澁を振捨て、濱邊へと行きぬ船は今帆を絞りて昏のや
うさる波のうへに船を投じ架を懸けたる小舟を御して七八人のそれに乗

りて波を截る松の日も映りて閃めきたり。

第五十三回

腰に結ひたる大篋小篋を揺り動かし朝露あびし半の葉そのまゝの天候の汗を振り落しつゝ辛くも滾滾とつゞく椰子の林の陰まで来たりし陳羅卿のひたと歩を停めて今しも波を截つて駛せ来る輕舸を凝乎と視たり。凝視たる陳羅卿の幾度かその眼を指りぬ指りての瞬きもせず目成の復霞める眼を兩掌も指て急しくも瞬きして再び凝乎と視つめしが俄も身を震はして躍りわがりしその顔の二唇と見られぬほどの驚色怖色腫を回して椰子の木陰も身を藏さんと蒼黄れども靴の底も膠のありて大地もヒツと粘しがごとく貧乏搖ぎもありがたきを兎角して兩手をついて四道の身の狗と成りつゝ溜伏ひつゝやがて木陰の草叢その中身を埋めぬ淺木青綿の袴袖の草の葉の色も紛ひて人の眼をも欺むくべく別てその顔の色の奈よりも青さの時も取りての幸運あるが日は射られたる爛沙の熱さよ

堪へず汀より立ち退きて干草の陰の涼しさも身を置きたる紅壁石壁の同胞眷屬の泡を吹き鉄を掲げて羅卿の裳どもいはず懐中どもいはず這上る羅卿の髪も賣められては身を震せれどこの草叢の蔭より外も身を藏す場所おくれ唯だ苦しき痛さを耐へ忍べり。

輕舸の忽ち汀の沙の上も舳を埋めて舸の中ある人の露はれたり先頭あるの身幹こそ短けれ肥に太りて酒も酔たるやうか丹顔も虎髭荒れたる猪谷の猛腰も長き刀を横たへて濁歩も歩む後より十六七の美少年筒袖袴も身を固めて短刀一口腰も佩びたる輕騎の打拵これや荒磯の鮫太郎さり後より三人の水兵皆銃を手も執りて四邊を回看しつゝ進み来る先さる猪谷のこの時後ある鮫太郎と目挑して何やら低く私語さしがやがて羅卿が潜み藏れし椰子の林の邊を歩みぬ羅卿の息を屏して草の中も頭を埋めたりこの時猪谷高く笑ふて鼻を擗ぬ鮫太郎さん臭いぞ臭い臭い人臭いやく人の臭氣でない際の臭氣だはてさて不思議この島も豚の居や

う等ハあいやア草の葉が風もあいや戦いだわ草の中から黒い兩個の眼が
光る者共其奴を引ッ攫へろ』と號ふや否や後又續きし水兵どもハ走せ寄つ
て頭の上又盤桓を卷きし辯髪を右手よつかんで引き出せば陳羅卿ハ草の
中より滯伏出でたり、

『やア羅卿ハ赤陳尉夫だぞ』と猪谷猛ハ隻脚あげて蹴倒しぬ蹴られて鞠のや
う又轉げ行きし陳羅卿ハ埋めし顔を沙の中より擡げながら眼ばかり光ら
せて『猪谷さん免して下さい私が寶庫を破つたのでないかい皆かアノお龍と
ハトナの仕事猪谷さん耐忍して猛さん耐忍して、あ痛たれた耐忍して痛
た痛た耐忍して』と斷續の言葉の謝罪を聴かばこそ撲てと猪谷の顔の先の
號令又三人の水兵ハ拳の先又唾をふきかけてこの馬鹿者がどばか〜ば
かりばかり〜ばかり〜痛たれたばかり〜痛たれたばかり痛いたばかり
りばかり〜と叩くさまを音よのみ聞けハ脚走の空よびへて響ける餅
つきの杵の音あり羅卿ハ聲をも立てず身を横たへしが涙ハ落て砂よ塗れ

て轉げつゝ申を離れし首蒲團子よさも似たり、
『十分だもう敵く拳を解いて領を擡んで引ッ立てろ』と猪谷の下知の下よ
り水兵ハ羅卿を引き起しぬ羅卿ハ綿のやうある身を起して復倒れ兩掌を
額よ合せたりさア起て貴様のやうお奴の命を奪たどて仕方がないさア起
て屹然と立ッて歩いてガムレン會長の家まで案内しろ、

第五十四回

爰マリアナ群島の大酋長ガムレンハ弟のハトナがバゴンの島より仲ひ
來りしお龍を見て坐るよ心を動かしぬ氣色をソレと見て取りたるハトナ
ハ敏捷くお龍と羅卿とを引き連れて酋長の前より退りぬ酋長ハ我知らず
椅子を離れて門邊の編戸その際まで見送りながら尙三人が肩搦り合はせ
て椰子の林の下路を笑ひつ語りつ行く後姿の見ゆるまで疑乎と視て肚の
底から洩し出す太息よ鼻毛を戦がせて力あびよ身を竹椅子の上よ投げか
くれハ椅子の脚ハ月のやうよ撓りて至痛いやうある音を立てぬ、

「ハトナの生意氣な奴じや幸福兒じやあんな美しい女を女房よして乃公をこんなさま誤ませる兄哥の権力でアノ女を横奪したら泣面作らう吼面しやう啼嘘作らうその啼嘘面を看てやらうかその泣面と吼面を笑つてやらうか」ガレンの椅子の脇掛腕を揺せて思案の態を見たりし奥の方のガレンの姿も何やら會長さまが不機嫌じやお好酒でも飲まして安んじてアノ漣面を笑顔と回して見せるぞと一人の酒瓶一人の盃そのまた一人の盃も盛りたる香蕉を捧げて鞠躬如として寄り添ひながら真黒の顔も笑の波を湛へて紫色の唇も艶めく言葉を含みつゝ仰見くをガレンの俯視しつゝ備げよ三人が三人二瞥と見られぬその面をづらりと駢べて何がをかしうて笑ふかその笑顔が第一氣入らぬ正覺坊の肚の甲よりまだ黒いその面の皮紅螺二個を駢べたやうおその眼その厚い唇の香蕉を二片も裂たやうお見苦しさ海藻を被つて居るやうおその螺髪え、一黠も氣も入らぬわのハトナの女房を看るから一黠も氣も入らぬ酒の乃公が賤

いで乃公が飲むは、蒼蠅と奥へ亡せろとガレンのよく氣色を損じて一人が手より盃奪つて瓶の中の酒を掬ッテ一氣も仰りかくれば女子どもに戦きて一人消え二人消え跡よの唯だ酒瓶と香蕉を盛り盆のみ寂しく残りたり、ガレンの両手を揚げて頭髪を拳亂つて較べて看れば看るほど氣色が悪い正覺坊の肚より黒い顔の色と鯨の背とれより白い彼の顔の美しさ香蕉を兩片も割た唇と紅い花の舌そのまゝの彼の唇の愛らしさ紅螺のやうお眼と宛然齧の眼のやうお鮮明とした涼しいアノ女の眼の、羨ましいおア欲いおアをうかして横奪てやらうやア誰か居るか」と呼べば應と答へて門の編戸の傍に立ちし警固の黒奴顔を半分隠して膝を折りぬ「貴様早くハトナの後を追ひかけて喚び戻して来て呉ろさア疾く」と急ぎ立つれば黒奴の畏まりて戦を片手も身も宙を踏みて一散も駆け出せしが俟間程早く復た走せ還りて編戸のうちを膝行入り顔も赤く唇も急しき言葉を刻みつゝ、

長大變が出来ましたバゴンの島から今一般の軍艦が今彼處へ来て鎗を卸したとの注進に酋長の椅子を離れて眼を睨みバゴンの島の奴隷物顔はバゴンの島を横断してまだ壁らぬ日本人今日復たこの島へ押し寄せて来て戦を挑げんとする定つたマリアナ群島の大酋長の伎倆を見せて膽を挫ぐぞと烈火のごとく怒りあがら親から宮居の前は高く懸けたる警板を割れよと打ち破さぬ

警板が鳴るぞ驚破掃事の出来と彼方の芭蕉林の密此方の椰子の森の下より露はれ出たる黒雲も銃を携ふるあり鬼鮫の齒を植えたる戦持つもあり鮫の骨を研ぎ上げたる假月刀鐵の木の枝を撓めて弓としたるは鮫の筋を陰乾したるを三重と拾つて弦とさし同じ魚の骨を磨いで鐵としたる箭を取り添ゆる者もあり一回の宮居の前は勢を揃えてやがて酋長が指揮の下は隊を組みつゝ海濱へと進み行く林の端より遙く見れば羅卿を先に立てて五人の日本人の姿見えけり

第五十五回

芭蕉の陰椰子の下草も木も皆人かど訝かるばかりの不意の攻撃勇も逸りし猪谷の猛の小猿ある島人の振舞露の珠雨の絲いづれも天から降る水とばかり思ふて居る黒奴どもも今日の紅い雨と醒さい露とを降らせて日本人の伎倆を見するぞ覺悟せよとばかり鮫太郎と三人の水夫と躍りかゝつて進む程は聞えはば幾百人の黒奴どもも鬼のやうな草より草に潜み木陰より木陰へ隠れこれ必死と聞ふを面白しと興を乗りて船より一隊の水兵が銃音聞きて駆けつけしその隙は猛も鮫太郎も三人の水兵も知らず識らず深入したり戦といふものも初ての鮫太郎さりがら故郷に居りし頃より毎々醒さき波のうちに入りて大魚を手搏の業は慣れての對手が無智の黒奴鬼鮫の齒を植えたる戦鮫の骨の刀さながら玩物も均しき武器を以つてこの身体が斬れるか突けるかど敵をおかどりて進む程もやがて銃聲雄たけびの聲の止みたり鮫太郎立ち停まりて四邊を見れば後に

續くものさく見渡すかぎり芭蕉と椰子の林のみあり「やア失策た面白いの
 又氣が乗って思はず大分深入した困ったかア西も東も解らぬ聲を揚げ
 て喚んで見やうか四邊の黒奴も聞かれてハ危険ぞ徐々ど背後の方へ戻ッ
 て見やう」とや、心淋しく草推し抜いて立ち歸る路さき森の中日の光も善
 くの射さず頭の上より十重廿重と掩ひ重なる椰子の葉芭蕉の葉下りさき
 がら葉昏の天又似たり葉の少し疎らある邊り又青く透きたる日を仰見け
 ば思ふよ時の亭午を過ぎて二時とも覺し身の俄か又餓を催し脚も亦痛く
 勞れぬ鮫太郎の手を任せて芭蕉の子を摘み取りてハこれを食ひ充分又肚
 を肥してやがてまた徐々ど歩みを運ぶ行けども「味方又逢はず日漸
 く暮れて鳥島の聲のみ寂し鮫太郎ハハヤ懸悟を極めて周章せず蒼黄がす
 悠然と歩みつゝ路さき路を推し分けて林を行き盡せば林の盡きてそこよ
 蛇より細き小路あり今さし上りたる月の影の下は夢より淡く迂回たり」や
 ア儘どの事路を發見たこの路をたゞ行けハ歸るところが遠途であ

くハ黒奴の棲む村海邊へ出れば乃公の幸運黒奴又逢へば乃公の不運路の
 無くあるところまで行つて見やう」と鮫太郎の歩を早めて行んとする後よ
 り颯のやうな走り來たれる人の影あり、
 驚破やと鮫太郎の腰ある刀の室を拂つて身軀を斜に青眼の刀の構へこの
 間近づき來たりし黒奴ハ五歩ばかりの前より立ち停まり鬼絞の戟を立て
 て眼を光らす聲を立てぬうち斬つて捨てんと鮫太郎ハ一歩づゝ又地を
 縫ひ進んで飛かゝつて大袈裟を研りつくるを黒奴ハ風を窺りし芭蕉の葉
 そのまゝ身を閃して片言の日本語怪しく「おやッお前さんハ彼の鮫太郎
 さんでいかいか善い處で逢いましたえ、危険私の顔を忘れたか善く見て
 呉私ハ寶庫の番人をしたハトナです」といひつゝ三歩ばかり走け戻りつゝ
 名乗たり「うむハトナカハトナからハ許さぬぞ乃公ハ貴様の首を貰うぞ」ま
 ア逸らすと聞いて呉私ハ悪いことハ爲さぬ皆さアノ羅卿厨夫が悪いのだ
 まアその怖い刀を室に入れて呉私ハ日本人の味方だ日本人の味方よさッ